



淚

生田葵山著



紅
淚

玉乘小屋

(一)

生田英山人

「さあ被入い、只今が恰度い、さあ被入い。」
 浅草公園第六區の、見世物小屋の有る邊は今が恰度人の出盛りなのである。囁し立てる鐘、太鼓、其れから只姦しいばかりと云つた、樂隊の響きと、相和して人の心を、無暗と惑亂さし、逸樂の方へと誘ふて居る。冬の天空の、澄き通つた絹の様な美しくい中からは、稍西に傾いた柔かい光線が斜に落し懸けて来て、此の賑はしい一廓を黄金色に照らし、歩む人々を、を潤ひた様な心地になつて居るのである。池を前に控えて、花屋敷、十二階へと通ふなり宏い小屋の、看板には玉乗曲藝のいろくを描いて、端の所へと持つて住つて

矢張り四十の阪を越えて居るのであるが、打見た處卅五六としか見えない若裝飾なので稍面長の顔に薄化粧を施し、唇に紅を點し、今結つたばかりとも思はるゝ丸鬘で、奈何しても左袂の果の身と云つた態度なのである。

「もう二時ですよ、昨日も恰度今時分もう……来るでしようよ。」
云つてから意味ありげに夫の顔を瞞る折しも。

「旦那。大層今日は緩くちや御座いませんか。」
木戸番の男に追従云はれながら這入つて来る人影があつた。

(二)

夫婦は云ひ合した様に其方へと回顧つたが噂して居た、其人なのである。黒つぱい銘仙の下に木綿更紗の下着を重ね、矢張り銘仙の羽織を端折、稍古ぼけた茶色の帽子を頂いて之も餘り新らしくない一本縷の外資の毛付の袴を立て、着て居る。
色の黒い、扁平の顔付で、眼は小さいが鋭く、鼻は下つて居て、右の方の頬には、痣の様に小さい黒子が五つ六つ塊々として印して居る。鼻の大きさは、鼻の厚い、其れで居る背の低い、細い。

も醜い風采であるが、もう六十近い年齢の、顔二面に小皺が刻まれて居るが、然して下劣くは見られないのである。

夫婦の顔を見ると、此方から微笑ひで懸つて、氣輕く、帽子を外つたが、頭はもうひとく禿て居た。

「大層遅いぢや御座いませんか。」
座主の藤兵衛は丁寧に辭義を返しながら聲を懸ける。

這入つて来たのは、別段其の聲に返辭するでもなく、至極打解けた、何だか自分の脚點を先方に擱へられて居ると云つた様な風采で、更に些と頭を下げた。

「被入りました。」
と、夫に續いても澄が挨拶したのである。

「今日は——。」
と、這入つて来たのは口を切つたが、澄は何か意味ありげに、自分の顔を覗き、思ひ出した様に

「ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、」

笑ふのに、ニヤリと微笑を返し、其の儘奥の方へと足を向けるのである。

「あ、熊さん、横田の旦那が越しなすつたから、御案内申して御冥な。」

妻の澄が、聲を懸けたのである。

「えーい、威勢よく返辭をしながら、云ひ付けられた熊藏は、玉乗一座坂東花之丞と兩襟に二行に染出された印半纏を着た五十近い、丸坊主の身を此方へ運ばし、

「やあ、被入いまし、今太夫の出幕の合なんです。」

世辭を云つて、今しも下駄を脱いで、下駄札を受取つた横田と云はれる客を熊藏は彼方の後敷へと導くのであつたが、木戸場に居る夫婦は其の後姿を睨り、少し嘲笑の色を帯びた、微笑と眼を交すのである。

舞臺の上には、華やかな鳴物が響いて居て振袖を着た拾四とも思はるゝ小娘が貳人白く塗り上げた球の上に乗し、何か芝居めいた表白を云ひ合ふて居るのであつた。が、横田が案内せられて座に着き、緩然と身構へた時には、もう果て、了つて居て、表側に并んだ一列の樂隊が、男ましげに鶏の林の譜を奏し初めた。

茶を運んで来たのは、熊藏でなく、矢張一座の名を染抜いた、法被を端折つて居るが、芝居者

の仕着せらしい、意氣な小紋染の下着に赤緋の唐襦を重畳のものと、七分三分の尻端折をした卅四五の鯛背なのであつた。

(三)

「能く被入りました、今日は馬鹿に御温や御在りませんか。」

「やあ、今日は随分の入りだね。」

「太夫の人氣は豪氣なもんですからねえ、昨日たつて一昨日たつて、御存じの通り小屋が弾じ切れさうな入ですからねえ。」

「全くだねえ……ねえ、七さん、彼方に座つて居る、あの書生ありや何だい、乃公も毎日遣つて来るが、あの男も毎日映さず来て居るぢやねえか。」

「何處にです……へい、あれですかい、ありや……。」

猶も七之助の語り續け様とする折しも、舞臺は拍子木が這入つたばかりか。

「七さん。」と呼ぶ聲がしたので、七之助は急いで客の側を去つて了つた。

「永らくの間打躰しまして、嘸かし御耳だるう御座いませう、従ひまして此處許御覽に入れ奉

るは、娘道成寺玉乗り踊り、勤めする太夫の儀は總一座々頭坂東花之丞、太夫身仕度の間は、今一囃しは御容捨……。」

「チヨン／＼チヨンを拍子木で切つて、立付け袴に、唐更紗の筒袖を着た口上云ひが、後へと身を曳くと、今度は表側に並んだ騒々しい樂隊でなく、三味線の二挺彈が上座の床から起るのであつた。と、下手の樂屋口の揚幕が捲り上げられて、振袖の美しい姿がちらとばかり見えたが、直ぐと往來から内郡が見えない様にと仕切られてある幕の彼方へと身を隠した。見物は切りとごわ付いて、べら／＼とくる聲が此處彼處に聞え、其の間に茶を啜る音、何かしら觸る物音と雜つて可なり森しの中を更に茶を賣る聲と菓子を買ひ付ける聲とで騒がして居る。口上云ひの男は、可笑しな身振りで、些と幕の彼方へと引込んだが直ぐと出て来て、再び木を入れたが、床の三味線ははたと鳴り止んで、

「太夫身仕度を相済みませれば、先づは正面迄控をさせます。」
聲が座の隅々迄も行届いたが行届かぬ先に、どいどん、かん／＼と、太鼓の鳴物が這入り其の鳴り物に連れて、總一座の座頭坂東花之丞は静々と舞臺の正面へと頭はれ出た。何れは唐縮緬が金巾であらうが、袷の地に金の縁取りの袴を着た太夫は、身仕度好に

能く似付いて又となら飽麗に、思ひ切つて根の高い島田藍、袴の裾の長い、御立に添うて一倍の優麗さに見えるのである。二重縁の鈴張つた袴の表も、何處迄も人の心を引付けるばかりか、恍然と酔はじめる力を持つて居るのである。鼻筋の通つた、小さい可愛い口元なので、奈何して退屈美しいのが想うした身に成果であらうかと思はしむる初々しい羞恥さへ持つて居るのである。

「チエスト……。」
可なりに大きく叫ぶ聲が聞えた。

「やあ……男殺し……。」と叫ぶ次に
「浅草の人魚……。」

と、怒鳴るもあつた。馴れたもので、那麼聲に委細頓着なしに、花之丞は、静々と身を客の方へと進めて、恭々しく頭を下げた。

「御目見えと禮な相済みませれば、早速藝當に取懸らせまして御覽に入れますう……。」
口上云ひの男が更に恁う云ふと、静に頭を上げ、些と媚びる様に客の方を、其處此處と眺め廻し、右手の隅に座取つて居る横田と云はれた年寄の客の方に眼を付け、其れから更に其れとは

少し右へと瞳を遣つて、些と口元に媚びる様な綻を見せるのであつたが、其處には錦仙の着物に黒木綿の紋付きをばをつた二十四五とも思はる、稍苦み走つた顔付の剃り立ての髻の痕青々と、眼の鋭い、頬の突き出た薄唇の大きな口元の男と、今一人、其れとは二つばかり下とも思はる、何處迄も優形の、色白で、眼元の可愛い、口の引締つた鼻の隆い、頭髮を奇麗に分けた、何處迄もニヤけ切つた書生俳優とも見らる、男の、之は糸織に同じ縞物の羽織を纏つたのが座つて居るのである。

(四)

見物の中の神経の鋭い者には、花之丞の此の愛嬌の中に、只ならぬ意味が含まれて居る様に感じたであらうが、其れと知つて、一番手強く身に痛みを受けたのは、助藏の方である。と見ると、其の稍落窪んだ眼に嫉妬深い思ひを潜め、鋭く、花之丞が最期の一瞥を與へた書生體の貳人を憤めるのである。先刻助藏が、男衆の七之助に指さして罵つたのも、此書生體の貳人なのである、其れと知つてか、此方の貳人も、花之丞が落付た身の上を、玉に懸らうと見物の方に背を見せるや直ぐ、助藏の方へと顔を捻ぢ向け、之も反響的な一瞥を遣つて、鋭く眼を輝かし

て助藏の顔を覗く。
よし年を老つたにしろ永年銀をた腕節、身體、何の青二才などに負を取るものかと云つた様なのが、助藏の思ひなのであらう。炬燵へでも藻漕り込んで孫の守でも爲て居るに、いゝ年恰好をしゃがつて毎日小屏退入りも凄まじいや、足元に棺桶が轉がつて居るのを忘れたのかと云つた様なのが貳人の書生の思ひなのであらう。猶暫時は、兩人とも負けず劣らず、身内の力を眼に籠めて睨み敵べして居たが、何としても盛春の血に満ちた若者に、血の酒れ懸つた者の勝たれ様術はない。其れとも年寄の分別早く思ひ回したのか恰度舞臺の中央シヤン／＼シヤンと、三味線の涼い音色が響いて來たので、其れを機會に助藏の方から、う大人しく眼を回して、舞臺の方へと瞳を遣つて了ふと、此方の貳人は眼を見合して、然るから軍に勝つた者の様に、小氣味のいゝ嘲笑の影を頬に浮べ、互の心に淡い愉快を感じた事を、眼色に通じ合ふのである。
舞臺の板の間に音を立て、白い大きな鞠は滑り出で、其の上の花之丞は、然ながら昔物語の御姫様の身の態度で、足を動かせども裾を拂はず、しゃんと立つたる立ち姿、腰細けれど、なへず、穿つ白足袋の下の球を白雲と見て、頭に金環、手に丹藥、すら／＼と何物か見えぬ貴

い手に押出された様に、舞臺の端、あはや一髪で將に、土間へ落ちなれと思ふ刹那、するり身と、球を回して、此度は右手に、横一文字、彼方に行くよと見る間に、又もヒラリと回して此方へと乗り廻す様、何の事はなく空を馳ける様に見えて、見物の一同は、其の姿の美しくいと、技術の熟練とに見惚れ果て、恍然とした形。

花之丞は二廻り、三廻りと、舞臺を縦、横に乗り廻したが、再び正面の座に立ち直り、球の上で吃とした見柄となると、其れを機懸に、上座の床から更に静な三味線が鳴り出して、道成寺の地が初まる。

唄「鐘に恨は數々御座る、初夜の鐘を撞く時は、諸行無常と響くなり、後夜の鐘を撞く時は是生滅法と響くなり、じんじやらの響は生滅を爲、入相は寂滅爲樂と響くなり。」

唄はもとより悠る小屋に備はるゝ者の巧な理由はない、節廻しの拙いので、殆んど成得ぬ處もあるのであるが、鐘のある割合にい、弊なので、悠らした小屋へ這入る者には、其の耳を満足さすに充分である。美しくい姿の花之丞は、其の歌に連れて、指す手、引く手、重げな球を左も軽々と右に、左にと自由自在に轉がして、長い振袖を胡蝶の羽の様に振て舞ふて居る。

(五)

土間も棧敷も乃至立見の連中迄も、水を打つた様靜まり返つて、其の巧な技藝に見惚れて居る。三絃の糸を拂つて鳴る音は、然ながら見えぬ糸とも見え、其れに操られて花之丞の手足が動くとしか見えなない歌は些と途切れて、花之丞は逸早く球から降りると、稍暫は響きの絃のみ鳴り響いて居たが、纏て賑かな鳴物が添ふて、例の鐘のある聲で。

「梅にさんく櫻は、いづれ姉やら妹やらわさて云はれぬ花の色……。」
この歌に連れて、立ち上つた花之丞は何時の間にやら淺黄地の衣裳を變へて、頭の金冠も花笠と變り、右手と、左手とに三ツ重ねの花笠を持ち、再び、球の上の踊りが初まつたのである。見物はもう了然と酔て了つた様になつて、眼の瞬さへ惜む様に見えて居るのであつたと、不意に後の方で。

「氣を付ける、眼が見えないのか。」
聲高く怒鳴る聲が聞えた。
舞臺の直ぐ前に居る者の耳に迄も聞える程の聲調子なので、見物の一同は思ひ懸けなくも夢か

ら覺めた様な態で、云ひ合した様に其方を回顧るのであつたが、半ば頭の禿げて居る憎さげな老年の立ちはだかつて居るのを、二人の青年の座にありながら罵つて居るのであつた。

云はでももの事老年は横田助藏なので、二人の青年は、先の助藏と睨み合ひをした書生である。助藏が用達しにと人座を分けて進む時、然して其處を通らずともよいのに、老年の身の圓々しさは、熊と其の側を通り、自分と同じ様に近頃日毎の様に來る二人の若者の様子を見やうとして、計らざるも足元に注意を欠き、二人の前にある茶瓶を蹴返し、ざんぶとばかり其の生温い茶を二人の書生の裾、足に浴せ懸けて、其の邊を水浸しにと爲たのである。

「やあ、奈何も濟みません。」

「濟むも濟まないもあるか、氣を注げる、唐變木奴」

「お静に願ひます。」

水場の方から聲が懸つた。

「何を云つてやがるんだい、お静も無えや……こら、巻破爺、奇麗に拭つてから通れ……。」

助藏は少し顔を赤くし、手巾でも取り出さうと思つたらしく袂へと手を突込みなどもしたが、

持合せないと見え、只もう一重に頭を下げて居たが、此の雜言に、少しは憤としたらしく、顔を上げて、濡れながらも未だ負け惜み強う座つて居る二人を上から見下すのであつた。

「何だい、人に茶を打懸けながら膨れ面をしやがつて、何だい。」

云ひながら、先づ苦み走つた方が立上ると、續いて、色白の方のも立上るのであつた。

「東西〜イ。」と舞臺の方から懸つた。

「静にしる、愚圖〜しやがるとつまみ出すぞ。」

とも懸つた。

「外へ引張り出して仕舞へ〜」と怒鳴る者もあつて、見物の一同は騒々しく、肝要の舞臺へ眼を遣る者は無く、早や憚る事あれかしと待設けて居るらしい風體のが、ばら〜と其處此處からと立ち上つて、其方へと馳け付けるのもあつて、小屋は俄に色めき立ち、舞臺の藝は些と途切れの體で三味も鳴り休み、花之丞も球から降りて氣遣はしげな眼付きで、其方を瞞つて居るのであつたが、程なく座方の者三三人、七之助も雜ちつて、書生へは重ね〜と訛言を云ひ、助藏を彼方へと連出したので、事は争ひなく納まり、廳で再び踊りが初まると、二人はつゝと立上り、履物を受取つて木戸を出るのであつたが、左へと取つて右に花屋敷の方へと曲る

のであつた。

小料理屋

(六)

仲店を這入つて、左に折れた第三區の、右側の土塀を控えた前に、即席御料理と印した磨硝子の行燈看板が出してある些とした小料理屋がある、夜は彼是九時過ぎでもあらうか、表通には未だ可なりの人足があつて、六區の見世物小屋の鳴物も閉ま、銘酒屋素見さの若い衆が、雪駄ちやら〜威勢よく唄ふ鼻歌を外にして、其の離れ間の六疊の小座敷に、三品ばかりの小鉢を前に酒吸み交しながら用事ありげに語り合ふて居る二人の客がある。

一人は花之亟一座の座主の河崎藤兵衛で、未だほんの二口三口遣つたと云つた風情で頬が少し赤らんで居るばかりである、其の隣座にはもう三本ばかりの徳利が並んで居る、今しも前に置いてあつた盃を取るが早い、一口にぐつと呑み乾し其の儘前の客へ差した。

前の客と云ふのは、年産彼是卅二三の色の黒い、下も睨の眼の小さい、眉の太い、頬骨の出張つた一癖ありげな男である、上下とも双子づくめの前掛けを着纏めて、藤兵衛が膝を崩して居る

に係はらず、さちん座つて、今しも差された盃を受け、並々と注がれたのを、口の方へと持つて行き、半分ばかり口に下して置いた。

「此頃は大層景氣がいぢやありませんか。」

箸を取つて、前にある肴を一口頬にしながら双子づくめの前掛けは云ふ。

「悪い方ぢや無えんだがね……。」

づいしりとして藤兵衛は答える。

「何でしやう日に百二三拾兩は揚るでしやう。」

「揚るのももう少し揚るがね、何しろ雑用が大變だからねえ。」

「其れも然でしやうね……ねえ、近頃横田の旦那が貴方の小屋に這入込むと云ふ噂を聞いたんですが、花之丞の太夫に目を付けて居るんでしやう、あれで居てなか〜好色漢なんですからねえ。」

「は、は、は、は……お前さん誰からお聞きなすつた、些い〜見えるがねえ、まさか那廢事も無からうよ。」

「奈何して〜……いゝじやありませんか太夫を押付けとさやいつでも一箱や二箱位は動かさ

れるはやありませんか。』

『は、は、は、は、……。』

藤兵衛は更に、事なげに笑つて見せたが、思ひを變へた風で、

『其れで辨さん、今云つた事は奈何うだらう。』

『然うですねえ……奈何もあれでは兎ても承知しやすまいと思ふんです、せめて此處で貳箱入れて下さつたらしくと思ふんですがね。』

『そんなことを云つたつて、兎ても追付さへ無えんだから……一つ何ぞか甘く遣つて、お呉んなさいな、月が更れば、少しは眼鼻が付くんだからねえ、奈何も此月はいけねえんだ。』

『だが家の親方に云せりや、期限は疾づくに切れて居るんだが、御心變だてらに、貴方が云ひなりに延したんだつて、今朝も、呟いて居ましたからね、私も中へ這入つて實に困るんです。』

『然うだらうつて。』

『奈何でしやう、せめて一箱だけはいくらですから入れて下さいな。然うすりや、私が奈何とも話を付けて見まじやうがね。』

云ひながら、辨吉は、其のチーリリ、の煙草に吸口を付けながら藤兵衛の頭を喰ひ喰ひるのである。

ある。

(二)

『ウム……。』と云つたばかりで、藤兵衛は、盃を口の側に持つて往つた儘、唇に觸れ様とはせず考を込むのであつたが、辨藏は、煙草に火を點けながら、下から覗き込むのであつた。

今年の春の事で、藤兵衛は、未だ花之丞を抱えぬ先き、失敗しつゝた擧句、高利の金で暫つと諸々方々を喰ひ止めて居た最期の綻びが切れて、もう奈何でも都落ちとの姿に成果てた時、山の手に住む旦那筋なる辨藏の主人の伊藤義則と云ふ者から恩惠的に巨額の金を借入れ、其れで諸々方々の火の手を押留め得たので、其の頃、花之丞も手に這入つて連は次第に春に向ひて來たのである。藤兵衛は少し考えた風をした後、顔を上げると、

『ぢやよろし、二三日と云つちや、何だから……こうつて』
更に考え込んだ後、

『十七日の日迄待つて貰ひたさ。』

『十七日と云ふ、未だ五日あるでしやう。』

『まあ、然して貰ひたい、義則さんに然う云つて……旦那は未寝で居るんですか。』

『いえ、奈何も此の頃はいけなくつて、気が短くて、無暗と怒り付けるんで困り切るんですよ。』

『然うかね、そいつあいなね……奈何か其處んことを辨さんの口で一つ甘くやつて呉んなさい、埋合せは吃とするから。』

『然うですねえ。』

辨藏は、煙草を些と吸つて、首を傾げたが

『其れぢや然う申して見ませう……かねえ藤旦那に如才はないでしやうが今ね、些と奇麗になすつときや、家の旦那はあゝした氣象でしやう、後が利きますからねえ、昨夜もねえ、床の中でお内義さんにねえ然う云つて居ましたつけ、藤兵衛さんにも困る、彼の小屋は儘か此月限りに改築を命せられて居るんだから今に纏つた金が入るに違ひねえに餘り眼先が見えなさ過らあ、今些つとの間奇麗にして置さや、次の口を斬る譯に行かねえんだからつて……然う話してましたつけ。』

『然うかね、那麽事を話して入らつしたかいは、は、は……。』
心持ち善さうに笑つてから、

『全くだ、餘り眼先が見えなさ過らあねえ、辨さん旦那の機嫌を悪くせずに頼む何れ其の中に、嬪の奴を伺はすとしやうが、乃公も近い中に旦那にお眼に懸りに行くと申し上げて呉んなさい。』

と云いながら、藤兵衛は更に盃を辨藏に差したが、用事も果てたのか廳で二人は勘定を済まして外へ立ち出るのであつた、と引違ひに、

『被入い。』

と、景氣のいい女中の聲に引連れ、賑々しく笑ひ聲も交ちつて、此處へ這入つて来た三人の客があつたが、先に立つたのは、横田助藏なので、續いては花之丞。舞臺を済して来た見え、頭は矢張晝間見た高島田の儘でも納戸色の薄羅紗の吾妻コートに、茶色フラシテンの肩懸け、飽近意氣な令嬢風に装ふて、其の後から、藤兵衛の女房の澄が、之は晝間の儘の姿で引添うのであつた。

三人は今しも藤兵衛が去つた後の座敷へ通るのであつたが、下膨顔の此家の女中はかゝんく
と火のあこつた火鉢を運んで来たが、知つて居る顔と見え、お澄に向ひ、丁寧に頭を下げ、
『お出でなさいまし。』

と、嫣然としながら挨拶するのである。

『馬鹿にも寒いのねえ……。』

と、お澄は火鉢の方に躑躅りながら、袴巻にして居る白い絹の手巾のすつたのを些と直しなが
ら女中の更に手を突いて、

『お注文は何に致しますせう……。』と聞くのに耳を借して居たが、助藏と花之丞との顔を等分に
眺め、

『貴方何に爲るんで御座います。』

『乃公や何でもいゝんだが、花ちゃん何がいゝの。』

『私ですか、私、當統にお腹が充満なんですから。』

『そんな事を云はずにさ、ねえ旦那。』

と、助藏の顔を覗ふのであつたが應て、話が極り、二品三品の下物を通すと共に之は花之丞の
注文で茶碗蒸を一つ通す

『花ちゃん本統に美しいなあ。』

助藏は今初めて花之丞を見た様につくくと思ふ云ふ。

『旦那まあ然うせずと、外套をお脱ぎなさいましな、袴巻も取つて……まあ嫌な、帽子も脱つ
て被入らないんだわ、花ちゃん脱つてお上げ申な。』

『は。』

と花之丞は手を延ばして、助藏の被つて居る帽子を取るのであつたが、

『憚りなま。』

と、助藏は小聲に云つて、

『外套は寒いから着て居ませう。』

『ちや、袴巻丈お取りなさいましな。』
お澄は言葉を重ねる。

『ぢや然うしやう。』

襟巻を外したのを花之丞は受取つて甲斐くしく、自分達が今しがた睨いだ、吾妻コートと一所に床の間に置くのである。

お納戸地の中柄も召の下に、更紗縮緬の下着を重ね、風通の中柄の書生羽織を端折つて居るのを、天井から釣した電気燈は、目も燦々迄艶麗に照し出し、然ながらに浮世繪の美人畫が此處に掛け出たかとも見らるゝのである。何處となく稚氣を帯びた様な風情が、老年の助藏の眼には一層可愛く見えて、凝と睨らすには居られなかつた。

『まあ、旦那つたら嫌ですよ、人の顔なんか睨み付けて……。』

『なに、睨み付けて居らつしやるんぢやないよ、見惚れて被入るんだわ。ねえ旦那。』

『はは、は、は……。』

と、助藏は高笑ひしながら。

『まあそこいらの處だらうねえ。』

「お行儀の悪い、人の顔なにか見るもんぢやありませんよ、お柔順しく前方向いてしやんとし被入いませ、玄の子に嫌はねえですよ。」

『いしぢやないか花ちゃん、美しいから見惚れられるのでしやう、私なんかもう一遍人さんから見惚れて貰いたいものだねえ。』

『まあ、お内儀さん迄一所になつて……。』

云ふ折しも、

『お待ち遠さま。』

次の間の襖が開いて、お注文が通つて來た。

(四)

助藏が先つ盃を上げると、お澄は續いて花之丞へと促す。

『御内儀さん私は些ども不可ないんですから。』

盃を膳に伏せたまゝ手に取り上げない

『那麽事を云はずにさ、ほんの印でもいゝんだから。』

冷い思を眼に見せて、お澄が云ふので、花之丞は詮方なし盃を上げ。

『ほんのちいとばかり。』

『あゝいゝとも、女同士だから酔はして聞きたい寸法もないんだから。』
注ぐのを少しばかり受けて、花之丞は紅を彩た可愛い口の邊りへ持つて行くのを助藏は盃を右の手にしながら、餘念なげに噴つて居る。

『あら、また旦那様ですよ、見て居ちや。』

『まあいゝぢやないか、そいつを呑み乾したらお爺さんの思ひ差しを受けて貰いたいものだ。』
『嫌ですよ、私全くちつとも不可ないんですから……御内儀さんに御差しなさいまし、ねえ御内儀さん、私に代つてくださいな。』

『だつて旦那は私ぢやいけなかつてあつ被仰るぢやなから。』

『知りませんよ、お内儀さん迄が。』

花之丞は呑み乾した盃を膝の上に置き、愛度氣ない態をして、二人を見上げるのである、助藏は心地快く高笑ひをして、

『其れぢや、御内儀さん……。』

と、持つた盃を盪に差したので、花之丞は忙て、瓶子を取り上げ、端々と注ぐのであつた。
『有難う。』とばかり受けて、お澄はなる口と見え、一息に半は明けるのであつた。

助藏は下谷の南稻荷町に住宅を構へて居るので、もとく下總の海岸の産れであるが、幼少い時から藏前の伊勢屋と呼ばれた酒屋に奉公し、御用聞きとして得意廻りをした擧句、暖簾を別けて貰つて、一戸を構へ、朝に星を戴いて、家業を勵んだのが、仕上げる原因で小金が廻る様になると、地が些と目端が利いて居る丈けに、格安の地面などを買ひ込んで今何萬と呼ぶる身代を造り上げたのである。女房との間に三人の子持ちで、總領の忠告と云ふのに世を譲り渡し、自分は次男の世話がてらに、分家した其の弟の助次郎と云ふ之は薪炭屋をして居る方に行切つて居るのであるが、末の娘を外に嫁に遣り、先年女房を亡すると、其れから些いゝ酒の味も知る様になり、其れに連れて慾の眼も出で、息子達に密々に金を貸し附けて其の費用に振り當て、居ると云ふ、轉んでも只は起さないと云ふ寸法の筈なのである。
座は大分酒も廻つて、お澄の眼元もほんのりと色づき、助藏も餘程機嫌らしく、花之丞も無り強ひに、眼の縁を少しばかり紅くして居る。

『本統に若い中は二度無いと云ふが、私ももう一度太夫の様な年恰好になつて、世間からわいゝ騒がれたいもんだねえ。』

『またお内儀さんのお株が初まつたわ。』

花之丞は、媚を含んだ眼でも澄を覗る。

『だが、何だせ、いくら若くて美しいたつて、這麼老爺に惚れられて、附けつ廻しつ口説かれるのも嫌なもんだらうせ。』

助藏はぢろり、花之丞に横目を使ひながら云ふのである。

『然うでしやうかねえ、——私は然うは思はないんですよ、そら若い中は、誰しも矢張り、若い人に目が付いて大騒ぎをするもんですが、其處が考へ處で、『若い人は奈何も實が無くつてねえ折角一生の芽の生さ處を盡なした、爲る人が、私等知つて居る人の中にも、澤山あつて見ましたから、私は年寄の方が、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ……。』
と之も花之丞の氣色を伺ふ様にして澄は云ふのである。

お島七之助

(一)

花之丞等が小料理屋を出て、別れ〜に家に歸つたのは、十一時過ぎであつたが、夫れから卅分程経つ頃の事で、さしも賑はしい淺草公園の御堂裏も、冬の夜の早や霜は自ら地に敷いて、

大空に輝く星の影がさら〜と真裸の銀杏の樹の枝を透して見えるのが、物凄まじい、些い些いと横町の暗ざれから人影が出て、其れが幽霊の様に、軒瓦斯に映し出されて、ヒヨイと何處かに消えて無くなる、仲には頓間な聲を擧げて〜り節の足許の危い兄さん達もあつたが、骨迄も染み込みさうな北風の嘯ぎに胸震をしては、急ぎ足にフヒと行過ぎて了ふ、が未だ〜三味線の音の音が何處かしら洩れ聞えて来て、媚めかしい女の笑ひ聲が奈何かすると風に送られて聞えて来る。と、不意に、

『土手は寒かる、着て行かしやんせ、主が風引とや共難儀よ……。』

ゲーブと、酒の勢を借つてあらう、滅法美ひ聲で唱ひながら彼所の萬盛庵の方から来るのは花之丞の座方の七之助なのである、晝間見る法被姿でなく、双子づくめの上に銘仙の羽織を引懸けて、茶の中折帽さへ被つて居るのである。

『ちゝ寒い〜、骨迄染み込みやがらあ。』
獨言ちながら、少し急ぎ足になつて、平内様近く迄来ると、彼方から駒下駄の女の足音がして来て、近くと共に、

『七さんぢやないの。』聲を懸けるのである。

『誰だ』』

七之助は、些と足を緩め、彼方の電氣燈の灯で透して見るのであつたが。

『やあ、しほ公女のかい。』

『あ』』

近づいた女は嬉しさに返辭したが。

『少しさこしめしたと見えるね。』

傳法肌に云つて退け、

『ちう寒〜……』

と、身體を七之助へと擦り付けるのである。

『お造酒らずに奈何して居られるもんか、此の寒さに……』

云ひながら肩を并べて歩き出した七之助は些とあしまたの方を回顧つて、

『這麼晩くに何處へ往つたんだ』』

『え』』

と、云つて、あしまたは七之助の顔を覗つたが、

『お前さん何處で呑んだんだい。』と言葉を外らすのである。

あしまたは、七之助と同じ座方の湯番の熊藏の女房なので、夫婦共稼ぎと云つていゝ、子供を一人も持たない身で、猿芝居のチヨボ語りをして居る女なのである。もう四十を二つも超へて居るのであるが、自分よりも貳拾近くも年上で、律義者として通つて居る亭主と一所に千束町の裏長屋に住つて居るのである。自分一生の願ひは、奈何かして、一度なりとも芝居の下座を彈きたいので、親猿や小猿共が、頬被し、かつらを付け、或は綺の財布の興市兵衛、朱鞘の大小落差しの定九郎、然でなくば日高川の清姫の愁嘆場に、傘隠して上下着けての、綱渡りの藝當と、種々に表白を述べ、

『ハアコリヤ〜サア……』

と、愚聲をするのに眞に飽き〜したと云ふて居るのである。熊藏とは、何方から手を出して寄り添ふたか分らぬと云ふのではなく、先の亭主に死別した後、獨身者で暮して居たのを煩く口説かれてなつたのであるとあしまたは云ふのであるが、連添つてからが、もう廿年、今は七之助を、夫に隠して情夫扱ひにして、其の儲けを仕舞ひ込んだ財布の中から小遣を送つて楽しんで居るのである。

七之助はあしまと肩を並べて三四間歩んだが、不圖思ひ付けた様で

『本統に今晚の様な氣持の晩に、一太刀サッリと浴せ懸けて一扶り抉つて殺害して了つたら甚
麼にいゝ氣持だらう。』

何かしらいたく激昂した體で、云ひ放つたのである。

(二)

『また七さんが初まつたよ。何だつてそんな嫌な事を云ふの。』

『云ふの、云はねえのつて、那廝心持がするから爲方がねえぢやねえか。』

『だつて、前さん、人が聞いたら奈何だらう、變に思ふぢやないかい。』

『人が奈何う思はうが、斯う思ふが係らもんかい、七之助は男だ。』

『何も那廝に威張らなくつてもいゝぢやないかい、お前は本統に酒癖が悪いんだよ。』

云ひながら、つくづく七之助の顔を、折からの軒瓦斯燈と眼る。

『酒癖が悪いの何うのつて、人間長々生きて五十年短かけりや明日が日も知れぬえ、思ふ
ま、暴れに暴れ抜いて倒りやそれを本望なんだ。』

『お前は本統に今夜は奈何かしてるよ。』

『奈何してるもんか、酒を呑んだばかりなんだ。』

『その御酒が悪いんだよ。』

半ば笑みを含み、袖の下で七之助の手を取るのを強く動かしながら、聲のみ邪慳にも鳥は云ひ
放つ。

『酒が悪けりや奈何するんだい、今頃は花之丞の畜生、温い寢床にふんぞり回つて寝て居や
がるだらう。』

『花之丞さんが寐て居られるのが奈何したんだい、お前えそんな怖らしい事を御云ひでないよ
人が聴いたら變ぢやないかねえ。』

『ヒ、……ッソ。』

と、七之助は喉を鳴らすのであつたが、あしまの問ふ言葉に返辭もせず、

『畜生奈何するか今に見る、負けるもんけえ。』

と何か堪え難ない心に憤満のある様に、聲高く獨言に叫ぶのである。

あしまは、七之助の何處か心に苦痛のある様に悶搔くさまを見て、其の人の善良、遲鈍な心に

も、何か感じたのか、

『七さんお前奈何して今夜も酒をお呑みだつたのだえ。お前、先達ての喧嘩から、酒は一生斷物だつて、其れから些つともお呑みぢやなかつたぢやないかい。』

『ウム……。』

七之助は、足元危げに翻めく身體をお島の方に靠せながら言つたが、何を感じたものか、心安う折れて、

『あゝ、然うだつたなあ。』

と、云ひながら、霜白く地に敷いて、骨迄も碎かんばかりに浸みる寒い夜氣の中に、酒臭い息を一つ、長う吐いて、降らんばかりに燦として數多く輝く星の大空を瞻仰るのであつた。

(三)

『七さんお前、花之丞さんに御座つて居るんたらう……然うでも無けりや、然うく云ひ出すもんぢやないぢやないか。』

『また初めやがつた、いゝ年配を爲やがつて嫉くなんて止しやがれ。ゲエツプ。』

と、又も喉を鳴らし、横を向いて、ふつと唾を吐く。

『嫉くなんて、那麼のぢや無いんだが、でも怪しいもんよ。少し奈何かすると定文句なんだからねえ……花之丞くつて。』

『止せやい、茂棒な、見つとも無えや。』

『見つとも無くないよ。お前は屹度御座つて居るんだよ。』

『御座つて居る。』

と、云ひ切つて、凄い眼附きで、おしまの容子を些と窺ひ、何を思ひ出したか、

『あは、は、は……。』

洪然と笑つて、

『お前には然う見えるかい。』

と、穏な眼附きになるのである。

『然う見えるも、見えないもありやしないうに定つて居るだらうぢやないか……。』

七之助は更に笑聲を續けたが、飽迄も自分の情婦のおしまに心を許して居ると云ふよりは、侮蔑的の心を持つて接する態度を見せて。

『口を酢つばくして今迄に云つたぢやねえか、己等最負なんだ、大の最負なんだ、花之丞は最負役者なんだい。』

『怪しいもんだね、最負なら、何も憎がらなかつていゝぢやないか。』

『其處が其れ人情てえもんぢや無からうか……情婦ぢやなし、戀ぢや猶無し、只何となく……』
都々逸の文句を、節廻しのいゝ意氣な中音で唄ひ出し、

『思ひ切れぬが……』と、唄つて、

『これぢや矢つばし、怪まれても爲方がねえや、だがねえ、あゝあしま、那麼のぢやねえんだから、よう、まあ堪忍しなつてええ、もう云ひ出さねえから。』

『あゝ、もう云ひ出さねえがいゝよ、俺や花之丞さんの事を云はれると、お前の定り文句だと知つて居るけれど、ぶづり〜と切つて見てえの何のと、當て付けがましく聞えてくさ〜して了うから。』

『全くだ、だがね、あゝあゝ少し酒が身體に廻つて來ると、一つ惚う人を殺害けて見たくてならねえんだよ。』

『ほんとも前は亂暴だよ、もうそんな事云ふのはあゝしつておのに。』

『止そう〜這麼事云つても前の氣持を悪くするにも當らねえから……だがねえお島。』

『あゝ。』

『奈何したもんだらう、花之丞の様な、年若な、水々した身體を、惚う白い細身の双物を當てがつて、さぐり切り下したら……血がさつと乃公の手首に懸つて、芝居で見る様に、さぐり〜と朧月かなんか降りて來て、遠見の書割が惚うと……』

『未だ云つて居るよ、此の人は。』

『うむ、然うだつたね、だが心持ちがいゝと思ふね。』

云つてから、七之助は、ぐたり首を下げると、お島は氣遣はしうに眺めて。

『其れも一旦殺して蘇生るものならばねえ。』

『蘇生るものなら。』

と、云つて、七之助は、物の怪に襲はれた様に、お島には内密で密つと四邊を睜した。

(四)

二人は何時の間にかも葉がすつかりと落ちて干綱を擡げた様に見える、藤の棚の下に懸つて

居るのである。晝間通りすがりの人に、家に待つ人を喜ばせ様と思案させる品を商ふ右側の小店の四五軒は、勞れ果てた人が眼を閉ぢた様な姿で、其の小店を上げびつたりと戸を閉ぢて居るのが、辻の點火に照らされて見える。もう全く冬枯に凋落し果てた、左側の公園は、只暗の凄まじい手に掴まれて、彼方の小高い丘の上の立樹の合間から、僅に六區の建物が、青いアイク燈に輝らされて居るのが見える。

『あゝ寒い……』と、七之助は、身震ひを一つして、更におしまにと寄り添うとお島は優しく其の年下の情夫を袖に蔽ふて愛に酔ひ果てた者の様に眺め、

『七さんお前、ほんとに酒は止めて御了ひなねえ、申儀言つちやねえ、酔拂ふと人を切つて見たい……つて、終了には屹度飛でもねえ事になつちもうだらうぢやないか。』

『然うだねえ。』稍々自ら嘆息氣味で答へる。『私は時折然う思ふのよ、屹度お前さんに殺されるんだつて。』

『其れ丈け覺悟して居て呉たら大丈夫だ、だが安心しな、そんな事は滅多にねえから。』

『あんまり安心も出来ねぢやないか、先達ての居酒屋の喧嘩の時だつて、聞いて私が一番に駆け付けると、あの騒ぎだもの、今思ひ出したつても標とするよ。私やあの時はお前さんに殺

されるもんだと思つたよ、退かねえか、退かなさや貴様も一所に殺害けて了ふ分の事だつて、妻の眼付つたら、くら〜として了つて、冷たくなつちましたらうぢやないか。』

『七之助は一々心を躍れる様に口を噤んで了つて、お島の言ふ事を聞いて居るのである。七之助の酒癖の悪いのは一通りでは無いのだが、之は酒癖と云ふよりも寧ろ性情と云ふのが適

して居るのである、燃え上る火も及ばない強烈な感情を、平生は、目を閉つて何事も知らぬ顔に甚麼侮辱を受けても、制して舉動に顯はさない。怒りの頂上に達した時は、顔を眞背にして、

身體を顫る〜と震はして居て、其れでも未だ心を制へて、眼を閉りふいと其の場を去つて了ふ。が、其れが酒を呻つて酔ひ果てると然うは行かないのである。今お島が語す事も、其の性

情が展はれた一つで、其の時も大勢の人が、十重廿重に取圍み、其の手を捻ぢ上げ、縛り上げて了つたので事は騒ぎなく納まつて了つた。が、折々は七之助自身で、自分は奈何して那麽に

憤怒に總身の毛孔を立て、那麽殘忍な心を持つのであらうと、自分で自身を疑がひ、疑つた擧句が、悲嘆ひで、悔いて、お島が止め立てした事のあつた後、お島のみならず、多くの人に

深酒を慎む事を誓つたのである。『よし、解つた、乃公もう止める。』

お島の言葉に、七之助は断然と答へたが、折しも颯と吹き煽て来る空風に、七之助はぶるくと身體を一つ震はして、

『あ、滅法寒いや、風がまた出やがつたな、之で火事と来て、小屋が焼け様もんなら、親方あ大喜びだらう。』

『何だつてさ、お島は眼を丸くして聞き咎める。』

『手前達にや解らねえだらうが、潜れかゝつた此の小屋にや、萬てを保険金が附けてあるんだから。』

云ふ折しも丁度千束町の曲り角迄来て居たので、お島は、今夜はもう遅いから、毎時の出會の場所にも行けまいからと、右に左に分れたのであつた。

『七さん。』と聲を懸けるのである。

『うむ。』

と未だ其處に立つて居る七之助の生返辭するのを透し見て。

『あらいやよ巡査が来ると十錢の罰金だよ。』

『うむ。』

『先刻熊蔵が留守の時にね、花之丞の情夫だと云ふ、そら何とか云ふ人ね……確か青柳さんとか云ふのが、尋ねて来たよ。』

『ふむ、そうかい。』

と、七之助は用を達して立直つたが、

『直ぐと歸つたかい。』

と念を押して、お島の頷くのを見ると其の儘足を、此の裏町の己が下宿へと廻らすのである。

肩懸 投げ

(一)

淺草公園の第六區も、今はもう全く暗闇たる夜の寂寞の影に包まれて了つて、陰鬱なる冬の北風の荒ぶ手に任かして居る。糊工場の角に、建てられた高いアーク燈の光りは、其の物凄まじい、とんと物の怪が眼を開いたと云ふ様な光りを、其處此處の建物へと、投げ懸け――白い壁には反射し――何の事はない、荒涼たる零落の巷の様に四邊を映し出して居るので、僅に向ふ角の交番の赤い燈火の影のみが、其の中に何か仔細らしう落付いて見える。

葉をもぎ取られて枯枝が、細く黒く重なり合つて見える彼方に、白く朦朧として浮び上つて見えるのは、其處迄届くアーク燈の光りに輝らされた水族館の壁なので、其の方向に、観音堂の屋根は、大空を割ぎつて黒く、巨人の瞳まつて、居る様に見えるのである。池の水は黒く淀んで、其の透りに秋虫啼く虫は死んで、啼聲の一つだになく、寂と更けて星影を宿し、風が嘯く度毎に、其の青い光りを浪に曇み込むのであらう、隠して了ふ。左側に一列に并ぶ、彼方の端が輕業小屋、其の次が一流櫻坊主の踊り、萬世庵の屋根、其れから此方へと浪花踊の小屋と、書看板は降されて、木戸口は盲目の様に閉ぢられてあるのを、一つ二つ残る電燈の火は照らすものゝ、仲はひっそり閑として、鼠の暴れる音さへ聴へぬのに引變へ、此方の角の花之丞一座の小屋の、十二階に面した樂屋の窓からは、點火がさして、今しも其處へ島田崙の影法師が寫つて、仲には何か密々と語らふ聲さへするのである。

花之丞は、助藏と彼方の交番の角で別れ、お澄に送られて小屋へ歸つたのであるが、真から嫌ひな酒を惡強ひに勧められて四つ五つ重ねたのと、其れに、何とはなしにお澄が、自分に、助藏を容に取らせ様とする風の見えるのに、業を煮やし、顔はほてつて頭は惡痛みに痛み出し、奈何にも寐苦しくて寐付かれず、起さても見たり、寐ても見たり、身を遺溺なさうに、悶極

いて今しも、炬燵へと身を伏頭に、酒臭い息をホッとばかり吐いて、白い細い手を上げて、颯颯の邊りをとん／＼と軽く叩いて居るのである。

『お師匠さん未だ苦しう御座いますから』
 之は側に居る十四五の桃割の亂れた鬘を飾つて居るのが云つたのである。一座の子役のともえと云ふので、姉妹のない花之丞は妹の様にいたわる可愛いので。二三日風邪を引いて休んで居たが、明日から出やうとした今宵、花之丞の苦しむのを見て何呉と先刻から世話を焼いて居る。

『あゝ』

と花之丞は返辭して、矢張軽く／＼と額を叩く。

『私が少しもんでお上げ申しませうか。』

(二)

『さ、え、もう那處にしくつてもいゝわ……。』云ひながら、叩く手を止めて、小指を一本開き、發のほつれ毛を掻き上げ、其の儘白く二重脛を天鵝絨の掻卷の襟深く埋め、片手を怠らうに蒲團の覆つた炬燵檜の上へと授け出す。

『白湯でも少し上げまじやうか。』

『もう渴かないから、其れもいゝわ。』

と、云ひながら、身を動かして、柱時計を眺め。

『もう一時過ぎちやつたぢやないか、お前眠いだらう、明日があるから、早く御寐みよ、私は恠して置いて呉ていゝんだから、其れにだいぶん醒めて來た様だから。』

『御師匠さん、私些つとも眠くはないんですよ、今日晝間どつさり寝ましたから。』

『どうなの。』

云ひながら、花之丞は、襟から腰を抜き、胸の邊りの緩いて白い乳の膨みの見える艶な身の態度で、凝とともゑの顔を贖りホウと又も熱い息を吐いて。

『ともゑちゃん、お前お國へ歸りたかないかえ。』

何を感じたか、花之丞は不意に這腰事を問ひ懸けた。

ともゑと云ふ可愛のは、不思議さうに、さうりと眼を光らし、お師匠さんの顔を見返したが、直ぐと返事を爲兼ねて居るのである。よし年齢は十五の少さくとも、今迄に冷たい人の手から手へと渡つて來て、何事にも疑惑の眼を向ける癖が今も顯はれたので、花之丞は、何か物足ぬ

げな思を感ずるのであつたが、其にも増して可憐の念が加はつて。

『ともゑちゃん何だつて返辭をしないの。』

『だつて……。』

と、ともゑは云ひながら舞臺や平生人の居る前では滅多に見せぬ、女らしい身態度と、羞恥の顔を包んだ、笑を頬に浮べて些いと伏目になる。

『歸りたいだらう。』

ともゑが顔を上げた處で、聲を重ねた。ともゑは、頬の笑を消し、矢張疑惑に満ちた冷たい眼の色に、花之丞の顔を親ひながら、黙言つて頷くのである。

『ともゑちゃん、姉さんの前で、そんなに上目使ひするもんぢやなくつてよ。』

柔く云つたものゝ、何とばなしに悲しさが胸一杯に込み上げて來て、涙が眼に浮んで來る、這麼少さい者の胸に暫時にしろ國の事を思ひ出させたのを深い罪とも思ひ、自分を親とも姉とも温く思つて呉ぬを今夜の心細い折に悲しくも思つたので、密つと襦袢の袖で涙を拭ふ。

『お師匠さんもお國へ歸りたら御座んすか……。』

何を思つたのか、ともゑは問ふ。

『あゝ歸りたいともくお母さんや、お父さんが有たなら一所に暮りたいとも。』
更に涙の眼頭に浮んで來るのを、福袴の袖に押へ、嫣然として見せると。

『歸りたう御座んすねえ！』

心からつくくともゑは云ふのである。可憐は袖にも抱えても遣りたく。

『ともゑちゃんは確か名古屋だつたねえ。』

『はう。』

と、返辭しながら寝巻の裾からはみ出す膝小僧を蔽しながらともゑは眼を濕ます。風ががらがらと大空を天馬の如く吹渡るのが聞えて、窓の障子をばた／＼と鳴らすと、背後の時計が恰度二時を打つた。

(三)

『眠いだらう、早く御寐みな……。』

『いゝえ、御師匠さん、些つとも……。』

云ひながら、ともゑは何を感じたのか、其の年齢にしては、眼付さも、口附さも、鼻も長せた

輪廓のいゝ、細面の顔を少し傾け其の小さい頭腦に何か思ひ起して考えて居るらしう、眼をまじく／＼とさして居る。

ともゑの可憐い姿を見て思ひ起すのは自分の事で、斯うした身に賣られたのは拾三の年齢、之れが人買ひの伯父さんかと、小さい胸を細い手で抱えて凝と其の人を見上げると、其の亡人にも情けがあつたと思へ、睨に斯う手を懸けて、つく／＼顔を覗き込み。

『いや思つたよりも上々吉の上玉、親分も嘸喜びなさるだらう今から仕込んだなら京、大坂は申すに及ばず東京でも無い太夫になるであらうが……。』

と、眼を少し曇らしながら云つたのに、恨めしいは其の時の母さん、小さい私に無理に『父さん！』と呼ばず若い男と、長火鉢の前に對向ひ、嬉れしさうにニコ／＼として身賣りの金の高の懸引、物の書物にもある手懸に懸けて育て上げた子を、何處のいづこの誰人とも知れぬ香具師の手に渡すのを不憫とも思はぬのか、若しも行衛知れずなつた眞實の父さんが居なすつたなら、斯うもあるまいもの、黒髪長う延ばした子を行く／＼は人の慰物に賣つても、私には憎い人、母さんには、可愛い男に奉公したいのかど、幼稚心にも思ひ詫びて、悲しく、睫毛に露を宿したのを見て。

『お前は御泣きなのかい、え、お雪。』
と、母さんの尖り聲。

『なにね、奉公に出るつて、お前さんが思ふ様な辛いんぢやないんだからね、ほんの事云ひや、家に居るより樂で、甘いものが喰べられて、美しい衣物が着られるんだ、伯父さんが附いて居らあ、安心しな。』

と、亡八の口車、其れから二日目に家を出て、人手に渡つての憂い目辛い目、曉の有明月に悄然と戸の外に寝亂れ髪を掻き上げて、故郷の方を眺めた十五の秋、振袖着て鹿の子の帯占めて、島田監にも白粉の顔濡らした樂屋口の十六の春の夕、化粧する鏡に明暮泣いて過して來た今、若し故郷と云ふものがあつて、父母と揃つて暮らして居なかつたなら、歸りたら無うて奈何しやふものぞ。と、花之丞は、炬燵檣の蒲團の上に、再び其の柔い頬を押し當て、ともゑの座つて居る姿を、夢の様に眺めながら、つくづくと心に思ひ悲むのであつた。

不圖氣が付くと、ともゑは、寝巻の上に細帯なりの膝小僧を出して、両手を懐に入れ寒さうに肩を締めながら、うつらくと居眠りをして居るのである。

(四)

『ともゑちゃん。』

呼ぶと

『あ。』

と返辭して、驚愕した様な眼付で、遠々と四邊を睜はす。

『おほ、ほ、ほ……。』

と、餘りの可愛らしさに、花之丞は笑つて、

『眠いだらう、さあ早くも寝みな、私はもういゝから。』

『然うですか。』

ともゑも自分居眠つて居たのを心附いたと見え、氣體悪るげに、寂しい笑みを頬に上し、

『其れでは、お師匠さん、先に寝まして頂きます、左様なら。』

云ひながら、立つて、其の小さい身體を次の室へと隠すのである。

後見送つた花之丞は、其の儘眼を閉ちて、身も世もあられ無い様に、繋とばかり、蒲團に頬を

埋めるのであつたが、閉ぢ合した隙の間から睫毛を傳うて、涙は切に流れ出るのであつた。上州の前橋から二里隔つた濫川町が花之丞の出生地なのである。父祖代々所の百姓と云ふのでなく、父は高崎在の水呑百姓の息子なのであつたが、不圖した事から此濫川町へ流れ込んで来て、其れが縁があつて、其の町で些とした飲食店を開いて伯父を養なつて居たお綱と云ふ女と知合ひ、婿養子に這入つて、花之丞のお雪は産れたのである。與七と云ふのが父の名なのであるが、其れは、評判の者商家で、其の上思ひ切つた醜男なので、奈何してお綱はあんな男を好いて婿養子に取つたであらうと處の評判に上つたのであつた、お綱は土地では云はゞ濫皮の剥けた方なので、春雨の降る臙ろくの晩、裏口に傘隠して、お綱の戸の外へ出るのを待つ若者も少なく無かつたのである。

與七が堅造で、朝は暗い中から稼ぐ働き振りに打込んだのであらうと云ふものもあつたが、事實與七は働き手で、骨身を惜まずに稼いだものである。與七が婿養子に這入ると飲食店は止めて了つて、養蠶の方へ心懸けたので、其から其の期節になると與七は草鞋脚絆懸けで、山越え峠を越へ、信州路から懸けて殊に寄ると飛騨の方の村々迄まゆの買取りにと出懸けたものである。花之丞が出来たのは、お綱と添つてから四年目であつたが、子と云ふものは其れ切である。

與七は花之丞のお雪を然ながら球の様に可愛がつたが、奈何云ふものか女房のお綱を信用しなかつた。自分が年の三分一は留守勝なので、疑惑をお綱の上に置いたのであらうが、酷いもので、金のことなど少しもお綱に見せた事もなければ、貯が出来て、所の小銀行へ金を預けて置くにしろ、お綱が取りに來ても渡して呉ないと、念を行員に押して毎時旅に出るのであつた。世間では花之丞は眞實與七の子では無からうと噂して居た。町内で破落戸の金五郎と云ふものの子であらうとの事であつたが、金五郎と云ふのは、與七が旅へ出た留守の間、いつも與七の家へ入浸りに出這入りして居る男で、之はお綱が與七を婿養子にせぬ前から出來合つて居たのだとの噂もあつて、花之丞のお雪は、そうした嫌な噂の中、父には云はれぬ淺間敷い母の所業を見ながら子供心にもくよくよ思つて生育つたのであるが、其の父の與七はお雪の十一の夏、行衛知れずになつたのである。

(五)

人の噂では、強盗に出會ひ、首を結られた上、所持の金を取られ、其の上に焼き殺されたのであるとも云ふが、所は、上州と越後との國境ひの國境の國境なので、其の時の中程に、主人も誰も

居ない、通りすがりの旅人が、雨、風を凌ぐ云はくも扶助小屋が一軒建つて居たのであるが、與七は、例の如く上州吾妻川近在の村々で藪の買占をし、其れから田舎道を時へと小屋の邊り迄懸つた跡形があつて、其の儘行衛知れずになつたのである、と其の日とも思はるゝ頃、其の小屋は、人手で火を放つたものか其れとも焚火して其れが羽目板に移り、燃え廣がつたものか形なしに焼け落ちて了ひ、其の灰の中から、顔とも分かず、手足とも解かず黒焦になつた人の死骸が顯はれ出た、一旦は土深く所の者の手で埋めたのを、此方からの願出に依り二週間目に掘出し、いろ／＼と検分したものゝ分明らかなく、漸く其の場に焼残つて居た編傘の柄と、衣物の焦残りでまあ其れであらうかと鑑定を付け其れから、區々の評判は立つた。

一時はち網の情夫金五郎に疑は懸つて、警察の思惑もあつたらしいが、奈何しても然うと思はれない證據が揚つて、其れから後ち網は大喜びの態で、公然に金五郎を曳入れ、樂しみ盡した擧句、與七が銀行へ預けて置いたのも費ひ果して、借娘の身を喰ひ盡したので、其の憎い母のち網も、花之丞のち雪が東京へ来て三年目十五歳の夏に葛橋へ運ばれる身となつて了つた。國から通知があつて、其の死目には遇はなかつた。

性來餘り勝氣でない花之丞は、其の時からもう一遍親の愛に浴したい念は切りに胸を打つて、

殊に其の幼稚の時、頭髮を撫でられた父親の手の温みを忘るゝ事が出来ない。思ひ描ひては夢に見て泣いて、其の最期の慘憺たる事を思ふと、如何なる苦痛の中に、人を呼び悶扱いたであらうと、胸を千切らるゝ思ひに咽ぶのが常である。然して今愆うしてある自分、愆うして華やかに装ひ、華やかに暮し、明暮諸人の喝采の中に立つものゝ其れが何であらう、何時迄續くであらうと、自分で自分を危み、常に心は悲哀の側に向いて居るので、兎ても普通遊蕩人が持つ事の出来ない清い心と、堅固な貞操を他から見ると放縱らしく見える生活の中に維持して居るのである。之は母親の汚行を眼の邊り見て、苦々しくも思ひ、賤しむ可きものと見たのも一つの動機であらうが、餘り身體が健康體で無いのも一つの原因なのであらう。

『花ちゃん……』

花之丞が、悲嘆に胸を惱まし、涙の顔を蒲團に埋めて居る耳に不意と自分と呼ぶ聲が聞えた。聞耳立て、花の丞は、ついと顔を擧げたが四邊は寂として外には風の音、座る心になつて居た耳に、あらぬ音が然う響いたのであらうと、思ひ直し、猶も痛みの去らぬ頭を押へ、又も蒲團に頬を埋めやうとする。

『花ちゃん。』

『はう。』

思ひ切つて、晴々した聲で、花之丞は返辭したが、其の顔には、もう悲哀の影は消え、急いで立ち上る頬には微笑さへ浮んで、何なる盗の隙子に寫して居る影法師を亂して、其方へ近寄らうとしたが、何を思つたか、四邊に人の寢息を窺ひ、其れから些と回顧つて部屋の隈の朱塗りの立鏡に姿を寫し、亂れた襟元を手早く掻き合し、其れから窓の側、隙子を開けて顔を出すのであるが、右手で襟元を押え、左手で亂れた下襟を押へ髪のはづれ毛は其の儘にして立つて。

『澄夫さんでしやう』

四邊の火影に少し身を前屈みに透し見て懐しげに云ふ。今日晝間助藏と争論ふた二人の書生の中の色の白い方なので、名は青柳澄夫、會社より得る些少の月給で下宿住ひして居る身なのである。

『あゝ。』

外の男は、仰向いて居る脛に黙頭を見せ。

『未だ寢なかつたの……下を通ると、窓に明りが射して影法師が寫つて居るからねえ、つい懐しくなつて呼んだのよ。』

『然うですか。』

更に嫣然と笑顔を見せ。

『眠やう／＼と思つてもねえ、宵に少しばかり呑み付けないと酒を呑まされたんで、頭痛がしましてねえ、其れで……。』

と、自分の手計を見て。

『戸を閉てるのも忘れて了つて居たんですねえ。』

『あゝ。』

と、笑を含んで答えると、花之丞は不審しげに眺めて。

『貴方今頃迄、何處へ往つて被入つたんです、もう二時が鳴つたぢやありませんか、這處に晩く、一體奈何なすつたの。』

『なにね、つい馬道の友達の家で話込んで了つて宿泊れつて云つただけれど明日の執務があるもんだから、無理遣りに歸つて來たのさ……頭痛つて酷かあ無いの。』

『え、先刻はねえ、辛抱仕切れなくつて、ともえちゃんを起して介抱して貰つたんですがねえ、もうよろしう御座いますの。』

『ともえちゃんは其處に起きて居るの。』

『いえ、もう寝ちまいましたよ……貴方今も一人ですの、先刻のお連さんは。』

『あの植村かい、さあ……。』

と、澄夫は微笑むで、

『何處かえ紛れ込んで了つたのさ。』

『あホ、ホ、ホ、ホ……。』

と、花之丞は笑つて、

『何でしやう、廊でしやう。』

『まあ、そんな見當だらうねえ。』

『其れに貴方は能く辛抱して御歸りなさいませのねえ。』

『僕にはねえ、可愛がつて呉る人が無いからねえ。』

『あら、甘く被仰るわ。そんなお口には乗りませんよ。』

『だつて然うだから仕方が無いぢやないか。』

『そんなら、其れは然うに爲て置きましやう。』

と、云ひさして、背後を回顧つてから向き直り。

『貴方其處に立つて居ては、御寒いでしやうねえ。』

眼に輝きを見せ、少し小聲になつて云ふ

(七)

『なに、寒かあ無いよ、花ちゃんの顔を一人で見ても、斯うして二人切りで話しが出来るんだから些どの寒さ位は何でもないよ。』

澄夫も言葉に力を籠めて云ふ

『あら、まあそんな程のいゝ事を被仰るわ、ほんとにね……。』

と、花之丞は又も後を回顧り、

『儘になるなら、戸を開けてお上げ申して冷えた手を温め申したうご座いますにねえ。』

愛はしげな洗んだ聲で、

「勘忍なさいませ。」

「申儀云つてらあ、そんな事があるもんか。」

云ひながら下の澄夫は、花之丞の立つて居る窓から地に四角に落ちて居る燃影の中へと歩み這入つて来て、

「僕よりか花ちゃんの方が然して居ちや寒いだらう、もう失敬しやうよ。」

糸織の小袖の襟を掻き合して、右手を懐へと差入れる、

「なにね、私は些つとも……、却つて斯うして居るのが能いんで御座いますのよ、お酒に酔つて居るんですから。」

早口に云つて退け。

「貴方書間は大變お氣の毒様で御座いましたねえ、御召が大なしに濡れましたでせう。」

「いや、其れ程でもないんだがねえ、嫌な老爺つてありやしない、植村は酷く口惜しがつて居たよ。」

「植村つて、お連さんの方ですか……然うで御座いますしやうつて、私舞臺の上から見て居ては、ら／＼してましたよ。」

「何だい彼奴つあ、毎日来て居る様だが、大方花ちゃんを張つて居るんだらう？」

「そんな事も無いでしやうが……、ありや横田さんつて、此處の座主の知合なんです。」

「うまく逃げるね、ちやんと知つて居るよ。」

「知つて居るつて何を？」

「ありや、花ちゃんの大事のお客なんだらう。」

澄夫は何の事も無い風に云つて退けるのであるが、言葉の裏に一方ならず激して居るのが見え居る。

「まあ、酷い、そんな事がありますものか。」

呆れた風に花之丞は云ふ。

「抜けくど被仰いますよ、澤山お調戲ひなさい、左様なら。」

嘲む如く口早に云つて、身を翻へし行き懸け様とする。

「青柳さん、些いと。」

「また御目に懸ります、到つて正直者で小心者で御座いますから。」

「青柳さん。」

『……………』

『後生ですから青柳さん、些との間。』

『何を御用で御座いますか。』

漸くの事で立行る、

『そんな事〜影形も無い事ですから。』

『でも噂は公園一杯に擴がつて僕の耳にも這入つたんだからねえ。』

『誰が那麽跡形も無い事を云ひ散らすんでしやう、貴方誰から御聞きになりました。』

花之丞は氣遣はしげに問ふ。

(八)

『然う云はれると些つと困るがね。』

『それ御覽なさいまし、誰も云はない事を造り言して私をお酷めなさるんだわ。』

『でも僕達の眼には然う見えるもの。』

『奈何して然う見えるんで御座います。』

些と語り氣味である。

『最負が無くては人氣は付かないからねえ、何處へ往つたつて巾が利くのは佐渡の土で其の日

くの風に靡く柳と云ふ事があるからね。』

澄夫が斯う云ふと、花之丞は打つて變つて夜目にもほろりとした風態が見えて、

『然うでしやうねえ、自分ではそんな事を云はれまいと、一生懸命になつて丁を爲て居たつて

も、身分が身分ですから、爲方が御座いませぬねえ。』

折しも颯と吹いて來た冬の夜風に、髪のはつれ髪は動いて、花之丞は伏目になるのである、澄

夫はひどく忙して。

『花ちゃん、僕はそんな心算で云つたんぢやないんだから、腹が立つたら御免なさいよ。』

『いゝえ、然うぢやないんです。』

云ひながら、花之丞は顔を上げて、嫣然と微笑さへ見せたが、襟袷の袖を上げて端で些と眼頭

を拭ふ。

『でもねえ、青柳さん、そら這腰身ですから、世間から鬼や角う云はれるとと覺悟して居ます

が、貴方からそんな事を云はれるとは思ひも懸けませんでした。』

「些つと調戲つて見たのさ、然ら真面目に取られては困る、御氣に障つたら謝罪るとしやう、いんだらう……。ぢや僕は之で失敬するから。」
再び行き懸らうとする。

「ちつと待つて下さいまし、青柳さん貴方本統にそんな事思つて下さらないでしやうねえ。」
「あ、些いと戲言に云つて見たのさ誰がそんな事、真面目に云ふものか之れでいんだらう。」
「えい、……ぢや本統にもう御歸りですか些つと御待ちなさいまし。」

と、云ひ放つて、花之丞は窓から身を曳いたが、何か取り出す様な、カクコトと中で音をさした
たが、再び窓の側へ顯はれて来て右の手には華やかな模様のある毛織の肩掛を持つて居る。

「貴方今夜は外套を着て被入らずにも寒いでしやう。汚ないんですが、之を召して被入いませう。」
投げさうにする。

「い、え、其れには及ばないさ、然ら寒いとは、思はないんだから。」
「そんな事がありますものか、此空風にも風邪を召してはいけませんから……投りますから、お受けなさいまし。」

只見る黒地に鼠色の浮模様の肩掛は、弱めかしき人の織手を放れて、颯と振り、夜目には戀の

天使の翼の様に見えて静に地上に舞降り男の手へと懸るのである。
優に受取つた澄夫は嬉しき情に其の肩掛に頬磨りをしたげにも見えて、

「ぢや借りて行かう、明日でも届けますから。」
云ひながら身に纏ふのを、樂しげに上から窓の棧に矢張り手を懸けながら、花之丞は瞋るの

であつたが、澄夫の更に別言葉を交ふに、優しく挨拶し、彼方へと、夜の暗の中へ歸り行く後
姿を懐しげに、凝とく見送り、應て其の姿の横町の暗に隠るよと見ると、更に微な笑を頬
に浮べ、窓から身を曳くのであつた。

磨 半 鐘

(一)

早や一番鶏が啼いて、山谷透りから響いて来る鐘の音は、曉の報知か。然りながら座に戻つた
花之丞は、別れた澄夫の後姿が未だ眼前にちらついて、横にならうとはせなんだ。誰しも斯
うした時の優しい乙女心の空想に耽けつて、座ろに自分の前途に光明と慰安とがある様に思ひ
做され、次第に臉を壓して来る睡魔を、然ながら、自分の美しい夢を奪ひ取るもの、様に憎ま

れ、猶も其の果敢ない空想を惜んで、蒲團の上に横になるも物憂しと、其の儘次第に夢路に運ばるのであつた。窓際に立つて寒い風に吹かれて居る中に、顔のほてりは醒め頭の惱みも去つたので。

何程眠もつたか知らない。不圖眼覚めると冬の曉の寒さは襟元から袂から浸込んで、胸元の冷えを覚ゆる、仍なく轉寐して居たるに心付いて、襟元を掻き合はして立ち上がる、燒き付く程の咽喉の渴さを覚ゆるので、側の火鉢に懸けられた鐵瓶へと手を懸けて見たが、火はもう了然と消えて了まつて宵の渴さに空に爲て了まつたらしう一滴もない、更に火鉢の横の水注へと手を觸れると、氷の様な冷えを感ずるのみで、中は、其れも空虚になつて居る。

爲方が無いので、明日朝迄堪へ様と、横になつて見たもの、蒲團の重さが覺えらるゝ程、愈増しに渴きは募つて、奈何しても辛抱仕切れず、二度三度思案の中に寐回り打つた擧句、物臭ささうに床の中から身を抜いて、枕元の手燭へと火を移し、片袖は風に煽られて消ゆるのを防ぎ、見る人なしと襟を解いて腰もあらはに、裾を曳つり、部屋を出て廊下へと出る。

流元は前の廊下を突當り、少し右に寄て土足の儘で昇降する階子段の下にあるので。廊下の左はずつと小屋との境界の壁なので、漸梯子段に曲るとする角のみ打開いて、其處から左にす

つと小屋の中が一目に見降ろされる。肌に浸み入る寒さを堪へて、花之丞はともゑ等の寢て居る部屋の前、自分達の煮炊を世話する年増二人寢て居る部屋の前、其れから二つ并んである物置部屋の前をも通つて急ぎ足に其處迄来たのであつたが。右へと梯子の口に懸らうとし、何心なく不意と小屋の方を見ると、毎時は、一つだけ残して腰膺と付いてある電氣燈は打消されて、如法暗夜の何物も見え解かず、其れさへ不思議なるに恰度自分が其處に立つた時彼方の隅、平生は火鉢や座蒲團が積み重さねられて置いてある處に、ぱつと赤い火影が動いて、其の邊りを照らすよと見ると、直ぐと消えて了つたが、確に、何物か黒い影——人影よと思はるゝのが見えるのであつた。

思はずも驚として、前方へと進める足を止め手燭を彼方から心付かれぬ様後へと隠し其の儘凝つと立佇つて眺めて居ると、もう確に人の間の中に動いて居るとは知れた。みし〜と床を踏む音がして、更けて恐ろしく森とした空氣の中に、重く重しい呼吸を吐く音さへ知れて、其れが間違ひなく、ある秘密な隠謀する者の胸から出ると感應される、環の觸るゝ様な物音が、背から冴えて一方ならず興奮して居る神経に響いて來て、同時に渴を覺える身には聞き脱かす事の出來ない液體の注がれる、様な物音やかな音がした。

花之丞は恐ろしさに身内に戦慄を覚えるのを、押え切る事は出来なかつた。前に進む事が出来ないと云つて、後へ退る事も出来ず、足は然ながら釘附られた様に凍んで了つて、吐く息さへ氣遣はれる思ひの身に、颯とばかり強烈な石油の薫りが鼻を打つた、と、今度は、もう燐寸を磨る音がシュ〜と耳に聞える。

二度、三度、暗の中に火花が散ると見えて三度目に少し大きく火花が見える、軸が折たらしう、其邊に捨てる氣勢がして、再び其の小さな箱——然しながら恐しい、力を潜めて居る——を開く微かな物音がした、潤ろいだ胸から浸み入る寒さも物かは、總身に發汗を覺える程で、思ひ切つて。

『誰だ？』

と聲を懸けて見る勇氣に誇りたいは山々だが、偕て然うはならぬ。小石が咽喉に詰つた心地で、兎ても聲は出し切れない。と、一道の火光は颯と動いて、向ふの壁板を一所四角に照らしたが、其の儘、するり〜と火は動いて、此方へと見廻す風情に、其處此處へと動くのである。

自分が最初見た灯は、之で有つたと花之丞は知るのである。正しく開閉自在に出来る角燈なので、其處、此處と冷然と流れ出づる火光に、輝らし、花之丞の立つ足計迄火光は届いたが、幸ひに其方から見出されずに彼方へと外れたので、悖と安心の吐息を吐くと、以前の暗黒に回つて、再び彼方に仕事を初める微かな物音が耳にせらる。

總て、疑惑と、恐怖の感念に身を包められる其の上に、冬の冷たい夜氣を容れた暗黒の小屋を被せられて居るのである。纖弱な女の身に、鋭き神經を働かして、凝と堪えて居る丈いで、多大の勇氣と云はねばならぬ。若し忙して、袖で蔽うて居る火影を此方で動かしたなら、我身は何となる事であらうと、烈しく波打つ胸に思ふ刹那、彼方に燐寸の火は磨られて、ぱつと小屋を照らす一目。

『あら、親方……』

花之丞は、聲高く叫んだのである。同時に、火は颯とばかり下に廣がつて、其の火影の中に、背の低い小肥りに肥つたと見ゆる黒い人影が、動いて見えた、突と此方を回顧つた眼顔の峻はしさ、呀と思ふ間に、血に濁えた狼の様に敏捷く、此方へと目懸けて馳け寄つて來るのを、花之丞は、眼に見て、心付きながら、然ながら魅せられた様に聲さへ立てず凝と立ち竦む間に、

影はもう、階子段下に迫つて来て。音せぬ様に、どん／＼と駆け上る間遅しと、花之丞の肩に手を置よこ見えしが花之丞の手にした手燭はふつと消え果て、音して床に落ちると、

『あれ、親方、私を……。』

何か猶も叫ぶのであつたが。口に手を當てがはれたらしう、呻く様を聲がして、其の恐ろしの人影は、花之丞を抱いた儘、すら／＼と階子段の下へと降り果つると、水屋と小屋の間の床が切れて溝の様になつて居るのを勢よく飛び越え、小屋の床に身を立ると其の儘、直ぐと、其處へ花之丞を投げ降すのであつた。

(三)

『親方、貴方私を、こ、殺す心算り……。』

一旦押えられた手が放されたのか、花之丞が悲哀の聲を振擗つて叫ぶのであつたが、人影は少しも口を開かず、いつの間にも然うしたのか、美しい花之丞の首には、もう手拭ひが廻されて居て黒い巖丈な兩手は其の兩端を握り、力を籠めて縊らうと急る。

『えい殺される覺えは……。』

爲せじと花之丞は、細弱き身ながらも、今殺されんと爲る最期の力に悶掻き反抗して、ありあり聲を立てるのであつた。

恐ろしき罪惡の手で、火の移されたのは、小屋に使ふ客火鉢なので、其の上には石油が注がれて居るのである。氣味悪い人世を咀ふ様な聲を立て、白い煙を上げ、其の中に縋て榮えある香氣を妬む様な嫌な臭氣を漲らして、盛んに燃え上るので、小屋の中は半ば暗燻として、半ば其の鋭き火光に照らされて居る。天井から釣してある曲懸に使ふ種々の小道具は、然ながら、其の火の自分達らに燃え移るのを恐れる様に、ならば天井へと喰付きたい様な忙てた氣態に見え、壁に立懸けてある梯子や、網渡りの時綱を支える柱などは、其の身體の大きなのに、奈何する事も出来ず、只其の恐ろしい運命の近寄るのを嘆いて、泣き出しさうに見えるのであるが、天井に近付いて一列に甘ばかりも懸け飾られた鏡のみは、矢張冷然として、云はゞ嘲笑ひ氣味で罪の手から燃え移された火光のみか、其の火光の下に照されて行はれて居る、恐ろしの罪惡の影をも映して居る。

『えい、静にしる、見たが不運と呆める。』

小聲に早口に云つて退け、度胸の座つた態度をして居るものゝ、思ひも懸けず、斯る罪を重ね

はならぬ其の間時を恐るゝ如く忙てる態も見えて愈更に腕に力を籠めるのであつたが、花之丞の織い手は逸早く、手拭の下に入られて、するり上へと脱けさし、力一杯對手の胸の邊をどんと、向ふへ突きめし、彼方が跣々と踏く間に、立ち上つて。

『あゝ、誰か、ヒ、人……』

と叫んで、裾も袂も掻き亂し、一生懸命になつて馳出すと直ぐ不運にも何物にか躓いて、前踏りに倒れ、氣味悪く或物に觸れたとは感じたが、其れを思ふ間もなく、勢込んで、立上つたが、早や後から追付かれて又も手拭は咽喉へと懸る、懸命に空に問搔いた、花之丞の手は彼方の頭にと觸れて、顔を蔽つて居た頭巾が、颯と外れると、今しも重ねた火鉢の半ば燃え落ちて後の白堊塗の壁板へと燃え付いた、勢のいゝ焔は明に其の顔を照らすのであつた。

(四)

花之丞が身の危さを忘れて叫んだのも無理からぬ事で、間違ひもなく座主の河原藤兵衛なのである。日頃からして兇しい顔立の一層隠険に見えて何かしら世を嘲けると云つた風の口元に、残忍な氣性が露骨に顯れ、其の眼はもう了然餌物を覗ふ動物の輝きを備へて居る。一旦、花之丞の咽喉に手拭を掛けて、手許へと都合よく引寄せたものゝ、思はず恃と吐いた一息の間隙に

花之丞は身軽く平生の曲藝の技術を見せてするり左へと顔を寄せたと見ると、藤兵衛の手から免れ、其の儘身を横にしながら見物の座る土間を前方へ、些と仕切つてある欄干を越えて、日頃足に馴らし切つた、舞臺へと轉げ落ち、早や片手を突いて立上る後から免しはせじと、藤兵衛は、一世の浮沈の血眼になつて、續いて欄干を越えて追ひ迫る。燃え上る焔は、もう小屋の中の暗黒を奪つて、眞晝よりも明に其處此處と照らし、煙は白く、黒く、何事か憤りに堪えざる如く猛々と渦巻き上る、先刻より焔の先に甜らるゝ四邊のものは、小聲で呟く様な微な物音を立て、然でなくば苦しさには堪えず呻吟く様な聲のみ立て、居たのであるが、今はもう次第に烈しく煽り立つ焔に捕へられ、免れんとして免れ得られぬ大叫喚となつて、勢よく、ばちくゝと火花さへ散らすのを天井に近き鏡は矢張冷然として嘲笑ふ如く

此の恐ろしき光景を二倍にして居た。舞臺の前方の端に、立て懸けある五間梯子の裏へと廻つて、前より勢ひ猛に掴み懸る藤兵衛の手から避けたが、藤兵衛は直ぐ足元にある小手道具を取つて、横合より、顔とも云はず、頭とも云はず、打つて懸るのに堪え得ず、又も狩り出されて、今度は舞臺の左の端に、据えてある

大太鼓の蔭に這入つたが、其處をも、藤兵衛が未だ手から放さぬ小道具の恐ろしき鞭撻と、其れのみか、其處は燃え上る煙に近く、火花の散つて来て、襟とも云はず、首筋とも云はず飛び懸るので、何としても居堪らず、息を切つて今度は懸命に、更に仕切りの欄干を越えて前方の、土間へと飛び込み、乾の偶の水屋の方を目掛けて馳けながら、死者狂ひの金切聲で、『火事だ！人殺し……。』

と、叫ぶ。

世間は今寝静まりの最中で、斯る悲惨なる光景があらんとは、夢にも思浮かべぬ事であらう。小屋の仲の空気が呼吸苦しさを覚える迄に恐ろしく蒸されて、煙は其處此處に立迷ひ、己の出端を需めるのであるが、小屋の上に五つ迄附いてある窓は、了然と閉められて居て、只あかあかと煙の餘光を受けて輝くのである。

(五)

水屋の上は、先刻引ずり降された階子段なので、叫はぬ迄も、其處を駆け上つたならば、響きに夢を覺されて、起き上る一人二人、自分の危難は救はるであらうと、咄嗟花之姿は思回らし

漸く水屋口への仕切りに足を懸けんばかりになつて、襟首に鬼の手が掛つた力を覺えると、ぐつと後へ引戻され踴々として、思はず。

『あれ誰か……。』

と、叫んで見たが、應ずる聲はなかつた。

胸の動氣は高く、呼吸は切れて、勞れたもの、未だ反抗する餘裕はあつたので、彼方の手許へ引寄せらるゝと其の儘、白い齒を見せて、彼方の指を口に啣へると、血の唇を傳ふのを覺えた。

『親方命は助けて下さい、一生口を閉さいで、黙言つて居りますから……。』

彼方の手が些と緩んだ隙に、花の丞は、眼に涙を見せて、憐憫を乞ふのであつたが、藤兵衛は聽入れさうにもなく、爛々たる眼の光りで、ぐつと睨むで、手早く頭髪に手を掛けやうとするので頭を右に避けて、敵手の咽喉を目掛けて、呼吸も塞れよとばかり強き突きを試み、彼方の避けて身を交す機会に、又も身を翻して駆け出したが其方は死地で、前には煙と煙が競ひ立つのであつた。

泣き出したくも思はれて、後から襲ひ掛る手を、半は煙を浴びて居る柱の前方へ避けると、煙

さへ敵となつて、眼、鼻と侵み入つて、口さへ開かれず咽せ入る苦しさ、髪の中の毛のざり、と焦げるのを覚えるので、思はず片袖で打拂ひ、片手に眼を蔽つて、盲目滅法夢中に駆け出すと、又も何物にか跳さ其の儘ばかり倒れると、花之丞はもう起き上る力は無かつた。不圖心附くと、自分の腕いたのは、正しく人の身體なので、驚として目を瞞る迄もなく、四邊の火光は、憐れ西枕して眼を恐ろしく刺き、両手とも苦痛に握り締めて息を絶やして居る、長七と云ふ茶番の老爺を照らすのである。

『呀……』と思ふ間もあらず、藤兵衛の残忍な手は花之丞の振亂した黒髪へと、毒々しく懸るのであるが、之も煙に惱んだらう、息切れする咽喉に苦し氣に咽せ入り、左の手のみ働かして、黒髪を根元迄手に巻付け、右の手を擧げて、花之丞の咽喉元を覗ふ刹那、弱り切つた中にも花之丞は少し身を動かして、逸易く其の手を捕え。『親方、た、助けて下さいまし、申しませんから……』。聲を絞つて叫んだもの、藤兵衛の胸に慈悲心を起す餘裕はなく、慳食に其の手を拂つて再びのし掛らうとするので、花之丞は股迄踏の亂れた足を、丁度雁などの最期のときの様にばたばたと開掻き、

『命は助けて下さい。精氣限り働いて儲けますから、助けて下さい何も知らん顔をさせようから……』。涙を澎湃と頬に流して、花之丞は畢世の思ひを籠めて哀願するのであつた。

(六)

『やあ、蔑棒に煙が吐出らあ、火事ぢやねえかい。』

『黄な臭い香ひがするぢやねえか、窓が馬鹿に明るいや。』

と、叫びながら、通りすがりのが、ばたばたと門口へと馳け付ける音が、勢よく飛び散る火花の中に紛れず、聞えるのであつた。流石に藤兵衛も驚とした氣味合ひに、外の氣勢に耳倚て、思はず些と手を緩めると組み敷かれた花之丞は。

『親方黙言つて居ます、黙言つて居ますから……』。少し聲を濕めて、更に哀願の思ひを見せた。

『おい火事に違ひねえや。あう。』

と、後の聲を張り上げて、

『あゝ。小屋に誰も居ねえのか。おい。』

破れよとばかり表の戸を烈しく敲く

最早大事去れりを見て取つてか、藤兵衛は哀げな花之丞の眼に、強き黙頭さを見せ、と手を放し、立ち上ると、無言に愕で、疾く彼方へと、階子段の口を示すのであつた花之丞は、泣顔の中に黙頭さ、續いて逸早く立ち上り、一生口を嚙むで居る事を更に眼に見せると、藤兵衛は手を振つて急ぎ立てるので、よろ／＼とする危げな足を踏み占め三四歩前に踏み出ると、

『呑込んだなあ。』

小聲に念を押して、藤兵衛は其の儘よいと小屋の後へ方へと然ながら小鼠の様に身も隠すのである。

花之丞は漸／＼水屋口の側迄来たもの、身の危さを忍れた心緩みに左ながら身の骨の抜果てた様、がぐりとなつて、もう階子を上に上る方は失せて了つた。

『火事だ／＼。火事……。』

しきりに叫ぶ聲がして、隣り近所を起す聲がしたが、世間は猶國として、煽は勢よくばち／＼

と音立て、垂木、羽目板、梁と、其の恐ろしげな赤い舌に話めて燃え上るのであつたが、其の火見る眼愛しと階子を這ふ様に搔上り、中程にて不圖小屋の火の方を眺めると、今自分が恐ろしの手を押えられし邊りの死骸の上に、早や音して燃え木の落ち懸り、其の裾の方からくすくすと煙は立ち上る惨憺たる光景を花之丞は眼にするのであつた

時ならず恐ろしき叫喚に夢覺され、ばたばたと隣り近所の戸を開ける物音、ワァンとばかり物數奇らしう叫ぶ聲も交ちつて、世間は次第に驚きの眼を覺すのであつたが、今煽は表側に面した小屋の窓を一つ焼落し、其處から勢よく恰も軍に勝誇つたもの、様に、其の残忍なる姿を顯はし、ばつと往來を照らすと、前の池の水は、直ぐとを映して、更に一層其の凄まじき光景を添へ初めた。

交番の側に備へられた非常報知の鐘が亂打されて更に此の騒ぎを遠近にと傳へる。忙てながら馳け出す者は次第に多くなつて小兒の叫ぶ聲、母の呼ぶ聲、其の中を甲斐／＼しき男は、勢を揃へて焼かれじと、家財を運び出し、忽ち四邊は修羅場となつて了つた。小屋は今全く煽に包まれ果てた。總ての人の力と榮華を嘲笑ふ如く燃え上る煽は、曉猶暗き天を焦さんばかりに立ち上り、盛んに火花を散らし、公園一帶、總ての建築物に火の粉を浴び

せ懸けるのを、十二階の煉瓦建築のみは、其の火光に半ば照されながら、傲然として見下すのであつた。

居宅

(一)

「先づ御怪我が無くて何より御仕合でさあ番町ぢや二つ警鐘なんで、眠ぶた眼に何處かしらん位の事で居ると、横田の旦那が電話で知らして下さつたんで吃驚して馳け付けて、参りやしたんです。」

昨夜公園の小料理屋で、藤兵衛と酒汲み交した辨藏なので、刺子の半纏に、刺子の頭巾片手に長提灯を提げ、草鞋履きの火事装束で主人小林義則の代理に、早速駆付けて来たので、庭口に立ちながら挨拶して居る。

『いや、奈何も遠方の處を……火もまあ大略は、すんだので。』
云ひながら、藤兵衛は、女房のお澄が、下女に言付けて持運はして来た下盥の注ぎの微湯の中へと、泥塗れの足袋を脱いで、片足を突込むのである、今しも火事場から歸つて来た見え、

荒い糸織のねんねこ半纏は、酷く水に濡れしよひれて、頬とも云はず、頭筋とも云はず、煙に燦けて、眉毛は少し焼けちりれて居る。
『貴方もう了然消えて了つたんですかい。』

女房のお澄は手拭を姉様被りにし、矢張ねんねこ半纏を端折り、臺所の方から手を拭き、来て問ふ。
『あ、了然とは未だ行かないんだが、もう他へ付きつこは無えから一先づ歸つて来たんだがねえ。』

云ひながら、更に左の方の足袋を脱いで、盥へと足を入れる。
『あ、お内儀さん……。』

『あ、辨藏さんですかい、御遠方の處を御苦勞さまです。』
『無ち驚きなさいましたらうねえ。』

『驚くも何にもありやし無いんです、私しや昨夜更けましたもんですから、すつかり寢込んで了つて、宿に起されたんで、起きると摩り半鐘なんですから……。』
『眞の事よ。吃驚も癢つくりもありやしねえ。火事だと云ふんで、起きて雨戸を明けて見る

と、公園一杯の火に見えて、火の粉が飛び込むと云ふ始末なんだから、そのまんまで駆け出すと、七の野郎に打突つて親方火元は小屋なんですてえ譯合さ。」

『然うでしたらう、大分焼けたらしいですねえ。』

『お前さん未だ彼方へ行かないんかい。』

云ひながら藤兵衛は足を拭いた手拭を女房に渡して上へ上る。

『えい、這入らうたつて、お巡査が入れて呉ないもんですから、來惡けにホンの裏通りを通つたばかりなんです。』

『乃公の小屋と、隣の小屋と、其れから壽司屋に天麩羅屋とあの門並五軒さ……。』

云ふ折しも、矢張庭口から勢込んで來た廿二三の若いのが、染抜きの法被に細褌と云ふ出装で。

『親方、大變な騒ぎで……御内儀さん御騒々しい事。』

之は、ちよいと座に出入りす遊人の金太と云ふのである。

『親方大變ですせ。あの長七の野郎が焼死んでますせ。』

『何長七が焼死んで居る……。』

驚とした身舉動で火鉢の前に座らうとした藤兵衛は立付つて金太の顔を白眼凝視た。

(二)

『長爺が焼死んで居る……まあ、奈何かして、逃出されなかつたらうかねえ……。』

『お澄は椽端近う身を進め、眉を潜めて口を入れる。』

『もう眞黒焦げでさあ、すつべら棒として眼も鼻もありやしませんや、先刻から變な香ひがするくつて云つて居たんですが、まさか長七爺の香ひとは思ひませんや、たつた今、め組の組頭が手鍵で掘出したんでさあ。』

『うむ、然うだつたか……。』

藤兵衛はさも哀げな深い溜息を一つ吐いて

『そいつあ可哀想な事をしたなあ、奈何したかど氣が付かねえでもなかつんだが、何しろ花之丞の方に氣を取られて居たもんだから……。』

『花之丞は、七の家へ兎に角馳込んだつて今おましが知らして來ましたが、大丈夫でしやうね。』

夫の金太に話す言葉と遮ぎつて妻のお澄は氣遣はしげに問ふ、藤兵衛は聞付けぬ態を装つて、更に金太へと。

「乃公直ぐ行つてもいいだがねえ、今交番のお巡査に火元調べに呼出しに行くから家に居て呉ると云はれたんだから、外すと云ふ譯にも行かねえ、お前へ往つて衆皆にいゝ様に云つて、早桶が入用なら、買ひに行くとしていゝ様にして呉な。」

「えい、ようがすとも。」

云ひながら、金太は早や馳出しさうにする

「あゝ、立關の方に何か出てゐるらしいから思繼ぎに一杯引懸けて行きな。」

金太は點頭いて表へと出て了つた。

「へい、伊勢屋で御座い、奈何も大變な事が出来いたしましたして、主人が宜しくと申しまして御座います。」

「へい、馬道の左官吉で御座います、飛んでもねえ事が出来いたしましたして。」

「へい、藏前の壺屋で御座い、主人が参ります等々御座いますか、病院へ這入つて居りますので、之はほんの御見舞のしるし迄に。」

入れ交り立ち廻り、玄關の方には、見舞人の入込むで、騒々しさは一通りでないのを熊藏を初め二三人の若者が應接して居る、臺所の方は、お澄を頭に今しがた小屋から逃げて來た仲働きの女に下婢と赤い襷を懸けて、水汲む音、米洗ふ音、握飯に香の物も燭酒と上を下へである。門の前は、其處此處へと見舞に行く人、歸る人、廊に近き場所柄とて、美しい人の手枕を解いて帯取裸で馳出した野次馬大勢、長提灯振廻して、勢の聲騒々しく、遙に蒸氣脚管の馬の嘶聲も聞えて、天は今漸く明放れんとして、早や早立ちの鳥は東の空へと啼いて行く。

「やあ、夜が明けて來たな。」

云ひながら、藤兵衛は、庭に突立つて居る辨藏を些と回顧つて、

「お前さん、足を洗つて上るがいゝぢやないか、遠いんだから、緩くりして行きなさい。」

聲を懸けながら、さも勞れた様に、どかり火鉢の向ふに座るのであつたが、お澄はまだ立つたまゝで、

「まあ、ほんとに可哀想に、奈何したと云ふんだらう。」

未だ長七の事を云ひながら、眼を睨いて、

「貴方花之丞は大丈夫なんではやうね、何處も怪我はしなかつたではやうね。」

更に眼を睨つて問ふのである。

(三)

「格別怪我も無かつた様だ己に茶を一抔注いでくんな。」

『はい。』

と、云つてお澄は、腰を曲めて手早く、茶を入れながら、

『小道具なんて、總體出なかつたんですつてねえ。』

『あゝ。』

藤兵衛は、其處どこで無いと云つた態に點頭いて、辨藏の方を回顧り、

『仕方が無いもの、大痛事なんだから、また辨さんとこの旦那に御縫り申さなくちゃなら無
50』

『そんな事は無いんでしやう、うんと保険が掛つて居ると聞いて居ましたが……。』

『保険かね……。』

と云つて、藤兵衛は急に、顔を上げ、目に角を立て女房を回顧り。

『此處へも何か持つて来ないか、辨藏さんが居るぢやねえか。』

一方ならず邪慳に云ひ放つ、お澄は笑に受けて、女中を呼ばうとする。

『お前行つて取つて来な。』

更に云はれてお澄は立つのである。

『お内儀さん、玄關の方へ廻りますから。』

云ひながらも、辨藏は足を上げ様ごはせず其の儘に居て、藤兵衛へと眼を移し。

『酒造火災の一萬圓に、東京火災に一萬圓這入つて居ると聞いてましたがね。』

『うむ、然うなんだがねえ。』

何故か、藤兵衛は浮かぬ顔をして、あやふやに答へるのを、辨藏は、怪む如く眼を睨つて、

『其んならい、ぢやありませんか、奈何せ改築命令が下つて居る小屋なんですからね。』

『然しそりや然うは行かないよ。』

『何のいかない事がありますものか、手取二萬圓ありや、小屋は焼けて了つたより、立派なのが出来ませうし、人氣者の花之丞が居るんですから、云つて見りや旦那の運が向いて来たんで
ぶあねえ。』

『辨さんは、酷い事を云ふね。』

斯る厄災の中に云ふ可からざる言辭を弄すること、藤兵衛は、辨藏の酷薄なる心術を輕蔑する目遣ひをして見せ、容易に其の濛い顔の色を解かうとはせぬので、辨藏は見當違ひした己の心を悔ゆる色を、笑ひ紛らし。

『あは、は、は……こりや些と云ひ過ぎましたかねえ。』

云ふ折しも、お澄は、命令られたものを手にして這入つて來るのであつた。

『乃公、腹が減つて堪えられねえ。』

お澄が未だ下に置かない先に、藤兵衛は、手を延して、其の盆の上の握飯を一つ手に取り、一口頬張りながら、

『甘えく、腹が減つてる時や不味物なした、辨さん遣つけな。』

酒の香りは座に満ちて、猪口は、藤兵衛の方にも廻つたが、

『乃公は止さう、』と受けぬのである。

『旦那、あのねえ、花之丞は……。』

未だ身軀を了然内に入れぬ先きから、大聲に忙しく怒鳴つて、本戸口から這入つて來たのは、

矢張小屋で使ふ茶女のお光なのである。

(四)

襦ひつからけて、緋金巾の湯巻を膝切りに見せ、手拭を姉様被りに、幾度か煙の中を往來したと見え、頬は煤けて、櫻懸けの儘である。

『花之丞が奈何かしたのかい。』

お澄が逸早く聲を掛けると、藤兵衛は矢張落付いた調子で

『來るのを否だと云ふのかい。』

『否え、否だなんて、那慶事云ひぢやないんですかね、頭がくらくくして眩暈がするから、もう些つとの間、斯うして置いて呉いつて、手拭で頭を縛つて、くくり枕に靠掛つて居られるんですよ。』

『貴方、此方へ來る様に迎ひにお遣りなすつたんですかい。』

『あゝ。』

と藤兵衛は點頭いて、お光の顔色を伺ふ様にじろく〜と噴つてから、眼を外向け、指に喰付いた

飯粒を口にするのであつた。

『花之丞は別に怪我は無かつたかい。』

『あのね、逃げしなに、櫓子段が何かで打つたんですつて、向脛をひどく擦剝いて、血が浸んで膨れて居るんですよ。其れに頬邊から、頸筋なんかと處々擦剝傷があるんで奈何したのか、自分にも逃出す時や夢中だつたから、些とも知らないんですつて。』

『そりや然うだらうてさ。』

お澄は相槌合つ。

『お内儀さん花之丞は、衆皆が逃げた様にねえ、梯子段を下りて、水屋口から馳出したんぢやないんですよ。何だか御自身の部屋の窓を開けてねえ、往來を見下したり、引込んだり、了然取逆上て了つてうろ／＼して居たのを、衆皆が梯子を持つて来て漸つてと降したんですつて。』

『ふむ、奈何したんだらうね。』

『其れもねえ、梯子を掛たばかりで降りて來なかつたんですよ。下から衆皆が名を云つて呼ぶのに、又奥へ引込むんですつて、堪らずに源水さんごこの書生の富さんと云ふのが、梯子を上

てつ行つて、引抱えて下に降ろしたんですかねえ。おい／＼泣いて居たんですさ。』

『うむ、まあ、奈何したと云ふんだらうねえ。』

お澄は不審の眉を寄せるのを、藤兵衛は些と眼を遣つて見たが、更にお光の顔をじろり眺め、お光が此方へ眼を向けたので、忙て、眼を回して了つた。

『吃驚すると那麽ものでしやうか。』

辨藏が口を入れた。

『旦那其れぢやい、ですねえ。』

『病氣いと云ふに無理から引張つて來る事も出來ないだらうから……其れぢや少しでも治まつたら此方へ來て、安心さしなつて……。』

『え、其れにね、お内儀さん大變ですよ、長七爺さんが焼死んで居ますよ』

『然うだつてねえ、今金太が來て然う云つて往つたよ。』

『あの爺さん、寝呆けて、洋燈でも轉覆したんでしやうよ、それでなけあ、今時分に火が出る様な事がないのですからねえ。私しや昨夜残り番で……。』

『お前何時に歸つたんだい。』

藤兵衛が問ふのである。

『私しが歸つたのは十一時前でしたがねえ花之丞は御内儀さんと御一所でしたらう、留守でしたから、二階の部屋で、衆多と話して、歸りしなに、もう一遍火の氣のあつた所は見廻つたのですもの……ですからねえ、私しや長七爺さんが洋燈を轉覆したんでなけりや、放火だらうと思ふんですよ。』

藤兵衛は、少し伏目になつて、握飯を食ふに餘念が無かつたが、折しも玄關の方に、洋劍の敷居に觸れる音がして。

『主人は居るか。』

と、嚴格な調子で問ふ聲がした、之は交番の巡查で、火元調への爲に、藤兵衛を呼出しに來たのである、藤兵衛は尻輕く立つて應接したが、聽て引回して來た顔には、少しは不安の色も動いて居る、着物を着換へると、些ど便所へも這入つて、其れから巡查と同道して出て行つた。

罪惡の活畫

(一)

午後二時頃の輝しい太陽の光線は、敗殘を極めた六區の火事場跡を照らして居る、昨日迄榮華を極めた小屋の形態は何處へ往つたやら。白い灰土、まだくすくす煙りを立て、居る焼棒杭半ば焼けて焦綿のはみ出て居る灌園、之も黒くなつて居る石油の空罐など見る物として慘憺たる念慮を起さずには居られ無い。殊更可笑しいのは、昨日迄は、緋羅紗の服を着けた十五六の男の子が、其の青い、元氣のなささうな顔をしながら機械的に手を動かして、ごごごんごん〜と他の大勢の樂隊手に合して鳴して居た大太鼓なので、奈何したものか、三ヶ一しか焼けなかつたので、八歳から上、十一二の悪戯盛りが五六人寄つて引すり出し、昨日迄の小さい樂手の眞似をして、其處等で拾つた木片で叩いて居るのであつたが、巡查が廻つて來て、立付つて鋭い眼で其方を噴くと、さつと後へと馳けて行つて了ふ。

半焼けの二階立ち、半ば崩されて、置かれた瓦は踏み破られ、外から梁の見える家、然うした家から運び出された戸障子は、未だ池の方に寄つた空地に投遣られてあつて池の中にも重箱の蓋、木碗の一つなど主知れずに浮いて居るのを、緋鯉が間違へて突ついて居る。

公園一體興行物は、遠慮と云ふので、差控へたので、平生の賑々しい樂の音は聞えず火の消えた様な思ひがするもの、場所柄とて、用もないのにぞろ〜と見物に出る高島田、銀杏返し、

丸鬚、結綿と、其れにいなせの若者も交ちつて、日曜日、大祭日に増さつた人通りであるが、いづれも、火元の未だ板圍の爲て無い、玉乗小屋の前へと足を止め、何かと噂し合ひ、其の前に立つた酒造保険と、東京火災保険との儼然たる建札を見て、保険には這入つて置かねばならないものと云つた様な淡い感念を起して居る。

發火の原因は、焼死んだ七藏が、大方洋燈でも轉覆して自身も其の火に焼かれたものと定まつて了つて、見物の多くは然うした噂を爲合つて居るのであるが、折しも、隣の焼跡の方から此方へと出て來たのは、七之助で、もう火事場の風ではなく、縞物の着物の上へ唐棧の羽織を引懸け、素足に麻裏なので、座主の藤兵衛の代理に、兎に角類焼の詫に隣家へ顔出しに行つた歸りなのである。

入口の人込みを分けて、往來へ出ると。

『七公。』

威勢のいゝ懸聲を二三の若者から貰ひ、につこりして點頭き、其の儘背向ひになつて急足に行くのであつたが、千束町の藤兵衛の家の方へは行かず、板圍に就いて左へ、右側の西洋料理の前を前方に、四辻に立つて右へ四軒目の自分の居住へと目指すのであつた。歩み寄つて、自分

の家へ懸らうとすると、二階の隙子が開いて顔を出したのはともゑなので、命付けられて嗽ひ茶碗の水を屋根へ流す處だつたのである。七之助と顔を見合し、可愛らしい微笑を頬に上すのであつたが、七之助もニッコリとして其の儘急いで、家へ這入り、上り鼻に直ぐ付いてある梯子段をどんくどんと駆け上ると、三疊と六疊との二間、合の襖は取り拂はれて、緋裏の薄い蒲團の上に、花之丞は髪は昨夜の儘振亂れ、惱ましげな風情に座つて居るのであつた。

(二)

『今歸りました、淋しかつたせう。』

云ひながら、七之助は通つて、蒲團の側にと座る。

『お歸り。』

花之丞は、眼を上げて、歸つて來た人を見たが、何處迄も髪はしげな面地で、睫毛には露が宿つて居る。

『気分は奈何です、少しはい、ですかい。』

『はあ、胸を何處かで打つたと見えて……。』

花之丞は鳩尾の處を其の白い細い手で憊う押えて。

『こゝんそこが、きゅつくと痛むの。』

『そいつあ、いけませんねえ。』

眉を潜めて、何處迄も同情するものゝ様に云ふ。

『しかしねえ、そんなでもないの、ともちやんと二人切りで、ぼつねんとして居ると、何だか淋しくていけないの、いろ／＼の事が考へられて。』

『そうでしやうつて、這麼こと太夫は馴れないんだから……彼方から誰か来たでしやう。お登御飯は濟んだんでせうねえ。』

ともちの方を回顧つて云ふと、其の可憐な眼を上げてともちは。

『お光さんが、御粥をお師匠さんへと煮て持つて来て下さつたの、其れでもねえ御師匠さんは召上らないの。そら此處にそのまんまで。』

と、枕元の行平の蓋を取つて、ともちは見せる。

『太夫食べないと身體が弱りますよ。』

『先刻ね蜜柑と、唐饅頭を二つばかり喫べたんで澤山なの。』

と云つて嫣然として見せる。

『然うですかい。』

と云つて、七之助は、其の枕元にある水引を懸けた封包に眼を遣つて、

『これは。奈何したんです。』

『七さんが出掛ると直ぐ、御内儀さんと横田の旦那とが連つて被入したの。』

『御見舞、横田助藏と書いてあらあ、ちやああの旦那が持つて來なすつたんですね。』

『あゝ。』

と云つたが、花之丞の頬には稍嘲けの氣味を帯びて笑みが動くのであつた。

『あの爺さん仲々太夫には深切者なんですからね。』

『でも私しやあの旦那は嫌いよ。ともちやん好き。』

ともちは笑みながら頭を振つて見せ。

『耻が下つて、何だか助平つたらしい。』

『でも當時はお金なんだから、ともちやん一つ取持たうぢやないか。』

『嫌な事つた。死んだつても。』

『は、は、は、は、それは、那麼小いつぼけな身體して間に合ふ様な言振りをするから可笑しいや……太夫何ですかい、お内儀さんも、横田の旦那もあつしとこへ初めて来たんですが何とか云つて居ましたかい。』

『あ、大層奇麗にしてあると稱めて居てよ。』

『そりやおしまさんが付いて居るんですもの。』

どもゑが横合から又口を入れる。

『どもゑちやんはほんとに小間癒れて居るね。』

七之助に嘲けられて。どもゑは顔を赧うして横を向いて了つたが、七之助は、膝突き直し。

『お内儀さんは太夫に何とか云ひましたかい。』

『あ、云つてよ……中二階が明いて居るんだから宅へ来いつて、直ぐにもと仰有つたんだがねえ、もう少し此儘にして置いて下さいつて、日が暮れてから参りますとお返辭して置いたのよ。』

花之丞は、靜に答へるのであつたが見るく七之助が歸つて少し出た元氣は消え去つて、眉さへ打潜められる。

(III)

『太夫は彼方へ行くのが嫌なんですすかい。』

七之助は屹として問ふと、花之丞は其の眼を瞪り輝かしくして、凝と七之助の面を瞷るのであつたが、直覺の鋭い然して人の眼色を能う汲分けるに馴れて居る七之助は、只に先方へ行くのを厭ふばかりか、他にもう一つ、何とは分らねど、秘密の影が潜んで居る事を感應するのであつた。事實此の時花之丞は、之から藤兵衛と日夜接觸せねばならない事を氣遣ひ、昨夜の藤兵衛の恐ろしい顔を思ひ浮べて居たので。

花之丞が何とも返辭せぬので、七之助は、強いて造り付けた様な笑みを浮べながら、重ねて。

『那麼に嫌なんですすかい。』

『だつて、窮屈だらうと思つて其れが心配になるの。』

口から出る儘の言葉を辛じて云つて退け、避くる様に、顔を伏目にするのを七之助は其の性質の濃情眼色で、じろり／＼眺むるのであつたが、其の胸には、自分にも包んで居る秘密の罪惡の影が思ひ起されて来て、其れが花之丞とは離れ難ない命運の糸が繋がられて居るので、

座が森となつた儘に、走馬燈の様の其の罪惡の幻影が頭橋の中に浮び上つて來るのであつた。花之丞を憐うして自分の住居へ、一間に落付つて對向ふのは初めてなのだ、其れにも一方ならず心を挑發せられたので。

今より八年以前の事柄で、七之助が故郷の越後を喰ひつめて、東京へと登る道中すがらの出來事なのである。一人あつた母親に死別れ、身に積る借金に堪へ兼ね、住み馴れた河合村を夜の暗に紛れて發足し。懐には金子一兩。之を生命の綱と頼み、水を呑んでも目指す東京迄の旅用、道を蒲原郡に取つて三國峠へと近道を取つたのであつた。取つて廿五歳の厄年、血氣盛んとは云ひながら、流浪的の生涯を初める身の、心細さは一通りでない。馬追ふ事を知れど、草鞋造る事を知れど、其れが何にならう。

況して自分は奈何したものか、厚意地者で餘り人々の氣受け宜しからず、知る人と仲違ひした數は少くないので、其れも思ひ切り能く故郷を後にした一つの原因である。

三國峠の此方の麓の宿場で晝飯を些とした煮賣屋で認め、借て、峠へと懸ると、之は上州の者と云ふ旅商人と道すれになつた。

四方八方の話に足の勞れを忘れて、午後の三時頃夏の強い光線を、清水の流る、所、松の下蔭に避けて、胸一杯露底から吹き上げて來る清しい風を受け入れたが、七之助には一生の大厄日で、其の旅商人が、下の宿で貰つて來たと云ふ菓子を一口腔に入れると覺えず、うとくと眠氣が差て來て、其の儘其處に眠つて了つて。

不圖眼覺すと四邊は眞暗、大空には數限りない星の瞬きで、夜露はべつとり、身内は露つて、單衣一枚の肌は、風は辛く當つて流れの音は袷元を締めさす。はつと心附いて、急いで懐へ手を遣ると、南無三虎の子の壹兩は親譲りの墓口ともに影形なく、袂を拂へど襦を拂へど出様等なく、其の夜一夜涙に沈んで、身の不運を悶え慈悲ない天道を恨み、今迄心の底に持つて居た世間に對する反抗心を高めたのであつた。

(四)

曉東の空から洩れる微光を便りに、奈何せ超えねばならぬ峠の、鉛の様に重たい身軀を勵まし、村里から響いて來る明の鐘を憐に聞いて、足を運ばすのであつたが、隱氣な空合の、兎に角雨にならねばよいが此の上の難義の懸らぬを念じて、朝の十時頃漸く頂上に上つて、其處で清水一杯自然の恵に浴びて、俗人通りのない峠を、前に信州路、上州路の山々を見ながら進

むのであつたが、二丁と行かぬ先に右側に一軒の建物が見られた、座心地の嬉しさ胸に込み上げて、懸命に駆込むと人も居ないお救助小屋。委頓として其の羽目板に背を靠して、身の行末の事、つくづくと思ひ案じて居ると、楣に當る雨の音。

『やあどう〜降り出したな。』

と思つて居る折しもあれ、下からばた〜と足音がして同じく此處へと駆け込んで来た人影があつた。

見る處、四十五六の年配、背の低い、鼻の扁平い、口の大きい、小さい眼に狡猾そうな色を堪へて、腕節の太い、其の上に思ひ切つて色の黒い、一見して何處も懐しいと思ふ處のない、草鞋脚胖の旅商人らしい風體の男であつた。右の手に、蝙蝠傘と、草袍を抱えて、懷中を膨らかして居る。

此方が先へ休息んで居るのを見て、別段驚ともせず些と會釋して。

『降り出して来ましたねえ。』

世馴れた口調に心易く云ふ。

『俄に降り出して来ましたから、困らつしやつたでせう。』

身の苦痛を見せじとの負魂を見せて應へる。降り懸つた身の難義の昨夜から、今初めて人の顔を見るので、何さのう他人ならぬ心地のせられ、顔の賤しいのも忘られて心は佛様のやうに山出しの七之助には思はるゝのであつた。然りながら彼方の人は、其の小さい眼を擴げ思ふ様、凝と此方の容子を見ながらも、別段優しい言葉を懸け様ともせず。

『あ、馬鹿に濡れてちまつた。』

と獨言ながら、腰から手拭を外して、其の肩先きの邊りを拭ふて居る。

七之助は人戀しさの餘り、舌を動かしたいのであるが、彼方の餘り外そ〜しい舉動に身仕れが出て、其れに性來餘り辯舌の軽い方で無いので、勞れ切つた、身をしゃんと立て直し、折あらば語らんと、隙を覗つてじろ〜と覗して居ると、彼方は愈々よそ〜しく迂散臭さうな目遣ひをし、此方からは態どらしう放れて床に腰を降すのであつた。

之が後には一つ座に顔を合す、花之丞の父親とは、神ならぬ七之助の毛筋程も思ふ様はない。餘りとは無情い人の任打、木でも石でもあるまい。老たりと云へども突けば熱い赤い血の出る人であらうにと、七之助は、輕蔑せらるゝよと知つて、業を煮やすのであつたが、回顧つて自分を見れば、然うした舉動を爲らるゝのも無理からぬ、兎に角母存生の折手織の單衣の新衣一

枚身に纏つて居るもの、身内は汗と塵埃とに塗れて、頭にも寝轉んだまゝの草の葉も附いて居るであらう。顔は自分には見えないが、今朝から飯粒一粒たりとも腹に入れぬ身の、堪え難い空腹に悩んで居るので、眼は窪み、頬は落ちて、乞食の相を顯はして居るであらうなごゝ、下卑して思ひ悩むとは知らずにや、彼方の人は、其の腰に附けた風呂敷包を解いて、其の中から竹の皮包みを取り出し、折からの午飯時とて、悠々と辨當を使をのであつた。

(五)

見る眼の七之助には地獄の呵責に異ならぬ其の白い飯粒、黄色い香の物、赤い梅干もあるらしい、其の外は湯婆、高野豆腐の煮べ。日頃の珍味佳肴も之には増すもの非じと思はれて、只管に心は其方に、眼は其の色彩に眩惑され、餘りとは賤しき舉動よ、淺間敷き我よと、心に叱り、思ひに制してもつい眼は其方へと向ひて了ふ、其の人の口の中に入れて、黒き鯛に嚙む様見ては、然ながらに戀しき人春はれる心地の肉動き胸湧るさへあるに、彼方の味に拍子を取りて舌鼓を打つ心憎さ、思はずも高き音として唾を含み、眼も眩む様に思はれたが、もう何としても怖へ切れず。七之助は眼をばち／＼として。

「旦那……甘さうに召上るだねえ。乃公は越後のものでがんすがねえ。昨夜此の前方の山で、盗人に旅用を了然奪られて了ひました、今朝から飯一粒口に入れられねえで、腹が減りました堪へられねえだ、御慈悲に、其の握飯一つ恵んで遣つて下つせえな。」

思ひ切つて七之助は恚う云ふのであつた。旅商人は、じろり此方を回顧つたが、如何にも賤み切つた眼遣ひをしながらも、少しも口を利かずに矢張りしや／＼と握飯を頬張る。

「こんな山の中で、後へも行かれましねえし、先へも行かれねえで困り切りますだあ東京さ、はあ行くもんで、迂散な者でありましねえ。昨夜眠る場所が無えで、徹夜考え込んだり、歩いて見たりした、から這態になりました、些つとも迂散な者ぢありませんねえ。」

重い口を動かして、おど／＼と怪まれぬ様に辯解するのであつたが、矢張り彼方は言葉を交はさずに、此度は冷酷にも、此方の言葉が聞えぬ様な素知らぬ顔をして、回顧きもしない。

勘忍ならぬ侮蔑せし仕打よ、心外なる舉動よと、七之助は、思はずも齒を噛みしめてるのであつたが。凝と瞋つて居る中に、彼方の握飯はもう盡きて了うのであつた。

「おめえ様は、鬼か蛇か、人がこんねえに頼み申すに薄情せえ。」

涙へす口惜し涙をばら〜と流して一度は憤激の拳を握るのであつたが、縫るは神佛の袖、頼むは情けの人心と思ひ直し。

「御前様が、食はうと思つて造へて持つて來さつしたいの、其れ乃公横合から呉んろと云ふは悪かんべえ。謝罪るだあ、だが其處の老爺様、乃公嘘も隠しもし無え、東京迄行き附く旅用を盗人に爲て遣られたんだ乃公が愚鈍から起り申したこんだが、恵んで遣つてくだせえ。一錢でも二錢でも之から下に降りたなら、餅屋がありますべえ……御恩は生々世々忘れましねえ。」涙を浮べんばかりにして云ふのであつたが一度鬼か蛇か恨だ言葉に腹を立てたものか、以前にも増して、難しい冷かな顔色を造り、竹皮を彼方へ丸めて投げ捨てながら。

「御頼みですがな、私些つとも持合せの小錢が無いんですだから、御氣の毒だが御断り申しますよ。」

意地悪く云ひ放ち、外の模様を覗ひ、雨の小止みを見て。

「ごりや行かうかい。」
獨言ちながら腰を上げて、小屋を外へ出て行かうとするのである。

(六)

優しき情け受けんと思へばこそ、辭を低くし、身を卑めて頼むなれ。受けじとなれば唯往還ですれ違ふたる人と我れ。五分も引く可きものに非じ、身の不幸を物語つて、縫る袖を無碍に振拂ふばかりか、我れを侮り、賤み、輕しめ、辱めし所業、勘忍袋の緒を切つて、七之助は眼々と突立ち上つた眼は、憤激に輝き渡つて、睫毛には口惜し涙の露。

「待ち居れ、情知らずの鬼奴、恚して呉ねば……。」

罵りながら、突と走り寄つて、早や戸口を放れて、二足三足行懸けた旅商人の尻元に後から手を延して懸けるかど見ると、右手を舉げて力任せに其の横頬を打つのであつた。

「何をしやがるんだ、此の乞食め。」

一打食つて眼を盛めながらも、逸早く身を交し、持つたる蝙蝠傘を上げて、七之助の脳天目懸けて打下す。

身を交す間もなく、七之助は手辛く打たれて眼眩み、一時は後へ倒れる様にも覺えたが、一層憤激と、復仇の念は燃え上つて來て、突と身を立て直すで見ると、遮二無二と突懸つたが、右

手が都合よく對手の咽喉に懸つたので、其の儘力任せに押えるのであつたが、

『お、お、已れ……なにを……。』

困しげに叫んで、右手の蝙蝠傘を空に振つて、腕及ばすと思ふて、其の足を舉げて、七之助の拳を自懸けて蹴上げるのであつたが、七之助は押えし其の手を放さばこそ猶も懸命に握付けるのであつたが、

『うむ、うむ……うーん。』

と呻り聲を立て、反抗の手が緩むので、今迄身を對手の顎の下に免れて居た七之助は、不圖眼を上げると、無残やもう眼は白くなつて居て、手を放すと、案々子の様に他愛もなく後へはたり倒るのであつた

『態見やがれ。』

其の上にと罵りを浴せ懸けたるもの、元來が下卑産れの、卑怯な正直な處があるので、一時はつとしたのであつたが、胸の怒りを了然静める事は出来ず、殘酷にも二蹴り三蹴り牌腹と思ふ邊りを足蹴にするのであつたが、豚の死骸を叩く様な音がするのみで、對手は少しの苦痛の聲も舉ねば、足も動かさないのである。

七之助の眼は、何の事はない餓えた肉食動物の眼で、恐ろしい残忍と酷薄の色を帯びて居る、小雨がしどろしどろ降り懸る中に凝と立つて居る立姿は、未だ燃え上つた怒りに焼き盡す餌物を求むる様な態で、對手が全く息を絶し、死に果てたるを少しも悔ひ恐れる態は見えない、——此の病的に強い感情は、妻が姦通したと云つて、其の對手の男を手斧で殺し、其れに飽き足らで、其の男の父親迄も殺し、自分も死刑に處せられた父親譲りなので、——其れから自分にも解らない或力が、纏ぎくく自分の胸に込み上つて来るのを覺えるのであつたが、其れも懸て解まると、今度は、或事に勝利を得た感念を胸一杯に、漲らすのであつた。少しは自分を危む念も交ちつて。

(七)

谿から谿へ、峰から峰へと吹き渡る風の音小雨を横に吹いて、ゴーとばかり杉の梢に鳴り、或怪物が潜んで居る様な、山深い氣勢が身に沁んで、五里の峠の絶頂に足音一つ立たない、七之助は暫時は、死骸を眺つて居たが、驟て樹立深い峠の前後固懸つて死骸の側に突と寄り、しやつきりと延びた左の足に手を懸け、此方へと、雨に濡ふた石轉道を曳きつて小屋の中へと曳

込み、小屋の真中に拵へてある石圍ひの爐の中へと投げ出すのであつたが、直ぐと自身は外へ姿を顯はし、其の四邊の樹立の下に立ち寄り、杉の枯葉、枯枝を拾ひ集め、一抱え餘りになると、小屋へと歸つて、死骸の上に蔽ひ懸け、四度ばかりも往き還りした後先刻見附けて置いた、小屋の些とした棚の上に載つてある燐火を取出し、一擦り、こ擦つて、ばつと火を枯葉と枯枝に移すのであつた。

ぱち／＼と音して、火は勢よく燃え上り、燃え擴り、白い煙は濛々として立ち上つて見る間に小屋の中に滿ち渡るのであつたが同時に一種得ならぬ、恰度豚の脂肪身を焼く様な嫌な臭ひが爲て来る、七之助は少し身を距いて立て、居たが、投げ出した時に折屈んで居たのであらう、火の加減で、其の死骸の左の足が動き、ぐつと延びて、恰度立つて居た七之助の足元へと出たので、思はずも驚とした舉動の眼を睨つて、七之助は一足後へ引退いたが、然うと見極めて頬に一微笑さへ、浮べす又も以前の地位に回つて、凝と自身で行ふ此の殘酷なる所業を何の事は無い、小雀一羽焼鳥に料理する様な態度で凝視つて居る。

今二の腕の邊迄たくし上げられた衣の袖に火は移つて、其の腕の折屈みの處が、じい／＼と油立ち、色が變り出したので、其れから頭の毛にも、火が燃え付き出したのでぢり／＼とぢり／＼と焦げて行き、奈何した機會か、顔に乘せられてあつた燃え枝が下に落ちると、其れは醫へられな程、恐ろしく焼爛れて相恰の變つた顔が剣出しになつたので、流石七之助も思はずも其の上へべつと唾を吐き懸け突と顔を背けると、一層に激情した様に、片側の棚を壞き初め、其の板片を火の上へと投げるのであつた。

もう此の時は、火は小屋一杯に擴がつたと云つていゝので、前方の羽目板は盛んに燃え出し、其れから誰が置き忘れたものか、上の梁に箆が置いてあつたが其れに火は容捨なく燃え移つて、里から見ても此の時に煙が上つて居るのが見える程であつた。自分の爲した悪事が、總て火の力で消え失せて行くを見て取つた七之助は、急いで戸口の外へと出て、猶も凝と見て居たが、不圖心附いたのは、此の旅人の懷に持つて居る金子なので、奪ひ取らうと、急いで再び戸口の方へ馳寄つた時は、何うしても手の下し様のない、中は一面の火なのであつた舌鼓を打つて残念がつたが、直ぐ心が變つて、之は賤しい事で、盜賊根性である氣が付くと、直ぐそんな思想は了然と放擲つて了ふと、恰度火が、小屋の屋根を抜いた處で、更に盛に煙は立ち昇り、火は勢よく燃え上るのであつたが、七之助は、自分の足許に落散つてあつた蝙蝠傘を拾ふと、其れを勢よく煙の中へと投込むと其儘、身を後へと回して、時

の方へは行かず道なき後の森へと馳込み茂る葉で天日を蔽ふて居る榎の根方に熊笹や、野薔薇が茂り合つて居る中へと身を隠し、其處から顔を出して、小屋の了然焼落ちるのを瞞のであつた。

(八)

此の恐ろしい罪悪を行ふた三日目からして七之助は悔ひ初めたのであつた、東京へ着いて桂庵の手に懸り、先づ最初そは屋の出前持となつたのであるが、莫伽に者云はずで、始終考え込んで居る様な風が氣に入らないと云つて其處を断はられた、次に料理屋の下足番に雇はれたが、其處をもじろくと、執念深さうな忌な目遣が、客商賣の家には向かないと云つて断はられたのであつた。

這麼風で、一二年の間は、三月と一つ家に落付く事が出来ず、桂庵でさへ持餘し者となつたが、其れが不圖した縁で、隅田川に沿うた今戸の或る高貴な人の寮の掃除番に備はるゝ事となつた、絹の様な空の色。天簾絨の様な柔な水の面。天使の様な閑の姿遠く隔つて見ゆる製造場の煙突の煙りと、總て七之助の心を和ぐる所の種となつて、漸次に其の胸に浮んで来る苦痛の面影は

妙くなつて来た、一年程其處に居る間に、了然と東京辯になつて了つて、少し財布に餘裕が出来た様になると酒を呑む事を覺えた、初めの中は無論其れでも時折起る心の煩悶を消す道具にして居たが、終了には總ての飲酒家の様に、一日とても酒の香を嗅では生きて居られぬ様な身となつた。が、別段其の酒で不覺を取る様な事の無かつたのは一度犯した罪を何處迄も悔ひて、其の償ひとして善良な人となり、世に謝罪しやうと心懸けたからで。

此處で三年の月日は経つたのであるが、其の主人が物故して、他の人の代となつて面白くない事が續き、其れから再び淺草公園にと舞ひ戻り、其の時恰度小屋に人が足らなかつたので、今度には桂庵の世話でなく、知る人の手から其處へ住み込むのであつた。

去年の春花之丞に遇つて、其の身上話を他の者から耳にせぬ迄は、七之助は、總て此の公園にある者よりは、より多く實直に、行末の事迄も考へて居たのであるが、其れが一朝にして、恰度春の温い光りが總ての花期に向つた様に、心の奥底に潜まつて居た恐ろしい影は發露し、藏生つて来て、漸次に心を支配し、再び以前の様に自己の罪惡の發露を恐るゝ卑怯な性情となり、夜一夜恐ろしき空想の煩悶に襲はれて、叫び聲を發する事もあつた。

花之丞の美しき可憐な姿を見るに付け、其の美しくしき容貌を備へて居る丈に、より多く自己

の身を鞭撻されて、坐りに自己の小さき手が行ふた事柄が、驚かる、迄残酷な命運に發展せられて居るのを、嘆き、彼は呻る酒の量を進ませずには居られなかつた、然ながら強烈な酒精の酔も、全く彼を安全な、別天地に送る事は出来ず、七之助の心は漸く亂れ初めて、自己の周囲を取捲いて居る漂々浪々の生涯を送つて悔なき者に伍する様になつた、始めは花之丞を見る眼に憐憫の色を浮べて居たが、其れが憎む様になり、憎くしと思ふ念は、恐ろしと思ふ念慮に代つて、自己の平和と、安全を得るには何としても花之丞を此の世の外に追ひ遣らねばならぬと、性来の残酷な血が燃え上つて、然うした惨ましき思ひを持つて來たのである。

今花之丞と自分の部屋で、對座つて居る七之助の胸は、慙して罪惡の活潑が其れから其れと一時に浮み上つて來て、押えんとしても押え切れず、顔色にも顯はれんとするので、思はずも下を向くのであつた。

腕の疵

(一)

『あの親方は歸つてお出でなすつたの。』

花之丞が問ふのである。七之助はあたふたと顔を上げて、

『警察からですかい。』

『あゝ。』

眼を忙しく瞬きながら黙頭いて見せると、

『え、親方も了然警察に惚られて了つて朝から三度通つたんですつて、其れでもまあ無事に納まりが付いて、長七爺の失策と極まつたんですがねえ……。』

云ひながら、眼をばち／＼とさして何を思ひ出したのか眼の色を變へた。

『本統にあの爺さんも可哀想に、格別世間に罪も造らなかつたらうに、那麽非業な死能をするつて……。』

花之丞は、疑とあらぬ方を瞠つて、つく／＼と慙う云ふのであつたが、さも自分が知つたかの様に、

『其れも之れもみんな前世の約束事なんたらうねえ。』

矢張あらぬ方を瞠つて云ふ。

『然うでしやうつて、少々耄祿は爲て居ましたが莫伽程人の善ひ、慈悲深げえ性質なんでした

「……」

『甚麼に死にしなには辛かつたらうねえ。』

心の奥底から響き出た様に獨言つのであつたが、昨夜火影でちらと見た蒼ざめた死顔が、其の神經質の眼に浮び上つて來たので思はずも我を忘れて身顛ひをするのを、七之助は凝と瞠つて、更に花之丞の胸に潜んで居る秘密に一步近づいた様な氣がするのであつた。

『花之丞何でしたらう。眼が覺めて起き上りなすつた時や恐怖なかつたでしやうねえ。』

『ほんとにあんな怖ない事つて、私しや寝たばかりの處なんたもの、衆皆は些つとも私を係つて呉ずに……あゝなるど人情と云ふものは人には無いもんだわねえ、逃げ様にも奈何しやうにも廊下は煙が一杯渦巻いて居るんだもの、何だか茫と取り逆上せて了つたんだわ。』

『然うでしやうつて……花之丞、あの何でしやう、火の中で長七爺さんが助けて呉ると喚叫いたのが聞こえたでしやうね。』

裕元の傷、頬の剝けた處、紫色に膨れ上つた處などを、じろく〜と見ながら七之助は云ふのである。

『いゝえ。』

とばかり、花之丞は胸を轟かして、颯と顔色を變へすには居られなかつた。

『聞かなくつてよ、私の起きた時きや小屋の中は見なかつたがねえ、一杯の火だつたらうから……』

漸つとの事に云ひ得たものゝ、ホツとばかり熱い息が吐かれて、額に汗の浸み上るのが覺えらるゝ。

『ぢや其れ迄にもう御陀佛だつたでしやうよ、まあ御幸福でさあ、そんな聲を聞かうものなら、花之丞の様な氣の弱いのは、一生耳に附きますからねえ。』

『御師匠さん、そんな怖い話は止めにおしなさいませ、私晩に便所へ行けませんから。』
ともるが横から言ふのであつた。

(一)

『あは、は、は、は……』

と、七之助は 大聲に笑ふと

『おは、は、は……』

と、花之丞も笑ふのであつたが、

『七さん、御前さん焼焦げになつた長爺さんを見たの。』

『え、見ましたとも……。』

勢よく答へたもの、言葉の末が濁つて眼に異様の輝きが見えた。

『甚麽風だつたね。』

花之丞は重ね懸けて問ふ。

『御師匠さん御止しなさいまして云つたら。』

ともゑは鼻聲になつて云つたが、

『七さん云はなくつてもよくつてよ……。』

と云ひながら座を立つて次の間に行かうとする。

『あは、は、は……。ぢや云はずに置かう、まあいゝから此處に座つて御田でな。』

『ぢや云はなくつて……。』

『あゝ。』

と、七之助は花之丞の顔を鋭い眼の色で覗ひながら頷くと、ともゑは漸つと安心して座に直る。

『臆病者だねえ、此人は、話位したつて奈何もありやしないぢやないか。』

『だつて……。』と、ともゑは云ひながら膝に手を置いて、二人の顔を等分に見分けて居る。

ともゑの此の仕打で、七之助は少なからず便宜を得たので、胸の苦痛、煩悶を隠し得られたのであつた、三時間程前に、金太を初め小屋の者一同で片附けた長七爺の黒焦げの死體は、一方ならず、朝來よりの働さで神經過敏になつて居る彼の頭惱を刺激して、單に其の死骸が長七爺

とは思はれず、廻る因果で、自分が手に懸けた上焼いて了つた、花之丞の父の死骸の忘念が願はれ来て、自分に片附けさすのではないかしらと迄、只管に恐れ戦いたのであつた。で今、其

の人の子に長七の死體の模様を問はれ、思はずも心を掻き亂され、彼方に事の次第柄を知られ、謎を懸けられたかの様な感念を持つて居たのである。

『ともゑちやん、お前憚りだがねえ、此の灰吹を下へ明けて来てお呉な。』

枕元の煙草盆から灰吹筒を抜いて渡す。

『はい。』

と云つて、立ち上つて受取つたともゑは下へ降りて了つたが、其の時、禰神の袖が捲れて、ちらと見えたのは、手首の奥にも一ヶ所血の浸み上つた傷なので。

「花之丞、貴方手にも怪我をして居ますね。」

「えへ。」

と云つて、花之丞は手を曳込ますのを、

「些とお見せなさいませ。」

云ひながら、隠さうとするのを無理に曳張らうとするので。

「何をされるの……。」

振放さうとするのを、放さばこそ。ぐつと取つて。

「花之丞、貴方は私に隠して居ますねえ。」

物凄く光りを眼に見せて、花之丞の面を鋭く瞞るのであつた。

(三)

「御よしなね……何を爲るの。」

花之丞は稍尖り聲に云ひ放つ。

「太夫、之りや打傷や突傷ぢや御座いませぬせ、しかも二つ所人の瓜痕ですせ。」

「其れぢや私が長七命を殺したと御云ひのかい。」

眼色を變へて、花之丞は思はずも叫んだのであつた。

「莫伽有仰い、虫も殺さない太夫が奈何して那麽事を爲さるもんですか巨蛇の道ちや蛇でござぬ、

丁と飲込めました、いや、解りました。」

物凄く云ひながら、取つた花之丞の手を放す。

花之丞はもう顔々と眞蒼になつて、

「解つたつて、何が解つたの……。」

「太夫、そんな事を有仰るものぢや御座いませぬ、七之助にや眼がありませんとあ。」

「何だか知らないが怖い事を云ふのねえ。」

「なに、些つとも怖かありやしませぬや、太夫の力になつて上げるんですから、大船に乗つた

氣で被入い。」

花之丞はもう黙言つて、俯頭いて了つた。

「解つたでしやう、い、ですかい。」

念を押すのに、黙言つて、矢張俯頭いて居たが、漸つとしてから、

「私にや何が何だか、些ども解らなくつてよ、此の傷は、私逃げしなに釘で突ひたと覺えて居るの……。」

「強情張つたつて駄目であ、え、へ、へ、へ……。」
嘲笑つてから、

「親方も然うでも爲なきや此處の瀬戸際は越せまますまえよ……だが巧く仕懸けたもんですね。長七爺は何の事は無え、人身供養に上つた様なものなんですからねえ。」

「七さんお前さん何を云ふの。」
亂る、胸を押隠し、眩となつて早口に云ふ、

「えへ、へ、へ、へ……。」
更に嘲笑つてから、

「可哀想に、いくら年を老つたつて生身の身體であ、打擲れりや傷いんですから、其れを燒殺すなんて……太夫偽爲を切つたつて、追付させせんや、丁ど其の親方の爪痕が話してまゐあ。」
聲に熱い情を籠めて、落付いた容體で云ふのに、花之丞は丁然と引付けられて了ひ、覺悟の胸を根こぎに覆へされて、感々とするのであつたが、思ひ直して、顔を眞蒼にしなからも。

「七さんは人を燒殺した覺えがあると思へて、能く見當が付くのねえ。」

冷然として云ひ放つ。はつとばかり七之助は、自分の心の底を見透された様な氣がして、思はずも顔色を變へる折しも、とん／＼とんと、階子段に威勢のいゝ音を立て、ともゑは、吩咐けられた用事を果して上つて來た。

何か楽しい事のあつたのか、片頬に笑を含んで居るので、些と七之助の方に眼を遣り花之丞に擦寄つて、媚めかしき容體をしながら。

「青柳さんが、御見舞に來たと云つて下へ被入りましたよ。」
小聲になつて云ふ

(四)

「おや、然う……。」

と、ばかり花之丞の氣色は忽ちに嬉ばしげに變つて、七之助の思惑を覗ふ様に仰ぎ見るのであつたが。

「青柳さんと……いつも小屋へ被入る、花之丞の情人なんでしやう。」

「あゝ然うなのよ。御察しがいゝのねえ。」
「ともゑが横合から老成た口を利く。」

「宜うがすとも、すんく御通しなさいまし、私が花之丞に忠義初めに、下で見張つて、誰が来たつても、喰留めて了ひますから、緩然りお逢ひなさいまし。」
云ひながら立上つて

「ともゑちやん、旦那が上つて被入したらお邪魔になるからお前も下へ降りて居るのがいいんだよ。」

云ひ捨て、急ぎ下へと降つて了ふ。引違へて青柳澄夫は、七之助に教えられたと見え階子段に音を立て、上つて来た。

昨夜花之丞に借りた肩懸けを片手に、外に一包菓子折らしいのを提げ、今日は茶色が、つた羅紗の背廣を着け、二時ばかりのW袴派手な色の袴飾を付つて、錫銅の鎖を扣鈕穴から通して短剣に挿ませ、一見若紳士の風態で、今しもともゑが直した襦袢の上に寛然と座るのであつた。見るから花之丞は懐しげな色を眼に見せて。

「ようまあ来て下さいました。奈何して此處に居る事がお解りになりました。」

「前方の火事場の前に立つて居ると、熊蔵が居たもんだから尋ねて来たのだ。」

「然うでしたか、其りや奈何も……昨夜あれからお歸りになりましたか。」

「え、歸りましたとも、お蔭で。捲まつて、風邪も曳かすに無事に想うしてまあお目に懸られます。」

笑を含んで云つたが。

「ともゑちやん、今日は……昨夜は怖かつたねえ。」

「えー。」

と云つて、ともゑは、恥かしさうな身態をして、茶を入れて居る

「奈何も難有う……。」

と云ひながら肩懸を前に押し出し、其れに添えて、御見舞のしるし迄と、菓子折を差し出す。

「奈何も済みません。」

藝人風の態度で、花之丞は禮を云ふのであつたが、つくぐと戀しい人の姿を見て、其の頬に上氣した様な赤味を持ち。

「今日は、貴方了然と御見舞へ申す程立派ですわね。」

昨夜からの恐怖さも、先刻からの心遣ひも總て消えて了つた様に云ふのであつた。

『然うですかい。』

丁寧な言葉使ひに云つて、少し氣態悪さうな風を押し隠し。

『一體甚麼梅鹽しきだつたの。今日の晝時分會社で事務を行つて居ると、淺草に住んで居ると隣合つて、其れで知つて急いで馳け付けて來たんだがねえ。』

『其れはまあ御遠方の處を……。』
と切つて、

『貴方、私はねえ……。』

何かしら心から云はうとするのであつたが不圖側にともゑの居る事に心附き其方を回顧ると、

ともゑは其れを察したのか、茶を入れて其れへ差出すと、氣を利して、とん／＼とんと階子段を下に降りて行く。

(五)

『貴方此頃お忙しいんで御座いますか。』

ともゑの足音が階下に消えて了つてから云ふ。

『何だね此人は……自分に縁をつは見舞口上を云はしも爲ないで居て……。』

『だつて、貴方もう憐うしてお目に懸らりやい／＼ぢやありませんか……ほんとに貴方此頃お忙しいありませんか。』

『奈何したと云ふんだらうねえ。』

云つてからつく／＼と青柳澄夫は花之丞の面を眺るのであつたが、花之丞が遠慮に感情を燃え上らして居る事は滅多に無い事で其の可愛い二重臉の皮がはち切れさう眼は活々と輝いて、頬には美しい淋檜の様な赤味を持つて居る。

疑を見て、何か心に異様に感じながら。

『忙しく無かつたら奈何するの。』

『本統にお忙しく無いんで御座いますか。』

少し急ぎ込んで念を押す。

『あ、今一月程の間は至極のんきな所なんだ。』

『然うで御座いますか、其れぢやねえ……。』

「あゝ。」
「貴方私を連れて旅行を爲して下さいませんか。」
「旅行を……。」

意外の言葉に澄夫は驚きの目を瞠つたが。

「そんな事して、親方は許すかい。」

「許すも許さないもないぢやありませんかどうせ小屋が焼けたんですから、暫くは奈何したつて、開ける事は出来ないのですから、其の間をねえ、這座事は滅多にないでしやう……。」

片手を男の膝に、下から覗き込む様にして澄夫の顔を覗る。
「其れぢや、親方へは内密で、こつそり抜出すと云考えなんだねえ。」
「えゝ。」

と云つてから、膝の手を曳き、氣遣しうな眼遣ひして、
「御嫌ですか。」

「嫌ごもなんども、未だ云つてないぢやないか……幾日程。」

「幾日程つて、私はもう此處へは歸らない心算なんです。」

「えゝ。」

慈きの眼を瞠つた澄夫は

「そんな事して、其れから奈何するの。」

稍急込むで問ふ。

「奈何するつて、私にも其れから前は解らないんですが、……私には一日だつてもう此處に居るのは嫌になつたんです。」

「藪から棒にそんな事云ひ出したつて爲方がないぢやないか。」

「貴方は思つたより薄情い御方で御座いますねえ。」

恨めしさうに云つてから、涙をばら／＼と頬に傳はす。

「いや然う思はれちや困るさ、そんな譯ぢやないが……。」

前方の思惑を打消す様に忙して、我にも解らぬ事を云ひながら。

「よろしい、花ちゃん然う云ふのによ、いろ／＼事情があるんだらう、僕も思はん事もないのさ、よろしいとも一緒に逃げて上びやうとも前の事つて僕も男だ奈何ともしやう……。」

「えゝ、それぢや貴方一所に……。」

「あゝ、いゝとも、何處迄も、死ぬ所迄も行かうよ。」
少し顔色を變へながら、きつぱりと云ひ放つ。

『有難うよ。』

と、花之丞は男の膝に嬉し涙を流して突伏すのであつた。

馳け落

(一)

磯の方へ曳上げられた漁師船の船の方に腰を降して居るのは澄夫で、其の外側に、砂地に降り立つて、背中を舷に寄せ、片手を澄夫の取るに任して、疑つて暮行く沖の方を瞠つて居るのは、花之丞である。

此處は豆州熱海の海岸で、二人は過ぐる打合した日の夜、男は黄昏過ぎから外に立ち待て、女はともゑを使ひに遣り、七之助の外へ出た隙を窺ひ、人目を忍んで手に手を取り此處へと逃れて来たのである。花之丞は、ネルの下着に色變りの八丈を重ね、派手な鹿緋りの大島の書生羽織を端折り、髪を油氣の少ない束髪に結つて、今し、片手に鬢のほつれ毛を掻き上げ嬌然として

して

『ほんとにいゝ氣色ですね。』

云ひながら澄夫を回顧る。

さ、さ、さ、さぶと大きな音を立て、渚に打つかる大波小波、白い泡を立て、颯と雪花の様に散つて、また颯と勢よく引いて行く後から、直ぐまた押寄せて来る、二人の立つ直ぐ側に、可なりな巖があつて、其れに浪の花が散る時の美しくしさ。其の浪の花を超へて、すつと見透しの伊豆の海は、彼方の地平線際迄も、穩に風ぎ渡つて、然ながらに絹を延べた様、折から西空に銀の様に輝く夕雲の反射を受け、美しく輝き渡る中に、少し左に寄つて、大島の島影は浮いて見え、其の山の頂から吐き出す黒い煙りも眼に付く、村里の鐘の音にも歸らぬ漁舟の幾つか未だ散在つて居て、今し海岸に近く白帆を擧げたのが、東へと急ぐのである。

『いゝ景色だ、東京に居ちや兎ても見られつこは有りやしないからねえ。』

『ほんとですなえ、私しや山の中で育つたんですから、本統に海が珍らしくて、いくら見て居たつて些とも飽かないんですよ。』

『ほんとだねえ、花ちゃんの家の中に居ると何だか薄茫然と考え込んで居て、閉き切つ

た顔付をして居るのが、濱へ出ると了然消えて了ふんだから、可笑いね。」

『然うなのよ……』』

云ひながら、海の面へ回した顔を、再び此方へと向け。

『何だか怎う海を見て居ると、私の胸の中のもぢや〜が吸ひ込まれて了ふんですもの。』

『其れぢや、嫌な東京へ歸るのを止めて此處で漁師の女房にでもなるといふや。』

『えい、然うするんですとも。』

云つた顔には悲しい色が動くのを、隠す様に笑顔を造つて、又も沖へと眼を回す横顔をつく〜

と澄夫は眺めて。

『花ぢやん、何だつて、私に云つて呉ないの。』

『云つて呉つて何を……』』

不審な眼を上げて此方を瞞る。

『御前、度私に隠立て爲て居る事があるだらう。』

『隠立て爲て居るつて何を……何も貴方に隠立する様な事つて無ぢやありませんか。』

平氣に云つて退る。

(二)

『あゝ、もういゝよ。奈何せ僕は相談對手にならないんだから……』』

『えい、貴方を被仰るんです、私、貴方に何も隠して居る事なんて、些とも無いぢやありませんか、それに那麽無理ばかり云つて……』』

身をもう了然と此方へ向けて了つて、両手とも澄夫の掌に置き、

『貴方は、何でしやう、私が煩くなつて了つたもんだから、那麽事云つて、私を放擲かさうと

思つて被入るんでせう……』』

もう眼に涙を溜めて居る。

『莫伽……莫伽有仰い。』

と云ひ切つて、凝と花之丞の悲しげな顔を優しい眼で凝視り。

『あれつばかし云つたのがそんなに考えられるかい。』

『だつて、然うぢやありませんか。』

顔を俯自にするかと思つて、投げる様に澄夫の膝に頬を當て、熱い涙をばら〜と互に握り

合ふ掌へ注ぎ懸くる。

『何の事はない、花さんは小兒見たいだ。』

『然うですとも。』

泣聲に云ひながら未だ顔を擧げ得ぬ。

『これづばかりの事がそんなに悲しいの。』

『悲しう御座んすとも、私や親もなまや、往く所もない一人ぼっちですもの……。貴方に見捨てられて了ひや私やもう死で了はなきやならないんですもの。』

『いつ僕が捨てるよ云つた。』

『だつて今の様な事を有仰る様では……。』

『今の事つて……花ちゃん、お前は何と云つたつて私に隠して居る事があるに違ひないんだと思ふ。今の稼業を爲るのが嫌だからつてそりや花ちゃんの様な氣性ぢや無理も無からうさ、然し今迄にや氣態もそんな事を話さなかつたぢやないか、火事で小屋が焼けたからつて急に嫌になつて了ふなんて、奈何も腑に落ちないぢやないか僕が些いゝと見て居ると、僕が居る時や然うでもないが、便所へでも立つと、亢然として腮を給の中へ埋めてさ。何がそんなに考え込

まれるの、考込むのいゝさ。人の足音なんかすると吃驚した様に顔を擧げて、何か隠さうとするんだもの、さあ、其れを打明けて話して貰ふぢやないか。』

澄夫は、花之丞の悲嘆に心を折られずに思込んで云ふ。が花之丞は顔を擧げずに啜泣きのみするるのである。

『え、花ちゃん……何が那麼に悲しいの泣かなくつたつていゝぢやないか、さあ、え、花ちゃん。』

澄夫も顔を伏目に、聲を耳の端へ送り、嘸す様にして云ふ。

『貴方は些つとも人の心を御存知ないんですもの。』

『あ、知らないから云つて呉と云ふんぢやないか。』

『私しや之から奈何うしやうと行先の事はばかりが考えられるぢやありませんか。』

『行先の事つて、それなら幾度も僕が云つたぢやないか、僕の力の及ぶ丈け盡して……。』

と云つて澄夫は些と黙言つて了つたが、花之丞は未だ顔を擧げ得ぬ。

澄夫が些と聲を詰らしたのも無理はない事で、此の問題ならば、此處へ二人が落付いてから、今日で二週間餘り、幾度となく其の舌頭に繰回されて、澄夫自身では些と背負切れない問題なのである。花之丞は何としても東京へ歸るのは嫌と云ふ。再び藝人社會へ這入り大勢の人前に、自身の身體を玩弄にして見せるのは、何としても忍び難い事で、日に夜に或る怖ろしい聲に呵責せられる様な心地がすると云つて、然ながら己が周圍に今迄から繋がつて居る命運を、了然と忘れたかの様、其の遠慮深さうな、自我心の少ない、優しい性情に反して、澄夫の優しく説き聽す言葉にも應ぜない。

『其れならば何とする……』

と、一步突込むで問ふともう、何にも花之丞は答へぬので、貴方に見捨てられたら死ぬばかりだと云つて、話の終りは泣顔を見せらるゝに定まつて居るので、其の東京へ歸るのが嫌、藝人仲間に這入るのが嫌と云ふ言葉の底に、何かしら一つの原因が横はつて居ると、澄夫には見えるのである。で澄夫は其れとはなしに謎を懸ける風に問ふのが常であつたが、奈何も明瞭とせぬので今日は不闘憊うと思ひ定めて問ふたのであつたが、其れが又、以前の話の緒口に回つて了つて、又も泣顔を見せらるゝ事になつたのであつた。

『花ちゃん、屹度御定りに話を其處へ持つて行つて了ふが……其れなら成行に任すより爲方が無いぢやないか。』

『成行に任すつて奈何するのです……』

花之丞は漸くに顔を擧げるのであつたが、夕べ湯上りの薄化粧の顔は涙に班點れて題なしになつて了つたのを澄夫は憫れげな眼で見ながら。

『兎に角一應東京へ歸つて、前方の様子を見、お前も知つて居る植村も居る事だから奈何とも話の方法があるだらうと、思ふぢやないか。』

『よしんば植村さんが御出になつたつて承知する様な家の親方ぢやないんです、お金を萬と積みや知ん事、貴方は親方の氣象を御存知ないんですから刑廢事被仰るのですわ。』

『でもお前は借金なんかは少しばかりで、年期は後一年だつて云ふぢやないかい。』

『え、然うですがねえ、其れを奇麗に承知する様な人ぢやないのですからねえ。』

『其れには此方にも方法があるだらうぢやないか、無法な事を云はうもんなら警察と云ふものもあるんだからねえ。』

『……』

花之丞は黙言つて了つて、何かしら恍然とした容體であらぬ方を瞞つて居る。

もう四邊は大分暮れて来て、沖には未だ灯は見えぬもの、浪頭が白く浮き上つて見え、風も黄昏の氣を含んで冷たく吹いて来るので、澄夫は優然と腰を擧げて、船に立ち上つたが、其の儘ヒラリと砂路へと飛び下りて花之丞と肩を並べる折しも、彼方から濱の小娘等三四人、手拭を姉様冠りにして、流木を拾入れた草蓆籠を背負ひ、鼻歌を唱ひながら、浪頭を磯傳ひに此方へて遣つて来るのであつた。

『そんな顔して見つとむないぢやないか、さあ之でお拭き。』
手にして居た手巾を渡さうとする。

『いゝえ私持つて来ました。』

と、云ひながら長い袂から紅絹の手巾を取出して花之丞は顔を拭ふのであつた。

(四)

二人は其れから直ぐ肩を并べて宿の方へ、濱傳ひに歩むのであつたが、澄夫は、花之丞の可憫な姿を凝と見て、

『花ちゃん、もう這麼話は止さうね。』

『えー。』

『あゝ今泣いた鳥が笑つた。』

『まあ酷いそんな、事云つて……。』
涙で端の少し濡れた紅半巾を指先で弄りながら、俯目になつた顔を少し擧げ、澄夫の顔を覗ふ様にして、微笑さへ頬に浮べながら云ふ。

『早やく行かう、もう直ぐ了然暮れて了ふから。』

『貴方もう、今にお月様が上りますよ。』

『さう〜今夜は満月だね。』

『こゝで見て行かうぢやありませんか。』

『何だか僕は寒くなつて来た、花ちゃん寒かあ無いか。』

『いゝえ、私は些つとも、何だかばか〜する位なんですよ……然しお感冒を引すといけませんから早く歸りませう。』

『いやそんなでも無いんだ。』

『ほんとですか。』

もう丁然泣顔を収め、媚めかしく寄り添ふのを、澄夫は満足げな眼の色に見下して、突と其の手を取るのであつた。

『冷めたい手を爲て居るのねえ。』

『然うですかい、貴方の手はほんに柔らかふ御座んすねえ、まるで女の手の様な。』

『あゝ、花ちゃんの手を曳かうと思つて柔かくして置いたの。』

『あら、そんな御上手な事云つて……。』

『まつたくよ……こんなにして居る所を、ほら、あの助藏爺に見せて遣りたいねえ。』

『ま、ま、ま、ま。』

『甚麼に怒るだらう。顔を真赤に猿の様に其れこそほんとに、あの禿頭から烟を出すだらうねえ。』

『然うでせうか。』

『然うでせうかつて……定つて居らあねえ。』

『ねえ澄夫さん、其れよりか、私しや親方がどんなに大騒ぎをして居るだらうと……ねえ、其

を思ふと可哀想になるんですよ。』

『全くだよ、花ちゃんは金の鳴る木だからねえ。』

『貴方、知れや仕ないでせうかねえ。』

『また初まつた、それからまたそろそろ心配して、鬨ぎの顔を見せるんだらう……。』

『あら然うぢやないんですよ。』

二人はもういつか町の入口近く来て居て、平生行き付けて居るまゝに梅林の方へと道入り込むのであつたが、四邊はもう暗くなつて居て、其れでも白い花影の其處此處と人影が動いて見えて、媚めかしく笑聲も交ちつて、話聲さへ耳に付くのであつた。

『おい、前方の亭で少し休んで行かうか。』

『然うですねえ……ですが貴方もう歸らうちやありませんか。』

『大分遅くなつたから其れもよからう。』

『屹度女中達が何處へ行つただらうと噂して居るでしやうよ。』

『然うだ、大分いつもよりは遅いから、もしか情死でもしたんだらうかと、心配して居るかも知れないさ。』

一四〇
笑ましげに云つて、梅林を通り抜けて、二人は宿の方へと歩を早めるのである。

(五)

二人の宿は、長生館と云ふので、三階建の、何處やら西洋趣味の交ちつた、見付きの立派な、土地でも名高い温泉宿なので、其の表二階の東の端が、二人の居る座敷なのである。

『御歸りなさいまし。』

入口の帳場の番頭の聲に迎へられ、二人は敷臺を上へ、階子段を登り、處々の座敷に灯が點つて、障子に人影の映して居る前を通り、自分の座敷へと這入るのであつたが座敷には灯が點いてあつて心が細めにしてあるのを、花之丞は急いで捻ぢ上げ、澄夫が取つた鼠色の鍔廣の帽子を手早く受取り、帽子懸へと懸けると、自分は些と桂隠しの細長い鏡の前に立つて、髪のはづれを小櫛で搔上げるのであつたが、澄夫は、ずつと前方へと進んで往つて、閉て切つてある障子を勢よく押開き。

『花ちゃん、早く来て御覽、今御月様が上る所だ。』

『あら、然う。』

急いで此方へと来て、澄夫と肩を並べ、眼を其方へと遣る。

ひた／＼と吹き寄せて温かく、柔かく、春陽四月の天にもあるまじき風の訪づれて清しい薫りが其處此處にと瀾り渡るよと思はるゝ熱海の空の彼方に、二月二十八日の満月は、未だ白銀の光りを放たず、晝に描いた二見の岩のお日様の朱色で徐々と、地平線を放れて、今海面に半ば其の姿を顯はしたのである。只に都を離れて此處に人目を忍ぶ戀の二人のみならず、未だ海岸を去り難てに波の音に親しんで居る人達、梅林の逍遙に可愛の人の手を取つて居る人の眼にも觸れるので、一齊に艶麗なる月の恩澤を説いて、讚美の聲を擧げたに違ひないのである。

『あゝ、いゝ事ねえ、私初めてですよ這度御月様を見るのは……。』

『然うだらうねえ、朝起きるのが平生十一時だからねえ。』

『まさか、そんなでも無いんですがねえ。』

と云つて、些と回顧つて嫣然とする。

今天地は二人のものなので、花之丞の胸からも、澄夫の胸からも、總ての苦痛と、配慮は消え去つて了つて居る。此の座敷の中を日夜離れない藤兵衛の幻影も、此の美しくしの夜、穩かなる夜に負けて、彼方に月影見ゆる海の底へと沈んで了つたに違ひない無論此の幻影の黒い手は、

澄夫には見ないので。

一體二人が慪うした熱い戀中にならねばならない様になつたのは、世間に能くある戀と格別變つた筋は少しもない。美くしい姿に思ひ付く。色白の凛々しい口元に思ひ込む、両方とも能く思はれたいのが一杯で、自分の本性を深く押し包んで、優しい情を見せ懸くる、瞳の色の使ひ分けをする、手を握る、之れが序幕で貴族も平民も一つ道行く術と些つとも變らなかつたので、唇と唇と相觸れる事となつたのは此の熱海へ來てからなのである。

下手もこう
下ノもこう
X
對手が熱人である丈けに澄夫から仕懸けた戀と爲てい、のである——之は無理もない事で、賣女ならば知らぬ事、情慾が中心に火の様に燃えて居ても女と云ふ動物は滅多に自分から口を切らぬものなので——知つたのは一昨年の暮、口を利く様になつたのは、去年の夏の公園の一夜、之には些とした物語りがある。

(六)

俄に舞臺、表看板前共に電燈は消えて、何としても蘇が出來兼ねぬ。電話で電燈會社へ懸合つと、線の故障で二時間近くも合があるとの事で、其の夜折角這入つた客を斷はつて、小屋を閉

めて了つた、這歴事は滅多にない事なので、親方藤兵衛は顔を膨らまして、座方一同、太夫の方では恭悦斜めならずで、花之丞もともゑを傳れ、熊藏をまあ供の形ちで、派手な大形な浴衣姿で今日結つた島田監、團扇使ひしながら、公園の夜をそゝる歩きしたのであつた。

銘酒屋の前を通ると、仲から若い男や、若い女に聲を懸けられるので、熊と公園の樹下暗を縫つて熱い仲店へ出て、人いきれに倦んで、其れからまた回して、観音の左横を藤の棚に懸り、其處を又も左に折れて、植込みの中の些とし捨腰懸に三人並んで腰を降した。

ともゑの愛度氣ない言前。食氣に話は移つて、熊藏は嘉永産れなるに係はらず、西洋料理が死ぬ程食べて見たいと云ふ折であつた、不意に足音がばた／＼と近くへ急しく遣つて來て、突と前の切株へ腰を掛けた人影があつた。白地緋の浴衣に、縮緬の兵兒帶、麥藁帽、時計を持つて居ると見え何處からか洩れて來る遠くの光りで、鎖がきら／＼と輝いて見える。

花之丞は餘りの不意に驚いて、突と立ち上らうとも思つたが、人の價値を衣裳で判斷するに馴れた熊藏は、先づ時計の鎖に心安して、其れからもう一つ、縮緬の兵兒帶に安心して、前方が酒臭い息を吐くにも拘はらず腰落付け、煙草吸ひ／＼今の洋食の話を續けるのである。來たのは澄夫なので、本郷邊りに住む會社員の、夜は此邊り迄來て、折には仲之町の花瓦斯に照

らされて、其の下宿生活の寂涼を醫し、湧き上る盛春の血汐を汚ない戀の空想に押し鎮め、無
論戀と肉慾とを混同して居るので、今宵も金ある儘に、廓の門を潜らうと思ひ、其れにしては
酒氣のないのを恥ぢ、嗜まぬ酒を些とした立飲屋で叩り、餘りの熱さに暫時此處へ涼みに來た
のである。

若し月影があつたならば、澄夫は初めから勤慎して見せたに違いない。よし意氣地を男子の生
命にして居るにしろ、女々しい遠慮勝ちに立ち働くの、女の心を引付け得るもの位は、澄
夫も知つて居るので、只美しい婆の女が前にあるよと思ひ、先づ青年の誇り心を交ちへた
微吟をしたのであつた。微吟を済ましても未だ花之丞とは氣付かなかつた。手にして居た煙草
の火がいつの間にか消えたのに心付いて、前の人へと些と頭を下げて借りに行つたが、恰度熊
藏の火も消えて了つて居たので、

『ようがす私燐寸を持つて居りやすから……。』

と、深切にも熊藏が袂から燐寸を取り出しはつと磨ると、一閃の火光は、直ぐ澄夫の胸を踊ら
したので、酒の氣の勢は、

『やあ花之丞さんでしたか。』

澄夫には無い事で、恚う聲を懸けたのであつた。

(七)

清涼の爽快を與へて居る夏の夜の大氣は、人の頑固な心を溶解して了つて居て、直ぐ澄夫の言
葉に答へる心易い口上が、先づ熊藏の口から出、其れからともるが出し、花之丞が交じつて、
話の調子は總て圓く運び折角恚うして此處で知合つたのも何かの因縁なのであらうと、古い事
前ではあるが、道理なる言葉の様に總ての人を領かす言葉を澄夫は吐いて、一行を西洋料理屋
へと誘ふたのであつた。初めは花之丞は少し否んだのであつたが、手早く熊藏の手に握らした

銀貨一片は、自己の意志の強くない花之丞を此方へと従はしめたのであつた。
之が此の戀の親密を加える初めで、其れから此の年月、二人が一つの夢を見なんだのは、澄夫
が清いでもなく、花之丞が清いでもなく、只機會と時間が無かつた行爲なのである。
濱邊の方から手風琴の音が洩れ聞えて來て吹いて來る風に梅の香が乗つて居る、月は今少し
上つて、其の姿を了然と海の上に出したのであつたが、兎の走る浪の上の光りはなく、矢張朱
色で、漸次、寸、二寸と海面から放れるのであつた。

がや／＼と人聲が俄に下の通りにしたので澄夫も花之丞も眼を遣ると、旅から旅へ渡る法界節の一行で、網笠に振袖姿の化粧した乙女二人を前に、後から舞刀背にした二人の若者が従ふて、孰れも胸に抱えた月琴を掻鳴らしながら遣つて來るのであつたが前側の床場の硝子戸が開て、小洒瀟とした小娘が姿を顯はし、呼び止めて一包握らすと。

『有難う。』

と、威勢のいゝ聲で云つて、其の前へとすらし並ぶと、直ぐ其の後に半圓形に人立するのを、店の灯は華やかに照らし出す。もの／＼しげに撥を上げて一人の若者の方が絃を拂ふと、尺八の合奏で、更に其れに合唱する涙を含んで居る様な黄色い女の聲が激邊の濕つた空氣の中へと擴がり渡る。

櫻の上から二人は凝と瞰下して居る。

『一日も早く年明け主の側、縞の羽織に繻子の帯、似合ひますかよねえ、似合ひますかよ見てお呉れ……。』

之が唱ひ納めで、法界節の一行は彼方へと往つて了ふのを、花之丞は恍然とした容態で、つく／＼と其の後姿を見送つて居る、今宵程此の憐む可き境界の藝人が技術を尊崇の念を持つて聞

いた事はなく、其の悲哀な調子は一方ならず心に觸れ、思ひを沈ませ、更に慰藉せられ、斯くて其の悲惨なる境遇を想ふに付け、座に同情の念を動かして、親しき友の様に思はれたのであつたが翻つて我が身を見て、世の中の如何なる場所にあるかを見ると、思はずも泣かれて彼方へと薄月夜の霧の中へ影薄く次第に包まれて行く一行の後姿は、然ながら己が身の末路の活畫の様に思はるのであつた。

『花ちゃん、奈何したの。』

『へえ……。』

『また泣いて居るの。』

『貴方ねえ。』

『あゝ。』

『若しか私が落魄れて、あの様に大道藝人に成下つて了つたら、私の事なんか思つても下さらないんでしやうねえ。』

例の紅絹巾を頬に當てながら云ふ。

(八)

「花ちゃん、莫伽な、またそんな事思ひ出して居るんだなあ。」

「え、……。」

叱られて涙の中に嫣然として見せる。

「お止しなさい、不充ない。」

澄夫は云つても見たが、更に笑みを含んで

「あ、花ちゃんが法界節の月琴弾にならうもんなら、僕は今往つた男の様に、舞刀を脊負つてさ、後から手風琴でも合奏して追従て往くさ。」

「ホ、ハ、ハ、ハ。」

「ほんどの事だよ。其の時や泣顔を見せずに随分働いて貰はなくちやならないよ。」

「はい、よろしう御座いますとも。」

「花ちゃん見て御覽、お月様が大分上つただらう、もう少し経つて、此の障子に影が映す様になつたらねえ、今夜は、小夜衣仙太郎の道行を聴かして貰ひたいねえ。」

「え、法界節になつて下さる御禮に、どつさり弾いて御聞かせ申うしませうねえ。」

「あは、ハ、ハ、ハ。」

と、快げに笑ひながら澄夫は眼を月の海へと遣ると花之丞は矢張り添うた儘、燈火の影燦き前の道へと眼を遣り、其の灯影の中に動く人影を見て居るのであつたが、何を見附け出したものか、はつとした氣配に、身を後へと曳き、固くなつて未だ其方を覗ふ様にしながら瞰下す顔には、了然血の氣は消えて了つて居るのである。其れと心附いた澄夫は

「花ちゃん奈何かしたの。」

「ねえ、貴方今彼處の床屋の横へ這入つたのは、確に七公に違ひないんですよ。」
聲を潜め、息を詰めて云ふ。

「莫伽な、そんな事が……。」

「いえ確に違ひないんです、あの羽織を着て、茶色の帽子を冠て……。」

「床屋の横つて、其處のかい。」

「え、私し未だ其處の横から覗いて居る様に見えるんですが、黒い頭の端が見えてや爲ないですか。」

延び上つて澄夫の見様とする袂を取つて、

『そんなにしちやいけません、見附けられると大變ですから。』

『何も居や爲ないぢやないか、氣の行爲なんだよ、奈何して此處に居る事が知れ様道理が無いぢやないか。誰か似た人が其處へ這入つたんだらうよ。』

『いゝえ、然うぢやないんです、疑とね……まあ此處を閉めて、此方へ這入て被入い。』

『若し七公だつたら引込むだつて無駄な事つた、ちやんと知つて來たんだらうから。』

『其れでもまあ。』
花之丞の速て方が一通りでないので、流石に澄夫も少し心を動かしたのであつたが、強いて落付いて。

『花ぢやんが、まあ、然う云ふんだから、氣安めに此方へ這入つて様ねえ……。』

云ひながら障子を閉て、火鉢の前へ座るのであつたが、花之丞は未だ立つた儘、顔の色を納めないのであつたが、些と聴耳してから。

『ねえ、疑と此方を、帽子で顔を隠す様にしてね、一生懸命見て居るんですよ、不圖氣が付いて、可怪い人と瞰下すと、急いでばたくと顔を前方向けながら、彼方へ驅込んで了つたんで

すよ。』

澄夫は飽迄も落附いて。

『若い者が二人居るんだもの、岡焼で見居たんぢやないかい。』

云ふ折しも、廊下をばたくと上草履の音がして、近付いて來るまゝに、座敷の障子が開いて、這入つて來たのは、十七八の女中であつたが、丁寧に疊に手を突きながら

『あの御客様が被入いました。河口と有仰る方で御目に懸りたいつて。』

二人の顔色は見る間に颯と變つた。

(九)

『何と云つて訪ねて來ました。』

稍あつて澄夫は口を切つた。

『あの此方に青柳さんと云ふ方と、お雪と云ふ若い……おほ／＼／＼。』

と女中は笑聲を入れて

『別嬪さんの方が被入るでしやうと有仰るで御座いますの。御名前が違つて居りますからそ

んな御方は御出になりませんと御断りいたしますと、丁とお座敷を御存じて被入いまして、二階の端の憊うくたつて此方らの御座敷を御指しになるんで御座いますよ。』

「幾歳位の方なんで御座います。」

花之丞は眼を忙しなく動かしながら問ふのであつた。

「然うで御座います、四十五六もつと老つて被入いませうか、お肥りになつた、背の低い、色の御黒い二重廻しを着て、立派なお装飾をした方で御座いますよ。」

二人は眼を見合した。

「お通し申してよいか、悪いか解りませんので、直ぐ通らふと被仰るのを御止め申してお伺ひに上つたですが。」

「藤兵衛に違ひないや。」

澄夫は鋭く眼を輝しながら花之丞を瞠めて云ふ。

「然ふでしやうよ。」

應へる顔には、血の氣は了然無くなつて了つて座つて、膝に置いて居る掌の指先は顫へる居るのである。

「奈何いたしませう。そんな御方は知しないと云つて御断りいたしせまうか。」

澄夫の沈吟して居る顔を見て、女中は促がし顔に問ふ。

二人は又も眼を見合した。

「あの一人で御座いますか。」

花之丞が口を開いた。

「あ、然うで御座いました、御二人さんなので御座いますよ、一人は御供の方の様な細春な

若い衆なんですよ。盲の股引を穿いて突懸け草履を穿いた……。」

「誰れだい。」

澄夫が云ふ。

「誰でしやう……木戸番の常公か、其れともいつも座に能く来て居る金太かも知れませんよ。」

女中は氣の毒氣な態で二人の容態を瞞り、返辭を待兼ねて居る折しも、ばたくと廊下を忙しなく足音を立て、此處へ又も遁入つて來たのは帳場の番頭なので、

「へい今晚は。」

と、軽く挨拶し、綺の羽織を着た姿をびつたりと座らず、

「お加代さん申上げたのかい。」

「えい、今申上た處なんだよ。」

「然う。」

云ひながら此方へと向ひ、桃尻腰に擦手しながら。

「その何で御座います、被入つた御客様の有仰るのには、實は彼は家の者で、無断で出たもので、八方へ手向けをして探して居たのだが、此方に居ると云ふ事を突留めて實は迎へに来たものだと、へい、慙う有仰いますので御座います。」

一息吐いてから。

「其れで、名前の處も本統の事は云つてなからうが……お加代さん云つたかい。」

若い女中を回顧つて番頭は云ふ。

「へい、申上げたよ。」

應へると頷いて見せ。

「旦那様の方が青柳澄夫様と仰有つて、奥様の方がお雪様と有仰るんださうで、手前共の帳面には、奥様の方は同じお名前前で御座いますが、旦那様の方は植田敏夫様と確か有仰りました様

で、へい……。」

番頭は眼を瞬きながら二人の顔を見る。

(十)

「よし解つた。此處へ通して貰はふ。」

澄夫は其の頬に少し血の氣を上げ思ひ切つて云ふ。

「若し貴方、そ、那麼に無暗な事して……。」

花之丞は思はず息を機ませて云ふ。

「然し御奥さん何で御座んす、遇はなきや遇はないでいし、遇はなきや遇さないでい、そんな事は爲たくないから慙うして溫柔しく來て居るのに、奈何の慙うのと云ふんなら、遇ふ様にして遇ふとまあ警察の方を呼んで來ると有仰るんで御座んせう然ういたしますと、手前共の方でも事が大業になりました、へい……。」

番頭が口敷を叩くのを、鋭い眼で澄夫は瞋り、未だ何か口を利かうとするのを。

「よし解つた、遇はう通して下さう。」

『よろしう御座います、ぢや私は……。』
番頭の立ち懸らうとするのを。

『まあ些々……。』

花之丞は猶も呼び止め様とするので。

『いゝと云つたら爲方が無いぢやないか僕が居るから、お前は落付いて居るがいゝ。』
激しく花之丞を叱りながら。

『いゝです、通して下さい。』

『へい。』

番頭は腰を上げて部屋を外に、廊下を早足にはたたくと馳けて行くのである。女中は二人の状態を見ぬ態して、其の邊りを些と片附けるのであつたが、火鉢の側に寄り、鐵瓶に手を觸れると、

『あゝお湯が御座いません様ですから、下から持つて参りませう。』

吐く様に云つて、其れを機に之も部屋を出て行くのであつたが、二人は初めて顔見合して、太い溜息を吐合ふのであつた。

『貴方奈何いたしましたせうねえ。』

花之丞はもう了然と取亂しおろ／＼聲に云ふ。

『まあいゝつたら、那麼に氣を揉まなくつても、鬼ぢやなし、蛇ぢやなし、僕に任して置きな、

前方の出様に依つて……。』

云ふ折しも、藤兵衛の太い聲が聞えて、階子段を上る音が響いて來るのであつた。

花之丞の顔には、一しきり苦悶の色は増して、肩に戰慄きの影さへ見えるのである、片手を胸に、片手はピタリ膝に付けて居る澄夫は、顔の色こそ少し變へて居るが、飽迄も男らしく從容の體度を作つて、ちらと横目で見ると、花之丞の態度に、同情の眼を動かすのみであつたが早や追つて來る足音に口を利かず、眼顔で、落付けと力を添へ、倍て衿を正して居直るのであつた。

『へい、此の御座敷で御座います。』

先刻の番頭の聲が部屋の外にして、

『御客様で御座います。』

障子は開いて、二人の人影が追入つて來た先に立つのは外套を片手に持つた河口藤兵衛で後に

頼くのは、推量の通り金太なのである、花之丞は戦慄しながら、もう俯目いて居る。

對面

(一)

後の障子を閉めて番頭は彼方へ立去つて了ふと、二人はやをら座るのであつたが、先づ藤兵衛の方から口を切つて。

「初めて御挨拶いたします。毎々小屋では御目に懸つて、御顔は能く存じて居りますんですが

……川口で御座いまする。」

寸寧に頭を下げるので澄夫も頭を下げると金太は後の方で、窮屈さうに座りながら、之も頭を下げる。

羽織の裾を後の方へと颯と捌いて、膝に手を置くと、藤兵衛は、ぢろり横目に花之丞を眺めてから、頬に微笑の影を寄せ。

「青柳の旦那、恙うして御目に懸つて下さりや俺や本望です。實は御目に懸つて下さらないかと、心配して居たんですが……。」

云ひながら、腰に手を遣ると、象牙筒の煙草入れを抜いて、例の銀の延の煙管を取り出し、煙草を詰め懸げ。

「若い中は有り内の事で、俺だつて覚えがありやすから、野暮な事は申しません。」

澄夫は押遣る火鉢の中へと、首を差入れ、火を點けると、口の端へ持つて行き、すうとばかり煙を吐くと、燈火の光りは白く浮き出して朦々と立上ります。

「ねえ青柳さん然うぢや御座いませんか、ですから俺や只御二人のお迎へに上つたんですと、奇麗に申上げたいんです。」

又も煙管を口の端へと持つて行き、矢張笑顔を描いて居るのであるが、眼は鋭く輝いて居る。

「いや、能う解りました。」

澄夫の返辭は之丈りで、花之丞の方を些と見たのであるが、花之丞は膝の上に手を置いて、容易に顔を上げ様とはせぬ。

「花之丞。」

藤兵衛が呼び懸けたので。

「はら。」

小聲で返辭すると、何の事はない小兒を賺す様に。

『まあ、いゝ〜……恠うして無事な顔さへ見せて呉りや、俺等文句はねえ。花之丞が出た後、甚座に心配したか……平生から藝人らしくない優しいお前さんだから、無暗な事は爲さるまいと思つて居たがねえ、其處が心配と云ふもんで、噂の奴あ、そりやお神籤の、八卦のと、一通りの騒ぎぢやなかつたんだよ。』

『奈何も濟みません。』

漸つこの事、花之丞は口を切つた。

『あゝ、いゝとも、濟んだ事は爲方が無いさ、奈何せ小屋はあんな鹽梅しきなんだから、五日や十日、一月にしろさねえ、御前さんの方で遊んで来たいと云ふんなら、乃公の方で嫌と云ふ理屈は無いんだから、明白に云つて呉れりやよかつたに……。』

と、眼を澄夫の方に向けて。
『青柳さんも、いくら御若いと云つたつて途中から一本端書でも出して下さりや宜う御座んしたに。』

薄氣味悪い程の出様であつたが、澄夫は容易に白い齒を見せ様とはせず、屹とした態度の眼に

威を見せて。

『ねえ、川口さん。』

やをら口を切るのであつた。

(二)

『何處から御出付けになつたものか、遠い處を遙々恠うして来て頂、何とも申様のない次第柄で、澄夫只恐縮すると申すより外は更に無いんです、先刻から御心持を段々と承はつて御怒りの事と思ひの外、思ひも懸けない御言葉で、私ばかりか花之丞だつて、何の位肩の荷が降りたか知れないんです、只もう重ねて恐縮の至りと申さうより爲方がないんで、幾重にも御足勞なり御心配なりを懸けた事を御詫びいたしますが川口さん、花之丞を此の儘私に下さる譯には行きませうまいか。』

若いに似合す、何處迄も落付き、殊に最後の言葉に力を籠めて云ふ。藤兵衛は眼を上げて、じかり相手の顔を見て、飽迄冷やかな、何を小癪な、然しながら、年の割には確然と應對する男だなあと云つた様な眼色を見せるのであつたが、直ぐと打消して了つて、然も〜困つたと云

ふ様な顔付をしほり一つ緩う吐いて、煙管を口の端に持つて行つたまゝ、眼を下に向けて居る。

花之丞は、思はず肩で息を切つて、先づ可愛い、人にと眼を遣り、更に轉じて藤兵衛の顔を些と覗くのであつたが、途端に其の前方に控えて居る金太と眼を見合し、遽て、顔を俯向けて了つた。

ほんと調子よく、火鉢の椽で、吹殻をはたいて藤兵衛は眼を上げたが、態さらしい浮かぬ顔色で。

『花之丞、御前さんは奈何云ふ了見なんだい。』

『えい。』

返辭したものゝ、もぢく身を動かした儘何事をも口に出し得ぬ。

『まあ一つ花之丞の了見方を聴うぢやないか。』

澄夫は其方逃けにして、藤兵衛は花之丞にと懸るのである。

『川口さん、私が慫うして口を切るんですから、花之丞の心の程も大畧推量して下さい。』

『はい……ですが花之丞は……。』

何か言はうとして峻しい眼付きをしたが、直ぐ思ひ回した風に、豊かな顔色を造る折しも廊下にはたたくと足音がして、女中が湯を持つて這入つて來たので、話は些と途切れの風で、花之丞も手を添へて、茶器が出されて、茶が注がれ、菓子鉢に鐵飴が盛られたのが出されて、女中が引退つて了うふと、話は以前に回つて續く。

『ねえ、青柳さんそりや慫うして、仲善く被入つたんですから、いろく御話も出来上つたでしやう、然しねえ、青柳さん、私も慫うして時間なり、旅用を費つて、遙々遠い處を迎へに參いつたんで……其れに何ですかまあ云ひたい事も澤山あるんですが其れを云つた處で、今更取回しの付くものではなし、顔を赤め合ふと云ふより外に仕草が無えだらうと控えて居るんですがねえ……。』

煙管に煙草をつめて些と吸ふてから。

『云ふて見りや花之丞の氣持を悪くさせまい、商賣可愛いと云ふ處から割出されたんですからねえ……。』

と云ひさして煙管を持直し茶を啜るのであつた。

(三)

『いや、能く解りました、御存じの通り花之丞は斯う云ふ氣象なんですからね之に聞きますと、後一年ばかりの年期ださうですなえ。』
澄夫は眼色を動かさず云ふ。

『然うなんですがねえ。素人衆が考へられると、只の一年ですが、藝人の末の一年と云ふのが、今迄の十年にも當りますんで……否其れも兎や角ふは云ひますまいが、何しろ此處は旅先の事で、落付いて話も出来ませんから、東京へ歸つてから、詳しい御話を伺ふ事にも爲、云も爲まじやうぢやアありませんか、私も、之も……。』
と、些と金太の方を回顧り。

『勞れて居りますから、御迷惑ですが、今夜は此處で御泊めなすつて下すつて、明日はお嫌でも御座いませうが、一つ一所に歸つて頂き度いんです……花之丞い、でしやう。』
じろり凄しい眼付きで、花之丞を賤る。

『はう。』

と、云つて花之丞は黙頭くばかりである。

『ねえ、青柳さん然うして下さいまし、恚うして迎へに遣つて来て、云いてえ事も云はずに居るんですから、些とは俺の云ひ分も立て、下さいまし。』

『其れでは、其れは宜かないと有仰るんですか。』

『宜かねえとは、申しやせんが、御前さんだつて、世の中の事を知らねえ御年頃ではなし、何もそんな阿漕な事を云はねえでも宜さうなものぢやありませんか。』

『阿漕な事とは何の事つた。其方に云ひ分があるんなら、此方にも云分があるんだ。』

澄夫の言葉は稍々激した。

『お前さんの方に云ひ分がある、こりやお面白い聞かうぢやありませんか。』

藤兵衛の言葉にも明に激した調子が見えたが。

『云ひ分がある、な、何を云やがるんだい唐變木奴。』

横合から唖へす金太が口を入れたのであつた。

『え、貴様の出る幕ぢやねえ黙言てる。』

藤兵衛は金太を制し、何と思つたか。

『あは、は、は、は、は、は。』

と、強いて造付けた様な笑ひを洩らし。

『青柳さん、此處で睨み合つたつても、詰らないぢやありませんか、……之うと其處で、何ですか、花之丞は貴方に何か話しましたんですかい。』

思ひ出した様に落付いて云ひながら花之丞と、番夫の顔を等分に見る。

『花之丞が話したらこそ僕が云ふんぢやないか。』

『花之丞が貴方に話した。』

眼色は俄に峻しくなつて来て、毗は稍釣り上つた、花之丞は吃驚した様に顔を上げ。

『私、な、何も話はいたしやしませんよ。』

遂て、言解けの唇を動かすのであつたが、藤兵衛は、怨恨一坏の眼を明けて、凝と花之丞の顔を更に睨り。

『あ、然うでしたか。』

ついにしりとして、然も膽に應へる様に云つて、い、つと、花之丞の顔を睨み付けると。

『親方、私、何も無暗な事は口外しませんから……決して私は……。』

偽ならぬ眼色を見せるのであつた。

(四)

きんげい

『花之丞、間違はなからうねえ。』

恐ろしく沈んだ聲で藤兵衛は念を押すのである。

藤兵衛は心密に感はずには居られなかつた。心弱い藤兵衛の様な女性に己れの硬り得る直ぐな

る松に搦むと直ぐ、總てに安心の吐息を吐いて、生死の境に盟ふた言葉を忘れ、生命にも係は

る事柄を忘れて、鵬見らる、迄告口したのであるまいか。

回すくも残念なのは、花之丞の言葉なり心を信じて、七之助の二階に見附人をも置かず放任

して置いた事で、自分に取つては一生の不覺であつたと、此時も思附いて心に悶え、更に自分

が彼夜花之丞に加えた威力と強迫が尠なかつたのではあるまいかと危ぶむのであつた。

『私は親方の御志は忘れはいたしません……人さんに迷惑の懸る様な事は云はうとは思ひませ

んし、ねえ、親方、あの時親方に助けられなさまや……。』

ひ續け様とするのを、

『あゝ、よし／＼解つた／＼、花之丞。』

と、藤兵衛は早口に云つて去けると。

『親方御解りになりましたかい。』

花之丞はおろ／＼聲に云つたが、涙を潜々と顔に流し、片袖上げて拭ふ間もなく、聲さへ立て、咽ひ入るのであつた。と、何を思つたか、突と立ち上つて、部屋を外へ出様とするのである。』

『花ちゃん何處へ……。』

澄夫が思はず口を切つたので、藤兵衛もはつとした眼を上げて、

『花之丞何處へ行くの。』

『些ど、便所に往くんで御座います。』

『おい、金太、間違がなからうが、ちや一所に。』

『へい承知まりました。』

と、云ひながら尻輕く花之丞の後から續いて、部屋を外に、廊下を彼方へ、花之丞の往く儘に

従ふのであつたが、と、と、とんと廊下を往き詰めて、梯子段に懸る二人の足音を聞濟すと、

藤兵衛は身を前へと膝行り寄つて、

『ねえ、青柳さん、貴方も男の意地で、然う御云いなさるんでしやうが、丸つきり貴方の御顔を潰さうとは爲ませんや、何も商賣可愛いのですからねえ、其う爲なくちや大勢の人を抱えて其の日か立往かないと云ふ仕儀で、奈何か御察し下さいまし、俺だつて鬼ぢやなし、花之丞の氣質は知つて居るんですから。』

云ひながらも、花之丞の往つた方の物音に耳を傾けて居るのであつたが、不意にけた／＼ましい物音がして、

『花之丞何處へ……。』

金太の叫ぶ聲がすると、俄に大勢の人聲がして廊下をばた／＼と縦横に往通ふ騒がしい足音があるのであつた。

(五)

澄夫も藤兵衛も思はず颯と顔色を變へて、云合した様に立上つた。と、下から。

『あの二階の八番の旦那様！』

と、疍高聲に叫ぶのかあつたが、澄夫は先に藤兵衛も頼いて障子を外に、廊下へと馳け出るであつた。ばた／＼廊下を走るので、何事が起つたのかしらんと、外の座敷の障子が開いて、人の眼の見る中に、二人は階子段に懸つたが、何と思つたか澄夫は凝と立行つて了ふと、藤兵衛は係はず、すり脱けて梯子段を下に馳降ると。向ふから馳けて来た、先刻の番頭は、稍眼色を變へて、花之丞が、奈何したものか、外へ下駄も穿かず素足で馳出して出て、其の後を金太が追ふた事、店の若者の二人ばかりも行つた事を話すのであつた。

敷臺の所へと来て、何方へ走つた事を聞いて右と聞くとその儘藤兵衛は其處にあつた上草履を穿き、之も後を追ふ可く、外へと馳出したがもう四邊に其れらしい人影は見え無かつた。稍臆ろ懸つた春の月光は四邊に輝き渡つて花咲き出づ可き美しくしき夜なのである。地低く一面に薄霧の漂うて、人は臆の中から出て、臆の中へと消えて往く態で、遠くの話聲が近く耳に、裏田甫の方でけたましく犬の吠えるのが聴える。宿を後に兎も角も此方へと、七八間馳出した藤兵衛の前へ、片側の軒庇の間からヒョッコリ姿を見せたのは七之助なので、月影に透し見て。

『七ぢやねえか、何してやがるんだい、頼間奴今花之丞が馳出したのに氣付かねえのか。』

『なに、花之丞が……。』

『金太が一所になつて馳出したが、貴様些つとも氣付かねえのか。』

『俺やいま……其奴が大變だ。』

と、遠て、裾をからげると。

『乃公兎に角街道筋を逢初橋の方へ行くから、手前や山の手の方を見て來な。』

『合點だ。』

右と左へ、別れるのであつたが、金太は花之丞を追つて何處等邊迄行つたやら、其らしい足音も叫び聲もせぬのである。

逢初橋

(一)

宿の戸口を一散に馳け出た花之丞は、何處を何處へと更に眼當は無いのである。只座にあつて、一種恐ろしの壓迫を感じ、其の壓迫に堪え兼ね、最初は只用達しにと下へ降りた身が、戸口の

明いてあるのを見ると丁度、大空を望む籠の小雀の様に、氣も座ろになつて、つい其の儘馳出したくなつたのである。身は纖弱しとは云ふもの、舞臺の上に馴らされた早業は、男でも鋭敏い金太の後から袴髪捕へ懸る手を届かさずして一目散、裾を踏み亂して、通り筋をもの、小半町も。ついと横筋へと身を交し、露次の様になつて居る軒側を前方に抜け、更に引返して合の道に出て、後を回顧ると最早や金太の姿は見えず、其れから思ひ附いて濱邊傳ひに、照らす川影を袖で蔽ふて、半ば騙りながら東へくと進んだがいつの間にか、濱街道の松並木下に懸つて、水車のめぐる音、早や逢初橋は其處に見えるのであつた。

恚う氣が恍然として此の儘遠くのく方へと往つて了ふ様に感じられる。悲しい思ひも、些と漸切れて了つた様な心地で、其の癖涙は引切りなしに眼頭を壓して頬へ傳ふのである。

何たる不運な、悲しい身に産れて來たのであらうと思ふのが初めで、心は次第く以前に立返つて來ると、藤兵衛の顔か思ひ出されて來て、其れが然ながら鬼の顔の様に思はるゝ。奈何せ死なねばならぬ身であるこの思ひが胸に満ちて來て、今日迄生き永らへて來たのは、云はれ戀しい澄夫様が御側に居られて、其の顔が見て居られたばかりなのである。一旦其の側を離れた上は、何として纖弱い自分一人で此の世の荒波を凌いで、生き永らへて行かれやう筈はない

と思ふと、其の儘其處に消へても行さうな氣もし、生憎く響いて來る遠くの浪の音が、自分を早く此の底に來いと叫ぶ様にも聞きなされて跟々としたのであつたが、其處はもう橋の袂であつた。

橋の欄干の上へと凭う手を置いて、動悸烈しく打たしながら走つて來た勞れた身を少し休ませたのであつたが、空の月は、其の憐れな姿を美しく照らし出す。

澄夫様には生命ある内にもう一度御目に懸る事が出来ないであらうかの、もう其の御顔は見られないであらうかと、更に思はるゝと、腸は絞らるゝ心地がして、悲しい溜息をつかれ思はずも涙の眼で四邊を見廻した折しもあれ。

『花之丞待つて居たんだ。』

太い聲で凭う聲懸けて後側の物蔭からぬつと、顯はれて出た人影があつた。驚と愕いた段でなく、はつと胸を抱えて馳け出しさうにしながら、花之丞は其方へと眼を遣ると、いつの間に来て居たものか、藤兵衛なので、

『あゝれ。』

思はずも花之丞は叫び聲を立て、其の儘身を轉じて馳け出さうとする袖を、早くも藤兵衛は取

つて。

『之い、逃るたつて逃すもんかい。』

慳貪に取つた袖をぐつと手許へ引寄せ、初めは恐ろしい眼付で、顔を外向けて、戦々と打慄へて居る花之丞の姿を凝と瞠つて居たが。

『た、花之丞情けねえ了見だなあ。』

云ひ放つて、次第に眼の色を和けて来て、

『花之丞未だ乃公の心が解らねえのかい。之程迄に心盡しを爲て見せてるに、馳出すなんて、餘りぢやねえか、まあ那麽にせずと、氣を落付てくんあ。』

真情の籠つた言葉調子で、拜む様に云ふのであつたが、取つた袖を放し其の儘肩を並べて後の欄干へと身を寄せる。

さんぶくと浪の音、此方から其の浪頭が白く磯に碎けて居るのが、月影にすつと彼方迄長く見渡されて、沖の方には漁火の二つ三つ、處々に散在つて明滅して居る、颯と風が渡つて來ると、磯臭い香が大空一杯に傳つて來て、黒い影を地に印して居る趣ある松が枝は動き、矢張静かな春の夜らしい聲を立てる、街道の彼方、此方を通じて、月草の花が動搖くのみで只一

道に白く、人影さては此處の二人のみである。

『さあ親方、奈何でも爲て下さいまし。思ふ存分になりませうから。』

突として花之丞は云放つのであつた。驚きの眼を睨りながら藤兵衛は。

『花之丞、そりや何を云ふんだい。』

『云ひ切りながら、少し経つて、一體俺が奈何すると思つてるんだい。まあ那麽つまらねえこと云はずと、少しは此方の氣にもなつて呉るがい、や。』

『い、え、親方のお心は私には了と解つて居ます、那麽にじり／＼責めに責めて私をいびり殺さうとなさうより、思ひ切りよく、一思ひに殺して下さいませ。』

涙を乾かしてふる／＼頭へながら云ふ。

『莫、莫伽な何を云ふんだい。』

云ひながら四邊を恐ろしい眼付まで睨し。

少し小聲になつてから。

『花之丞お前へさんは、乃公を鬼か蛇の様に思つて居るんだから、那麽事も云ふたらうが…』

「いや無理もねえや、あんな所を見附つたんだから……。」
然も染々として云つて退けたが、突と顔を上げ。

「其の後、落付いて染々と話さねえから、俺等の心も解るめいが、花之丞お前さんがあの夜見た事は、了然夢として見て置いて御呉んだらうねえ。」
謎を懸ける様な態で屹となつて問ふのであつた。

(二)

『はい。』

『はいとばかりちや解らねえ、まさか澄夫さんに話しやしめへねえ。』

『親方、私や先刻も云つた通り、那麽事は別の事で御座んすから、少しだつても話はいたしません……。』

『嘘ちや無からうねえ。』

『神佛もあります何の嘘を申しませう。』

『いや、有難い、花之丞の其の志を忘れていゝものか……。』

云つてから藤兵衛は些と言葉を途切らし、恠う空の月を仰ぎ見て、

『花之丞……人てえものは思ひも懸けぬ悪事を働かなくちやならないもんで身過ぎ世過ぎの爲にや鬼の心も持たなくちやならないんだ、察しておくんない俺等だつてあんな没義道な事爲様なんて夢にも思はなかつたんだがね、せつば詰つた羽目さ。ねえ花之丞……。』

唾を呑んで、肩を揺らし聲を改めて。

『ねえ、金はなし、借金はかさむ、見柄は張つて行かなくちやならないし、其處へ小屋の建築變へと来たんだらうちやないか。寧ろ一思ひに小屋を閉めて、都落ちと出懸けりや事は濟んだがね、其れちや再度と浮ぶ瀬は無えや、少しは世間へ面出しをした乃公だ、思案に餘つて花之丞が見た通りのあの夜の仕末さ……其の變りにや花之丞、長七爺の後吊ひは、生涯親とも思人とも思つて立派に爲て遣る心算りさ。』

『然うでしやうつて……。』

『俺等の心は呑込めたらうねえ。』

『はい。』

『ちや機嫌よく東京へ歸つてお呉んなさい、俺等花之丞の心根に手を合して拜みこそすれ。先

刻お前さんが云つた様な、そ、そんな怖ろしい見なんぞ夢にも持つて居やしねえ……何處迄も御前さんの力にならうてえ考えなんだ、奈何か嫌だらうが辛抱してね、もう一二年今のままで働いておくんない。其の中にや眼鼻が就くだらうから、然うすりや滅多に、御前さんを打擲つて置きや爲ないから……」

例の太い聲調子で、切なげに藤兵衛は云ふのである。

『え、……』

と生返辭して花之丞は俯顔いて、照頭の涙を密と片袖で拭ふのであつた。

『ねえ、然うして御吳んなさい。不承知かい。』

『……』

『之程云ふても花之丞は未だ俺等の心を買つて呉ないんだねえ。』

『い、え、そ那歴なのぢやないんです。』

『ぢや、何故明瞭と返辭して呉ないんだい。』

『はい。』

『はいなんてそんな煮切らない返辭して呉たつて仕方がねいぢやないか……何かい青柳さんど

別れるのが嫌なのかい。』

『……』

『まだ返辭をしないねえ、よし／＼解つた／＼、だがねえ花之丞、人に情夫は禁物位のは御前さんだつて知つて居るだらう、ばつと噂が立ちや人氣に障らうと云ふもんだ、え、此處だ、乃公だつて一度は若い時あつたんだ、何も藝商賣に堅くるしい生野暮もあるめえ、俺等は何も知らぬ顔して眼を瞑つて居やうから、ねえ、お前さんの側にやともゑも居りや、熊藏てえ軍師が附いて居るぢやねえか、先刻だつて、俺等青柳さんに嫌味一つ云はねえし……ねえ、い、加減に笑顔を見せて、俺の云ふ事を聞いて御吳んなさい。』

云ふ折しも、橋向ふから此方へ馳けて來る人の足音、白い月影の中に、一點黒い姿を落して、した／＼したと遣つて來たが、此方へ近づく儘に、透し見て

『やあ、親方、花之丞も一所ですね。』

『七か、御苦勞だつた、今此處んどこで花之丞を見附けて太略話もすんだ處さ……』
大空を何かしら鳥が啼いて渡つて、街の方から此の月夜にも係はらず、小田原提灯の影が見えて、人の話聲、浪の音は變らずさん／＼響いて居る。

「な、何を云やがるんだい、法界嫉妬もい、かげんにしやがれ、い、年恰好をしやがつて……。」

「奈何せい、年さ、皺がよつて、今に齒が抜けるんだから、御前さんの御氣には召しますまいよ。」

「な、何を……今一週云つて見ろ。」

「何週だつて云ふはねえ、年寄りの私よりか若い花之丞の方がいくらい、か知れないと云ふ事……。」

云ひ回すのは、女房のお澄なので、憤るのは藤兵衛なのである。千束町の自宅の茶の間で、藤兵衛は火鉢の前方に、今何處からか歸つて來たらしい所と見へ、薄い色合の市樂の羽織に、同じ綿入を着て、右手に煙管を左の手を肝煎らしう、火鉢の縁にと置いて居る。女房は銘仙の平生着の儘で、稍毗を釣し上げ、長煙管を斜に構へ、袴先を無暗と突いて、猛り立つて居るの

である。藤兵衛は手にした煙管をどんと勢よく火鉢の縁で叩いて。

「おい、お澄、莫伽も休み〜に云ふがい、せ、世間體の悪い事を云ひなさんな、シト大抵にして止しやがらねえと、其の儘にや爲て置かねえぞ。」

「云つて腹が立つなら、奈何ともお爲なさいな。打擲とも蹴ることも、御前さんこそい、年をじて莫伽も休み〜にお爲なさいなねえ。」

之も邪慳に煙管を火鉢の縁に叩き付け刻煙草を忙しげに詰める手は少し顫へて居る。と、藤兵衛は眼を上げて、凄い色を見せたが思を返したらしう、舌打一つ渡らして、煙管の先に火を移して、其の儘口の端に持つて行き、徐う吐息を吐く様に一つ吹いて見せたが。

「馬鹿〜。」

一喝して、何とも言譯けせず、カラリと煙管を其處へ投出すと。

「馬鹿も無いもんだ、老人の冷水てえ……ほんに如何して、そ、那んな氣が持てたもんだ、恥かしくもない。」

お澄は猶も云ひ回すのであつたが、丁度表の格子戸が開いて、玄關口から

「お竹さん、御内儀さんはお家かい。」

茶番の熊藏の聲なのである。

『えい。』

臺所の方に聲がして、ばた／＼と馳けて出るのは下女のお竹なので、

『え、被入つてよ。些と御伺ひして……。』

云ふ折しも、此方から。

『熊藏かい。お上りな。』

お澄が慳貧な聲で呼ぶのであつた。

『へい、有難う。』

熊藏は返辭して、上へと通り、藤兵衛を見るより。

『親方今日は……。』

挨拶して突と身をお澄の方へと捻ぢ向け。

初めて只ならぬ二人の容子に氣が附いたらしく、少し躊躇ふのであつたが、

『あの、お内儀さん、今其處で横田の旦那に御遇ひ申しましてねえ、之から一直へ往つて居るから、お内儀さんにお暇だつたら御遊びに被入いませんかつて、御言傳なんです。』

云ひながら、眼を藤兵衛へと向けるのであつた。

(一)

『あ、然うかい、お一人かい。』

『えい、然うの様でした。』

『然う。』

と、返辭しながら、片側の茶棚から湯呑みを一つ下し、急須に湯を注しに懸るのであつたが、

『いや、請願かお構ひなく。』

律義さうに熊藏は云ひながら。

『俺や之から些と外へ廻りますから、之でお暇いたします。』

『まあ、い、ちやないか、お茶を一つ。』

お澄の機嫌は稍直り懸けたのであつたが、熊藏は進めらるゝ儘に、一口茶を啜ると、聽て歸つて行くのであつた。

『ぢや、行つて來よう。』

咥く様に云つて、立上ると、今迄黙言つし脂下つて居た、藤兵衛は、白眼見上げて。

『おいお澄、花之丞を横田の旦那に取持ッ相談は止して貰ふせ。』

『何がさ、お可笑な事を御云だねえ。』

『しらはつくれない、丁ど聞いて知つて居らぬ、何が不足で那麽不充ねえ眞似を爲るんだい、花之丞だつて聞きや甚麽に氣まづくするか知れやしねえぢやねえか。』

『然うさ、お前さんの大事のくの花之丞だから。』

『知れた事だ、大事の米櫃なんだい。』

『米櫃が聞いて呆れらぬ、シト……。』

行懸けた身を回してまた座らふとする

『まあ何でもいゝや、行て来るが、が之から一骨折らして稼がす花之丞だ、何が何だつて可笑な眞似をお前が先に立つて爲す様な事は止してくんな。』

『だつていゝぢやないか、小屋が焼けない前やお前さんいゝ様な事云つて、見て見ぬ態して居た癖して居て、まあ私に任かして置いて下さい、一箱や二箱動かして見るから横田の旦那あれ程思ひ込んで居んだから。』

『女賢しうして牛賣り損ふてんだ。俺等にや思惑が丁ど立つて居るんだから止して貰ふ。』

『自分が何う恚うと思ひや、人の儘に爲すのは腹の立つもんだらうねえ。』

『何を云やがるんだい。』

『ぢやいゝぢやないか。花之丞だつて生娘ぢやあるまいし、可愛い男と手を取遇つて隠遊びして居た返禮に、其れ位の事は勤めてもいゝぢやないか。』

『其れがいかねえと云ふんだい。解らぬ奴だ。』

一時睨合つた思ひは、もう溶けて了つたので、お澄は立つた身體を此方へ再び火鉢の前に座るのであつた。

花之丞を此方へ連て歸つてから、藤兵衛は今迄とは打つて變つて、花之丞を大事に懸けるので、花之丞の事と云ふと、自身前に立つて、何かと指圖して、一向にお澄の事を係はすに居るので、浅取果な女心に修羅を燃やして、ついた言葉の行違から怒うも云ふのである。

『何だつてさ。』

煙管を取り上げる。

『まあいゝから止して呉れ。些と考えて居る事もあるし、後で緩然話すと爲やうが、俺等熱海

で花之丞に約束した事があるから……まあ改めて話すと為様から、横田の旦那が待つて居るなら、先へ往つて來な。話の筋は解つて居るんだから、お前い、様に前を繕つて置きな。」
お澄は火鉢の側を放れ、次の座敷へ這入つて一枚着換へると其の儘出て行くのであつたが、藤兵衛は後姿を見送つて、ホッと吐息を吐き何かしら考え込む折しも、表の格子戸ががらりと開いて、駒下駄の女の足音は、先刻湯へ出て往つた花之丞と、ともると附添ひの女中とであつた。

(三)

『親方只今』

濡手拭をともるに渡し、茶の間へと來ると花之丞は些ど座へと手を突き挨拶をするのであつた。

『あゝ大層早かつたねえ。』

笑を見せて愛想よく藤兵衛は應へたが、花之丞が立上つて、其の儘自分の居間と定まつた中二階へ通らうとするのを呼止め。

『花之丞些ど此處に居てくんな、少し話があるんだから。』

『はあ、然うですが、ちや些と髪を一撫してから……。』
片手を髪の邊へと遣つて云ふと。

『あゝ、其れからでい。』
と藤兵衛の云ふのを見て、づいと立上つてとんと階子段に音を立て、中二階へと上るのであつたが、廳で引回して來て、藤兵衛とは少し隔つて火鉢の側へと座るのであつたが四邊を曠し。

『内儀さんは……。』
事をしう尋ねる。

『些ど其處迄出て往つた……。』
應へながら、藤兵衛は今歸つて來た女中を呼んで、花之丞へと茶を注いで出さしめ。
自分も一口啜つてから。

『花之丞話と云ふのは外ぢやねえ、小屋が出來上る迄に一興行爲て見たいと思んだ。』
『はこ。』

湯上りの血の氣の上つた美しい顔の色艶は然ながら紅をさした様で、唇元のくつきりと白い、島田の二日目位の亂れ髪が、却つて艶に見えさすのである。

熱海に居た時よりは、少し肉が附いて、其の顔に髪はしげな影が少なくなつて居るが、其れでも何處となく物案じに悩むで居るらしい所が見え、可愛い二重瞼の眼に譬へられぬ美しい愁の影が溶んで居ると覗われる。

「昨夜俄に話込んで来たんでねえ、四ッ谷の末廣座なんだ、田舎なら頭ではね付けて了ふんだが山の手ではあるが街中の事だから、奈何かと思つて花之丞に相談するんだが、小屋が建築上る迄は、未だ一と月餘りも懸らうと云ふもんだからねえ。」

「四ッ谷の末廣座……其れはまた妙な所から云つて来ましたねえ、宜ろしいぢやありませんか。」

「實はねえ、横濱の方からも相談があるんでねえ、あゝした土地だから悪い事は無んだが、何しろ出遣入に雑用も懸る事だから奈何爲様かと、未だ花之丞に話もせず居るんだ。」

「私も側から些と耳にしたんでしたが、濱迄行きますよりはねえ。」

「然うだらうつて、四ッ谷の方ならばねえ。」

「近くはありますし……其れで何でしやう、然うすりや前方へ泊り込まなくちやならないんでしやう。」

「前方は然うして吳と云ふんだ、其れは奈何でもなるし、俺の考えではあの近所で一軒の家を借りてねえ、其處から通ふとすりやいと思ふんだがねえ、興行の日数は廿日と云つて来たんだが……。」

(四)

云ひながら、藤兵衛は丁と煙管を叩くのであつた。

「然うで御座いますか……。」

笑みを含みながら花之丞は答へて。

「私もねえ、這處にして遊んでばかり居ると、何だか身體が變な心持ちがしますからねえ、前方の何とか云ひましたけえ、改良劍舞を遣つて居た小屋……彼處が近い内に明くと聞いて居ましたから、親方に相談して、彼處でも係はない小屋の建つ中と思つて居たんですよ。」

聲に艶を帯びて、華やかな身の態度で云ふ總ての憂愁は、今其の胸から消え去つたのではない

が、一つは藤兵衛の心からとも見ゆる厚い待遇と、もう一つは世の中は心一つで如何様にも渡れるもの、餘りくよくよ物案じして其れが何になるであらうと云つた様な、浅い快樂主義とまあ云つた様な了見を起し。折々藤兵衛の見て見ぬ態して居るので、可愛い青柳とも遇へるので、凭うも楽しい心態を持つて居るのである。

『いや、忝けねえ、花之丞が然う云ふ了見を持つて居て呉ると、俺も何の位の氣に張合があるかしれねえ。奈何か座主と子方とは持つ持たれつと云ふ通りにねえ、之から不足がある所は腹藏なく云つて貰つてねえ……』

と云ふ時、藤兵衛の胸には自分の秘密を花之丞が知つて居る事に思ひ付いて眼に異様の輝きを見せたが、花之丞も其れと感應して、氣態悪げな色を見せて、話は些と途切れたが。

『まあいゝさくぢや其れでいゝんだ、然うして御吳んなさい。』

云ひ切るので、花之丞は些と頭を下げて、座を立つて、自分の部屋へと這入るのであつた。

低い階子段を通ると放れ屋の中二階になつた六疊一間、下は物置小屋になつて居るので半間の床の間に違ひ棚、塵承には物々しげな隸書の額が懸つて居て、此方の側には散らし松葉模様の襖をはめた押込も附いて居る。床間の直ぐ前には大きな鏡臺が備へ附けられてあつて、其の前

にはメリンス友仙の大模様の褥が設けられてある。

花之丞は褥の上に座はると、丁度下から少し急ぎ足に上つて来たのは、ともゑなので今しも臺所邊りで無駄口を利いて居たらしく、何かしら頬張つて、口をむぐぐとして居る。

『ともゑちやん、何だね、御行儀の悪い。』

『おほ、ほほ……。今ね、お清さんがお薩を炊いたんですつて、其れで一つ貰ひましたの。』

『貰つたのぢやなからう、些と指で黙言つて掴み上げて馳け出して来たんでしやう。』

『あらッまさか、お師匠さんて酷い。』

『ともゑちやんの事だもの、其れ位ゝな事は仕兼ねないからねえ……。其れは然うとお島ごんは未だ歸つて来ないかね、先刻藏前へ行くて云つたから買物を頼で置たのよ。』

『然うですか、何時頃なのです。』

『朝早くなのよ、ほんごにあの人にも困つちもうね。また七さんと何處かで呑んで居るんだらうよ。』

『本統にいゝ年をしてね、然うく今日はお猿が三頭逃げたつて昨夜から大騒ぎでお島ごん許の小屋は休なんでしたねえ。』

どもゑは可愛い口を利くのであつたが、不圖思ひ出した風に。

『ねえ、お師匠さん今お清さんが、私に内密に話して居ましたがねえ……』
云ひながらどもゑはまじくと花之丞の顔を横るのであつた。

(五)

『どもゑちやんまたそんな顔して見せて威かすのぢやなからうねえ。』

『いゝえ、然うぢやないんです、お師匠さんが今お湯へ往て留守にね家の之がねえ。』
どもゑは小指を些と見せて。

『また親方に花之丞の事を嫉いて居たんですつて。』

『あら然う。』

と、花之丞は軽く云つたが、見る／＼其の顔に不快の色が浮ひ上つて、深い憂愁の色へ見えるのである。

『お内儀さんも餘りですね。』

どもゑは慰め顔に云ふ。

『本統だわ、人の心も知らないで、如何して親方とそんな……私は屹度然う思ふのよ誰か、智恵付けでもして那麽にしたんだらうと思ふの。』

『然うかも知れませんがね。お清さんの云ふのはねえ、然うすると、親方が真伽云ふと打擲つてお怒りなすつたんだが、まあ無事に済んで、今ね其れあの禿頭。』

『横田の旦那かい。』

『えい、あの助平爺の處へ呼ばれて一直に往つて被入るんですて、奈何して家のお内儀さんはあんなでしやうねえ。』

『本統に親方もお困りだらうねえ。』
深い溜息を吐いて、花之丞は胸を袷に埋るのであつたが、折しも階下の方でわやわやと話聲がして威勢のいゝ笑聲もするるのであつた。

『あゝお島さんが歸つて来た。』

獨言つ様にどもゑが云ふと、花之丞も顔を上げ。

『あゝ其の様だねえ。』

あらぬ方に眼を遣ると、どん／＼と段梯子に足音を立て、お島は上つて来た。

眼の縁をほんのり櫻色にして、あられもない脚へ楊子して、鼻歌も口の上に乗ねまじり勢は奈何やら、二人が噂して居た様に、七之助と構曳きして居たらしいのである。

「花之丞運なはりましたよ。」

「え、御苦勞さま、有難う御座いましたよ。」

お島が、其處へ頼まれた、お白粉や髪油や櫛やらを並べるのを見て禮を云ふのであつたが、ともろは横合から口を入れて。

「お島さん、い、色ね、また遇つて居たんだらう。」

「遇つて居たて、誰に。」

「情人にさ。」

「おほ、ほ、ほ、……本統にともろちゃんは年の割にしてお察しがいいよ。其の調子で行きや、今にごつさり情夫を拵へるだらうねえ。」

「そうだとも、お島さんの情人も奪つて了ふかも知れないから、氣をお附けなさい。」

「この人つたら、奈何したらいいだらう。私なんか兎ても叶やしないわ、ねえ花之丞。」

花之丞は只微笑むで居るばかりである。

「花之丞。」

と改めてお島は云つて

「今ね、其處で青柳さんに遇ひましてね、御言傳てがありましたよ。」
之も嫣然とする

(六)

「あの良人に遇つたの。」

花之丞は眉をも動かさず、端然として云ひ放つ。

「まあ……今日は奈何したと云ふんでしやう、ともろちゃんばかりかしたと思つたら花之丞も、よ御座んすとも、私もう何にも申しませんよ。」

お島は態どすねた風にして見せる。

「云はなくつても宜くつてよ。」

花之丞は依然として動かさず、稍其の頬に笑を見せ懸けた。

「ちや申さなくつてもいいんですね、後で後悔なさいますな、云つて呉つて手を合したつて聞

おませんよ。』

『あゝいゝとも。』

『眞實にいゝんですねえい、御言傳てなんですよ。』

『あゝ、御念には及びませんよ。』

『呆れッちまいますね。奈何したらいでしせう……。』

微醺の身體を少しくの字なりにし、片手を壁に突いて、お島は微笑の眼を睨る。

『何も呆れなくなつたつていゝぢやないか、ねえ、ともちやん。』

『然うですとも、お島さんこそ情人に遇つて来て……お師匠さんの旦那様に遇つたつて、嘘か眞實か解つたもんぢやありませんよ。』

『まあ、ともちやんといつたら、お覺へて御出で。』

『えゝ、お覺へて居ますとも、ねえ御師匠さん。』

花之丞は鷹揚に黙言いて。

『御自分が情人に遇つて來たてれ場塞ぎに此方の話を持出すんだもの、するいつてありやしない、其の上と言傳賃を取らうと懸つて居るんだからねえ。』

『然うですとも。』

ともちは眼をばち／＼さして相繼打つ。

『あゝ。』

と態とらしい、嘆息聲をお島は洩らしながら。

『敵は大勢味方は一人、頼むお方は二心と來て居るんだから、仕方がない尋常に申上げやうか。』

『あゝ、お溫柔く御云ひなねえ、然うすりや御慈悲に彌助位おごらない事もないから。』

『花之丞は眞實に此の頃は口が甘くなりましたねえ。』

お島が云ふと、ともちは少し乗り出して花之丞の顔を見上げながら。

『丁ど仕込み手が付いてゐるんで御座いますから、其りや當り前ですわ。』

『まあ、ともちやんと云つたら。』

花之丞が睨む眞似をする。

『おほ、ほ、ほ……。』

と、お島は心地快げに笑つたが、膝を立て直して。

『ねえ花之丞。』

一九七